

音楽領域における大学進学に関する心理・社会的要因の検討 - 音楽大学への進学理由および適応に関する質問紙調査データ分析結果から -

著者	佐藤 典子
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18817号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125762

博士学位論文

音楽領域における大学進学に関する
心理・社会的要因の検討

——音楽大学への進学理由および適応に関する質問紙調査データ分析結果から——

東北大学大学院

教育情報学教育部

佐藤典子

目次

第1章 序論	1
1.1 音楽領域における日本の高等教育機関への進学の実状について	1
1.2 国内における大学進学時の心理・社会的問題について	5
1.2.1 大学進学の意味と社会的問題——コストとメリットの観点から——	5
1.2.2 大学進学の意味と心理的問題——進学動機および適応の観点から——	6
1.3 音楽の専門家への発達について	8
1.4 音楽大学等への進学における心理・社会的問題について	10
1.4.1 大学で音楽を専攻する意味と社会的問題	10
1.4.2 大学で音楽を専攻する学生の心理的問題	11
1.4.3 音楽経験，家族のサポート，家庭の音楽環境	13
1.4.4 専攻別の特徴	14
1.4.5 男女別の特徴	15
1.5 本研究全体の目的と主要検討内容	17
第2章 分析データの概要	19
2.1 質問紙調査の概要，および調査対象者の特徴	19
2.2 質問紙調査項目の構成	22
2.3 倫理的配慮	26
第3章 音楽大学への進学理由の認知についての検討 ——大学適応感との関係から——	27
3.1 進学理由項目への回答データの因子分析による検討	27
3.1.1 目的	27
3.1.2 方法	27
3.1.3 結果と考察	28
3.2 進学理由因子と大学適応感との関係についての分析	31
3.2.1 目的	31
3.2.2 方法	31

3.2.3 結果と考察	32
3.3 本章のまとめ	38
第4章 音楽大学進学理由と背景要因との関係について	40
4.1 追加データを加えた因子分析および共分散構造分析によるモデルの確認	40
4.1.1 目的	40
4.1.2 方法	40
4.1.3 結果と考察	41
4.2 積極的進学理由と適応感および背景要因との関係についての分析	45
4.2.1 目的	47
4.2.2 方法	47
4.2.3 結果と考察	50
4.3 本章のまとめ	58
4.3.1 本人の音楽経験について	58
4.3.2 家族のサポートについて	58
4.3.3 家庭の音楽環境について	59
4.3.4 3つの進学理由の性質の違い	59
4.3.5 限界と今後の展望	61
第5章 音楽大学の学生の特徴, および進学調査使用項目と性格検査との関係	63
5.1 音楽大学への進学決定時期に影響を与える諸要因	63
5.1.1 目的	63
5.1.2 方法	64
5.1.3 結果と考察	64
5.2 男女差の検討	67
5.2.1 音楽大学への進学理由の男女差について	
——音楽経験および家族のサポートとの関連——	67
5.2.1.1 目的	67
5.2.1.2 方法	67
5.2.1.3 結果と考察	68

5.2.2 音楽大学への進学時の葛藤に関する男女差	70
5.2.2.1 目的	70
5.2.2.2 方法	70
5.2.2.3 結果と考察	71
5.3 音楽専攻の女子学生が希望するライフスタイルについて	73
5.3.1 目的	73
5.3.2 方法	73
5.3.3 結果と考察	74
5.4 進学調査項目と性格検査との関係性について	76
5.4.1 目的	76
5.4.2 方法	77
5.4.3 結果と考察	79
第6章 積極的進学理由、適応感および背景要因についての経年比較分析	85
6.1 目的	85
6.2 方法	86
6.3 結果と考察	90
6.4 本章のまとめ	96
第7章 総合考察	97
7.1 本研究の成果	97
7.2 本研究の課題と今後の展望	101
謝辞	102
引用文献	104
付録	110
付録 2.1 調査協力をお願い	110
付録 2.2 調査票 (A 音楽大学・1999 年実施分)	111

付録 2.3 調査票 (B 大学・2008 年実施分) -----	119
付録 2.4 調査票 (A 音楽大学・2017 年実施分) -----	127
アブストラクト (英文) -----	133

第 1 章

序論

第1章 序論¹

本章では、先行研究をテーマ別にまとめ、この領域の進学の特徴と問題点を指摘する。その上で、本研究全体の目的および検討する内容を示す。

1.1 では、音楽大学等の音楽領域の高等教育機関に関する国内の状況についてまとめる。

1.2 では、大学進学に関わる心理・社会的問題を扱う諸研究、特に進学動機や大学での適応、大学進学時の経済的な問題の影響やジェンダーに関わる問題を扱う研究等をまとめる。

1.3 では、国内外の音楽の専門家への生涯発達研究を参考にしつつ、音楽の専門家になるための道として日本国内で音楽大学に進学する意味にも言及する。

1.4 では、音楽大学への進学における心理・社会的問題について述べる。

1.5 では、本研究全体の目的と、検討する内容を整理して示す。

1.1 音楽領域における日本の高等教育機関への進学の現状について

本節では、音楽領域の高等教育機関への進学に関する国内の状況についてまとめる。特に、入学するために必要な準備、卒業後の進路問題、現象としての音楽大学進学者の男女比の偏り等、この領域への進学の特徴を示す。なお、本論文で取り扱う音楽領域の高等教育機関とは、主に音楽大学、つまり音楽の専門的な演奏技術や知識を学べる単科大学、およびそれ以外の大学（総合大学や教員養成系の大学）の音楽を学べる学部学科等を示す。結果として、西洋クラシック音楽の演奏技能や知識の習得を主とする教育機関を指すことになる。音楽を主に学べる短期大学等も、類似点が多いと思われるが、演奏技術の習得に特化した音楽専門学校等については、学生の特徴の違いが大きいと考えられるため、本論文の考察対象には含めていない。

入学準備について

現在、国内の高等教育機関の中で、音楽実技を学ぶことができるのは、音楽大学やその他の大学内にある音楽学部や学科等のほかでは、国立の教育大学や教育学部がある（久保田，2017）。そのような教育機関への入学に必要な準備としては、音楽演奏技能、一般的な学力、入学金や学費等の経済的な面での準備を考える必要がある。

¹ 本章の内容は、佐藤（2001, 2005, 2011a）および磯部・佐藤・沖野（2010）において議論された内容を加筆修正したものである。

まず、音楽演奏技能については、進学先によって入学段階で求められるレベルは異なる。演奏を主に学ぶか、教育学部のような教員養成を主たる目的とする大学や学部に入学者で様相が異なる上に、時代による変化の指摘もある（久保田, 2017）。以前には、ピアノ等の演奏技能が入学可能なレベルに達していないという判断から、その他の楽器や演奏を主としない音楽関連学科への進路変更を余儀なくされる場合もあったが、昨今の音楽大学志望者の減少傾向から、入学予定の大学・学部によっては、演奏技能の高さをそれほど求められない場合もあるようだ。

次に、一般的な学力に関しては、特に教育学部のように教員養成を主な目的とする学部への進学の場合、演奏技能以上に準備が必要となることも予想される。演奏技能の向上と、一般的な学力の向上の両方を進めていくことに困難を感じる学生の存在も指摘されるが（梅本, 1999）、本人の資質や教育に関わる環境の充実から両立が可能な学生も多いと思われる。

また、入学段階での入学金や学費等の経済的な側面については、特に私立大学の場合、女子学生が比較的多く進学する文系諸学部と比較すると、音楽大学や音楽学部の学費が比較的高めに設定されていることも多く、その点が入学希望する学生にとって壁となることも当然考えられる。さらに、入学段階の問題だけではなく、いわゆるお稽古事として幼少期から音楽レッスンをスタートさせ、演奏技能レベルに合わせて年齢とともにより高度な指導を受けるようになる過程での諸費用も入れると、その負担は小さいとは言えない。

なお、大学等の高等教育機関入学段階での上記の問題については、高等学校における音楽関連のコースに進学している学生の場合、事前にある程度準備がなされていると思われる。

卒業後の進路について

卒業後の進路について考える上で、まずはその大学で何を学べるかが重要である。大学進学後に学ぶ内容は、演奏技能のみではなく、一般的な大学設置科目と共通する部分も多い。教育学部の場合や、教職課程を取る場合には、当然ながら教員養成に関わる科目を一定数履修する必要がある。選択した大学、学部、その中での選択コース等から、将来クラシック音楽を中心とした演奏家になることを目指すか、学校教員や音楽教室の教師等の教育職に就くことを目指すか、一般就職を目指すかも異なってくる。例えば久保田（2017）は、自身の在籍する関東圏の私立音楽大学の卒業生の進路状況として、進学や留学等さらに音楽の勉強を続ける卒業生が3割、一般企業（音楽関連の企業も含む）が3割、学校教員や音楽教室の講師など教育職に就く卒業生が3割、残りの1割がフリーランスの音楽家という道を選

択していると報告している。景気にも左右されるが、単純に大学卒業生の就職率等と比較すると、卒業直後に経済的な独立が可能な学生の比率は、低めであると言えるだろう。実際、全国約 2000 人の音楽大学の学生を対象にしたアンケート調査（ムジカノーヴァ編集部，2001）²に依れば、彼らが「現在悩んでいること、迷っていること」としては、7 割の学生が「進路や将来」と答えている。音楽大学を初めとする音楽の専門課程への進学のためには、早期からの長期に渡る準備が一般的である。しかし、入学前の準備や入学後の専門知識・技能の習得があっても、卒業後に希望する音楽関連の職種に就くことは容易とは言えない。横山（1998）は質問紙調査³の結果から、音楽専攻学生の卒業後の希望進路について、多様な音楽関連分野への関心の増加について報告しているが、これも彼らを取り巻く厳しい社会状況が反映したものと思われる。

音楽大学の卒業生の職業選択に役立つものとして、音楽領域でのキャリア形成を考えている若者向けの実践的なアドバイス等を示す本も出版されており（例えば、ピーチング，2008；久保田，2008），中には音楽大学を卒業した学生の一般就職に重点を置いた指南書的な本も出ている（例えば，新村，2011；大内，2015）。国内の経済的な不安定さを背景としたキャリア教育への意識の高まりを受けてのこのような流れは、高校生が大学に進学する際に音楽を専攻するかどうか、音楽大学に進学するかどうかの決定にも様々な影響を及ぼしていると思われる。

男女比の偏りについて

音楽大学や大学の音楽学部等への入学者についての男女比率は、以前から女子学生が多く、男子学生が極端に少ないことが指摘されてきた。これについては、杉江（2001）の調査にも表れているように、そもそも音楽関係のお稽古事を子どもが経験する比率について圧倒的に女子が多いことも一因と考えられる。また、女子学生の場合、かつては音楽大学を卒業することが結婚を考える際の好条件と思われていたことが指摘される場合もある（大内，2015）。ただし、久保田（2017）は、文部科学省の学校基本統計を参照したうえで作成され

² 調査の主催はローランド芸術文化振興財団。実施期間は 2000 年 6 月から 10 月。調査協力校としては国公立大学音楽科、私立音楽大学・短期大学。

³ 調査対象は、4 年制の音楽大学、音楽学部または音楽専攻を置く大学の学生、国立教員養成大学で音楽を専攻する学生、2 年制の短期大学音楽科、音楽専攻を置く短大の学生並びに大学院生。集合調査を基本とし、有効回答数は 313 とされている。

た 2009 年度から 2015 年度にかけての音楽学部入学者数の推移のグラフを示し、あいかわらず女子学生が男子学生より多いものの、2012 年以降は減少に転じており、国内の社会経済状況の変化を受けた女子学生の現実的な判断がこのような結果に表れていると解釈している⁴。

海外の研究においては、学生時代の音楽の成績等は女子が高いが、音楽関係の仕事における成功者はより男性が多いという、いわゆるジェンダーバイアスの問題も指摘されているが（1.3 で言及）、国内のデータにはそのような現象に加え、国内特有の事情も表れていると考えられる。

⁴ 2011 年の東日本大震災以降の女子学生の減少が顕著であるとの指摘も行われている。

1.2 国内における大学進学時の心理・社会的問題について

本節では、大学進学に関わる心理・社会的問題を扱う諸研究、特に進学動機や大学での適応、大学進学時の経済的な問題の影響やジェンダーに関わる問題を扱う諸研究をまとめる。本論文においては、心理的問題を中心に扱い、そこに影響を与えることが予想される社会的問題についても言及していくという立場を取るが、まず外枠として社会的問題を先に述べ、その後に心理的問題について議論する。

1.2.1 大学進学の意味と社会的問題——コストとメリットの観点から——

現代の日本社会において大学に進学する意味は、これまでどのように考えられてきているのだろうか。

社会経済的側面としては、まず大学を卒業することで得られるメリットがある。具体的には卒業後に就いた仕事で得られる収入が、高校までを卒業した場合より上回ると一般には考えられており、少なくとも過去についてはデータによる裏づけもある（中島, 2000）。ただし実際には、卒業した大学や専門によっても異なり、その専門が資格などの形で特定の職業に直結するかどうか大きな違いとなる。一方で、大学に行くことでかかるコストも問題となる。大学の授業料等の負担、特に自宅外通学の場合の費用、さらに大学に通うことで本来働くことで得られるはずの賃金が得られなかった部分である「放棄所得」を入れて考えることもできる。このようなコストのうち学費や生活費については、これまでの日本では学生本人より親が主に負担することがあたりまえと考えられてきたが、昨今の経済情勢の変化でそれが困難なものとなりつつあるという指摘もある（小林, 2008）。実際には、学生本人のアルバイトや奨学金等でカバーされる部分もあるが、それが十分でない場合あるいはそう予想される場合、進学先の変更や進学そのものをあきらめるという選択をしてしまう場合も有りうる。実際、先に述べたメリットとコストも勘案した上で、本人が親の考えもふまえながら進学先を決定していることが多いと思われる。大学全入時代の到来を指摘される今日の状況とはいえ、すべての学生が希望する大学や専攻に進めるわけではもちろんない。また、親のコスト意識に関しては、子どもの成績や、親自身の学歴および家庭の経済的状況に当然ながら左右される（小林, 2008）。

このような大学進学にともなうメリットとコストについての考えには、ジェンダーバイアスが存在する。つまり学生が男子か女子かで違いが見られる。実際の大学等高等教育機関入学者の割合は男女差がほぼなくなっている一方で、四年制大学か短大か、あるいは専門学

校に進むか自宅外通学が可能か等については、男子か女子かによって親のとらえ方も本人の判断も異なる傾向にあることを指摘する調査結果がある（小林, 2008）。コスト意識に対する男女差については、大学を卒業することで得られるメリットについても男女差が存在するという予測が学生本人あるいは親にあることが影響していると思われる。そのような認識は、少なくとも現在の日本の状況を調査した実態（本田, 2002; 橘木, 2008）から、かけ離れているとは言いがたい。

1.2.2 大学進学の意味と心理的問題——進学動機および適応の観点から——

経済状況の変化に影響を受けた大学進学の意味と社会的問題、およびそこに存在するジェンダーバイアスについてまず見てきたが、心理学領域の研究では大学に進学する意味およびそこに存在する問題についてどのように扱ってきたのであろうか。

日本でこれまでに行われた大学進学の意味に関わる研究としては、進学動機を扱った諸研究が該当すると思われるが、その構造をとらえた研究において、共通した要因がいくつか見出されている。

例えば淵上（1984）が高校3年生を対象にした進学志望動機に関する質問項目を因子分析して見出した5因子は、専門知識を深め、自分の可能性を求め、趣味や興味を生かせる職につきたい、という「大学の本来的功能」、親孝行のため、親が勧めるから、という「家族への配慮と規範機能」、周りの人が進学するので、まだ社会に出たくない、という「モラトリアム機能」、大学で多くの人に知り合いたい、クラブ活動をやりたい、という「大学の副次的機能」、裕福な生活を送りたい、一流企業に就職したい、という「大学の経済価値機能」であった。それ以前に行われた当該領域の諸研究との比較では、「家族への配慮と規範機能」が新たに見出された点以外は、従来の知見を確認する結果であったという。また、女子高校生を対象とした古澤・山下（1993）の研究でも、「大学の副次的機能」にあたる項目が「大学の本来的功能」に吸収される形ではあるが、大学・短大への進学動機を示す因子として、淵上（1984）で見出された因子にほぼ対応するものが見出されている。

その後行われた研究のうち、八木・齊藤・牟田（2000）と栗山・上市・齋藤・楠見（2001）では、「社会的地位」「得意分野」「無目的・漠然」「エンジョイ」「専門・資格」（栗山ら（2001）では、「資格・専門」）という共通した進学動機因子が見出されている。この中では、「社会的地位」が淵上（1984）の「大学の経済価値機能」に、「エンジョイ」が「大学の副次的機能」に相当し、「得意分野」と「専門・資格」が「大学の本来的功能」に含まれると考えら

れ、「無目的・漠然」は「モラトリアム機能」と共通する要素を持っていると思われる。

また、大学を始めとする高等教育機関への進路選択に関して、例えば、看護系（松下・木村，1997；倉元・小山田・吉沢，2012）や理科系（安達，1999）など、専門の特徴を重視した研究が行われている。いわゆる主要 5 教科の学力以外に、専門の技能を入学の段階で求められるという特徴を持つ、音楽専攻への進路選択行動についても数は少ないが、研究が行なわれている（横山，1998）。

臨床的な研究としては、大学入学後の不適応問題を取り上げるケースが多い。以前の日本のいわゆる受験地獄による学生の心理的負担については昨今の状況の変化により低下傾向にあると思われるが、大学入学後に不適応に陥り、場合によっては退学につながるケースは形を変えて現在も存在しており、その対策を大学側に求める圧力は強くなってきている。このような不適応につながる問題として、学生本人の精神障害や発達障害等の問題に加えて、進学動機の問題を挙げることができる。

これまでに、進学動機と大学での適応との関連を示す研究が行われてきている。初期の研究としては、柳井（1975）が、心理学的な意味での自己の適性と対応させて自分の専門を選んだ人に比べて、就職条件や親のすすめなどの社会的、環境的要因に基づいて自分の専門を決めた人の適応度が低いことを示す研究結果を報告している。また、濱田（1981）は、留年問題の解明を目的として行った調査の結果として、留年群では「特に進学の理由はない」という回答が非留年群の 2 倍の約 20%であり、留年群の進路選択の仕方が、他律的で、他者志向が強いことを指摘している。2000 年以降の研究としては、大学志望動機が入学後のストレスや学校嫌いに及ぼす影響を示した斉藤（2002）などを挙げることにもできる。さらに、学部によって学生の適応の状況が異なることも予想される。

このように、大学への進学動機は積極的なものが望ましいが、男子学生と女子学生を同じように考えることが難しい面もあると思われる。昨今の経済状況の影響で、女子学生自身も自分の得意分野を活かし、将来の仕事につながる専門的知識や技能の習得や、資格取得のような明確な目的を持った進学を行う者の比率が高まっていると予想されるが、同時に、単に仕事に就くことを目指すだけでなく、結婚や子育てというライフイベントと仕事との両立を考えた進路選択が行われる可能性も高いと思われる。また、女性の仕事との関わり方についての学生の親世代の認識が、学生自身の進路選択に影響する場合もあれば、親子での認識のずれが学生の心理的ストレスとなる可能性もあるだろう。

1.3 音楽の専門家への発達について

本節では、国内外の音楽の専門家への生涯発達研究を参考にしつつ、音楽の専門家になるための道として、音楽大学等に進学する意味にも焦点をあてる。

音楽の専門家への発達について過去に様々な研究が行われている。これらの研究は一般的に、遺伝か環境かという発達に関する古典的論争と符合するように、本人の遺伝的素質すなわち才能か、家庭の音楽的環境のどちらかに焦点があてられることが多い。ただし、Davidson, Howe, & Sloboda (1997) も指摘するように、前者に基づく説明は、主に過去の有名な音楽家の伝記等の資料に基づくものが多い。それに対して、環境を重視した実証研究も行われるようになってきている。Sloboda & Howe (1999) は、音楽達成の違いを才能に帰する考えが必ずしも唯一の妥当な説明ではなく、むしろそれに替わる説明を進めることが科学的に有用であり、社会的にも有益であるとしている。また、これまでに、親のサポートの意義を示す研究 (Davidson, Howe, Moore & Sloboda, 1996)、教師の性質と生徒の技能向上にかかわる研究 (Davidson, Moore, Sloboda & Howe, 1998) など、環境要因に関する一連の研究を音楽経験のある若者や、その保護者への質問紙調査やインタビュー調査のデータに基づいて行っている。音楽の専門家への発達にかかわる研究において、以上の議論に見られるように遺伝か環境のいずれかに注目が集まることの多い理由としては、音楽家になること、特に西洋クラシック音楽の演奏家になることが、比較的早期に決定してしまうという印象が強いためであろう。

才能と環境の側面が過度に強調されると、本人の音楽への動機づけや、音楽を専門とすることをいかに決断するかなどの要因が軽視されてしまう恐れがある。しかし、音楽の専門家になるという長期間にわたる複雑な発達過程を説明することは、本人の動機づけにも焦点をあてなければ不可能である。例えば、Manturzewska (1990) によるポーランドの音楽の専門家を対象とした生涯発達研究においては、音楽家として成功するには家庭環境とともに音楽への動機づけの高さも重要であることが指摘された。また、入学の難度が非常に高い音楽学校の生徒を対象とした Sloboda & Howe (1991) の研究においては、その中でも特に達成度の高い学生は家庭ほど音楽的な環境にあるとは言えないことや、ほとんどの両親が積極的に子どもの進歩を監督し励ましており、子どもの動機づけを高めるような親のサポートが重要であるということを示している。

また、音楽の専門家への発達を取り上げるとしても、1.1 でも言及したように現在の日本において音楽に関係する仕事は様々であり、発達過程のどの段階に焦点をあてるかによっ

でも異なったアプローチが必要である。梅本（1999）にも指摘されているように、西洋クラシック音楽を中心とした音楽の演奏や教育を行う仕事に関して言えば、音楽大学をはじめとする音楽の専門教育機関の出身者が就くことが多い。つまり、現在の日本における音楽の専門家への発達を考える際には、音楽大学等への進学、という選択が重要な意味を持つものと思われる。

1.4 音楽大学等への進学における心理・社会的問題について

本節では、音楽大学等への進学にかかわる心理・社会的問題について取り上げる。まず、大学で音楽を専攻する意味と社会的問題について言及してから、学生の心理的問題について検討する。さらに、進学動機（理由）や大学での適応状態に関係する要因について取り上げ、専攻別の特徴についても言及する。

1.4.1 大学で音楽を専攻する意味と社会的問題

1.2 では、一般的な大学に進学する意味を考えてきたが、現在の日本において大学で音楽を専攻すること（音楽大学に進学することを多く含む）の意味とは何であろうか。

経済面のメリットについては、将来音楽演奏や指導等に関わる仕事に就くことを考えている学生にとって、そのための知識と技能を身につけることができ、身につけたことを周りに示すことができ、音楽に関連する仕事につながる人脈を得やすくなる場合もあるだろう。ただし、1.1 でも述べたように大学で音楽を専攻しても、実際には音楽に関係する仕事につくことを選択しない、あるいは選択できない学生もいる。音楽以外の専門領域を大学で学んでいる場合でも、特定の資格（特にその資格がないと就けない仕事に関わるもの）を得られる分野以外において、大学の専門とは関係のない仕事に就くことは、日本において特に珍しいことではない。ただしその場合、その専門以外の一般的な仕事の領域で役立つ知識や技能および態度等の習得が必要となるだろう。大学で音楽を専攻した学生が、卒業後に音楽とは関係のない領域で仕事を行う場合、学生自身がやりたいと思うような音楽領域の仕事に就くために必要な実力が十分身につかなかったと学生自身が客観的な情報に基づいて判断した場合や、音楽領域以外の仕事をしてみたいという学生自身の積極的な希望によるものもあると思われる。しかし、音楽領域の仕事の厳しさや不安定さを懸念して、十分な情報を収集して自身の希望について熟考する前にあきらめてしまう場合もあるだろう。1.1 でもとりあげたが、現実問題として音楽大学卒業者の一般就職をむしろ積極的に後押しするような本さえ出版されており（大内, 2015）、そのような状況は、これから大学で音楽を専攻したいという学生の進路選択にどのような影響を与えるかについては一考の余地があるだろう。

一方、大学で音楽を専攻した場合のコストについて私立大学の場合には、1.1 でも述べたように一般的な文系の大学・学部等と比較すると、より高額な費用が必要になる場合が多い。また入学以前にも、特定の楽器等の演奏技能の向上や楽典等の知識の習得のために、学業の塾とは別に音楽関係のレッスンを受けることが多く、そのための費用がかかることもコス

トに含まれてくる。以上のようなメリットとコストについて学生本人あるいは親がどのように考えるかによって、たとえ音楽を大学等の高等教育機関で学びたいという希望を学生が持っていたとしても、実際の進学につながるか否かに重要な影響を与えていることは十分考えられる。

次に、音楽専門領域におけるジェンダーバイアスについて取り上げる。国外の音楽専門家への発達に関わる研究において、ジェンダーバイアスが存在するという指摘がある (O'Neill, 1997)。つまり、音楽演奏技能等を幼少期から学ぶのは、女子が多いが、実際に音楽領域で仕事をしている者の割合、特に指揮者、作曲家、プロのクラシック音楽系の演奏家、プロのポピュラー音楽系のミュージシャン等には男性が多いという指摘である。このような傾向は、日本においても存在していると思われる。日本において音楽系で大学等の高等教育機関へ進学する者については女性が多い傾向にあるが (久保田, 2017)、一方で社会における音楽専門領域の仕事での状況は、先に挙げた国外の研究での指摘と同様の傾向を示すと見られる。そもそも日本では音楽領域のみならず、さまざまな仕事の領域でのジェンダーバイアスについて国際比較の観点からも問題視されることが多く、大学を卒業した女子学生が正規雇用者として就業を継続できるか、子育て等との両立についての支援は十分であるかについて様々な問題が指摘され続けているが、改善の歩みは遅いようである (本田, 2010)。

1.4.2 大学で音楽を専攻する学生の心理的問題

このような社会的問題がある中で、音楽領域への進学に関する心理面での研究はといえば、ほとんど行われていない状況であり、音楽大学へ進学した大学生を対象とした進学理由⁵等を問う質問紙調査 (後述) を筆者が開始した 1999 年時点で、データに基づいた研究は上村 (1995) や横山 (1998) が挙げられるのみであった。心理的問題に関係することも予想される大学で音楽を専攻する学生の進学理由 (動機) はどのようなものなのだろうか。一般的な大学進学動機研究において見いだされた因子と重なるものか、あるいはこの領域の学生に特有のものなのだろうか。

音楽大学の学生が自認する進学理由には、1.2 で言及したような一般的な大学進学志望動

⁵ 一般的な大学進学動機研究は、大学進学を控えた高校生が調査対象であることが多いが、本研究で行う調査 (後述) は、既に音楽大学に入学した学生が対象であるため、本人が過去を振り返り、どのような「理由」で進学したと認知しているかを問題とする。

機研究で見出された要因と一致する面もあるが、いくつかの点では異なると予想される。

まず、「大学の本来的功能」に関わる態度が異なる可能性がある。音楽大学に進学する多くの学生は、入学の時点である程度は大学における専門領域への興味、能力や適性を備えており、さらにそのことを自覚していると思われる。一般の大学では、高校までの授業科目を勉強して受験し、大学に入って初めて専門教育を受けるという形になることが多いが、音楽大学を受験するためには専門の音楽についての知識と技能を入学以前にある程度身につけていなければならない。そのため、大学進学以前から長期間にわたって学校での勉強以外に音楽のレッスンを受けることが必要である。音楽に興味がないとレッスンの継続は難しく、また、レッスンによって技能も身につくはずである。さらに、音楽大学への進学に特別な準備が必要であることは、一般の大学への受験準備との両立を困難にする。そのため、自分の適性を考えて進路の選択を行うことが必要になるはずである。

次に、音楽領域においては家庭環境の影響が大きく、家族のすすめやサポートが進学において大きな位置を占めるとと思われる。Davidson et al. (1996) にも示されているように、特に音楽的な家庭環境とは言えなくても、音楽活動に理解を示す家族の存在は重要である。音楽大学への進学は、準備期間も含めてある程度の経済力が必要になることから、家族の影響は大きいと考えられる。

さらに万が一、目的意識が不明確なままの音楽大学への進学、あるいは結果的な不本意入学であったとしても一般の大学におけるそれとは内容が異なるとと思われる。音楽大学への進学の場合、音楽的な環境の影響が強いために、本人の意志と言うよりも、周りの強いすすめによって進路を選択する可能性もある。また、子どものころから一定の訓練をしてきた結果、大学進学の時点で他に選択したいものがないと考え、消去法的な選択が行われることもあるだろう。久保田(2008)は、経済学や経営学で使用されている「埋没費用」という用語を用いて、音楽にかけてきた時間や費用の多さが、それ以外の領域への進路変更を行う意思決定を難しくしているという指摘も行っている。

このように音楽大学への進学理由は、一般の大学へのそれと構造が異なる部分もあると考えられる。そのため、この領域における予備的な研究を行うには、まず音楽大学への進学独自の要因を考慮した調査を行う必要がある。

また、音楽大学で現在学んでいる学生の適応状態と、このような進学理由(動機)は関係しているのだろうか。

どのような動機での音楽大学への進学が、大学におけるより良い適応と結びつくか、とい

う情報は進路指導において有益である。音楽大学へ進学するためには、いわゆる主要5教科の勉強とは別の技能や知識を身につけることが必要となるため、両立には困難が伴い、悩みの種ともなりうる。また、梅本(1999)は、音楽大学の学生を対象とした調査(梅本, 1992; 梅本・三雲, 1993)の結果をふまえ、職業選択が大学などの進路選択の時点でかなりの程度規定されてしまうために、進学選択のときから将来について悩み、大変なストレスを感じる者が見られることを指摘している。

このような音楽大学への進学の特特殊性を考慮し、一般的な大学進学動機と進学後の適応との関係についての研究結果と比較検討することで、音楽大学への進学に関わる進路指導にとって重要な情報になるであろう。

まず、一般的な大学への進学動機に関する研究に見られた「大学の本来的功能」(測上, 1984)に近いものを持っていれば音楽大学でも適応が良いのか、ということについて確認する必要がある。上述のように、先行研究においては、自分の興味や能力に合った選択をしている学生の大学における適応感が高いとされている。音楽を専門とする音楽大学の学生は、これに合わない選択をすることはないようにも思われる。もし、入学時にほとんどの学生が「大学の本来的功能」に近い動機で進学したとすれば、この高低が大学における適応の違いを予測しない可能性もある。しかし、実際には、必ずしもそのような理由による進学が行われていないかもしれない。その場合、一般の大学進学研究において見出されたものと同様の適応感との関連が見られることも考えられる。

また、他者のすすめを理由とする入学が、本当に大学における不適応につながるのかという点についても考慮すべき問題が残る。一般の大学への進学について扱った研究において、留年群に他律志向が多かったという研究結果が示されたことから、他者のすすめが主たる進学理由として認知されている場合には、不適応になる可能性が高いと予想される。ただし、音楽を専門とする学生は、家族や音楽的環境の影響が大きく、これが音楽技能向上に大きく影響しているため、重要な他者からのすすめを進学理由として認知することが必ずしも不適応につながらない可能性もある。

さらに、先述した「消去法的な選択」のような、音楽大学への進学において特有の進学理由があるとするならば、そのような要因と進学後の適応についても考える必要があるだろう。

1.4.3 音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境

1.4.2 でとりあげた進学理由(動機)および大学での適応状態に影響を与える要因にはど

のようなものが予想されるだろうか。可能性のあるものとして、音楽経験、音楽大学への進学をはじめとする様々な音楽活動に対する家族のサポート、これらに影響を与えると予想される家庭の音楽環境を挙げることができる。

まず、音楽経験が豊富であることについては、累積練習時間と演奏技能の到達レベルを示した Ericsson, Krampe, & Tesch-Romer (1993) や、Sloboda, Davidson, Howe, & Moore (1996) の研究を示すまでも無く、技能を高める要因であると考えられる。大学で音楽を専攻するためには、一定レベル以上の訓練は行っていると考えられる。

次に、家族のサポートは音楽技能の発達に大きな影響を与えており、その中でも特に両親の役割が重要であることは指摘されている (Davidson, Howe & Sloboda, 1997)。入学時および入学準備期間に必要な経費等を考えても、親によるあらゆる面からのサポートが必要と考えられる。また、両親の信念や行動および家族間の関係が、子どもの音楽技能の進歩や、音楽家としての肯定的なセルフ・イメージの発達に与える影響を示すケース研究も行われている (Davidson, & Borthwick, 2002)。また、進路選択行動という観点からは、清水・坂柳 (1988) が概観しているように、多くの進路発達研究者が、両親、兄弟、友人などの私的なエージェントからの働きかけの重要性を指摘している。

家庭の音楽環境については、必ずしも親がプロの音楽家であったり、演奏活動を行っていたりする必要はないが、音楽鑑賞も含めた親自身の音楽への関わりの強さは、子どもの音楽活動に影響を与えることが示されてきた (Sloboda & Howe, 1991; Davidson, Howe, Moore & Sloboda, 1996)。また、家庭の音楽環境の豊かさが、子どもへのサポートにつながる可能性もあるだろう。

1.4.4 専攻別の特徴

音楽大学に進学する学生の中でも、専攻する楽器等によって学生の特徴に違いがあるとの指摘もある (横山, 1998)。専攻する人数の多い楽器としては、まずピアノを挙げることができる。ピアノ専攻の場合、音楽大学に進学するためには、幼少期からの豊富なレッスン経験が必要条件と考えられる。つまり、大多数の学生の音楽経験年数は長く、幼少期からレッスンはじめており (横山, 1998; 梅本・三雲, 1993)、かつそれを継続することが可能な家庭環境にあると考えられる。ただし、現代の日本において稽古事としてピアノを女兒が習う事はきわめて一般的なことである。例えば、全国の大学・短大・専門学校等の高等教育機関に在籍する学生を母集団とした調査の結果報告 (杉江, 2001) によれば、女子の稽古事経

験率の中でもピアノは 65.4%と他の楽器と比べて最も高い。男子学生の場合、15.6%と女子学生に比較すると少ないが、男子学生の中では比較的経験者の多い楽器である。また、レッスン開始年齢について、一般の女子大学生の中での音楽経験者と、音楽大学の学生とでは、ほとんど変わらないというデータもあるが（梅本, 1992）、その一般女子大学生の多くはピアノを習っていたものと推測される。

ピアノ以外の楽器専攻⁶として、管楽器・打楽器専攻を取り上げると、どちらも、ピアノ専攻の学生に比べ、経験年数の短い学生が多く（横山, 1998; 梅本・三雲, 1993）、小学校や中学校における吹奏楽などのグループ活動によって、音楽を志すことが多いと考えられている。また、藤田（2002）は、特に経済的な面での家庭的背景による進学希望の格差を是正する効果が、中学校の部活動にあることを指摘している。このような経済的要因以外にも、両親の音楽関与の程度や、子ども自身のジェンダーに対する両親の反応などにより、幼少期の音楽に関する家庭環境は様々である。吹奏楽などの部活動は、家庭によって提供される音楽的環境を補う役割を持つと思われる。以上のことから、この専攻において家庭の音楽環境の影響力は相対的にピアノ専攻ほど大きいものではないと考えられる。

楽器以外の専攻として、例えば声楽専攻の場合、学校の部活動における合唱活動などを通して、音楽を志すことも多いと考えられる。また、声楽の場合、自分の肉体が楽器に相当するため、肉体的な成熟が声楽を専門として決定する上で重要であり、声楽を専門として始める年齢は遅く、専門教育期間も短いことが多いと指摘されている（横山, 1998）。つまり、音楽経験やそれを可能にする家庭の音楽環境という点については、管楽器・打楽器専攻と共通する面もあると思われる。

音楽教育専攻は、音楽教育に関わるものを中心とした学科を学ぶことが、演奏技能の習得とともに重視されている。つまり、大学における履修内容としては、上述の他専攻の学生に比べると一般大学生に近いと考えられる。また、経験年数については、専門とする楽器が多様である事に対応してばらつきが大きいと考えられる。

1.4.5 男女別の特徴

1.1 でも取り上げたように、大学で音楽を専攻する学生は圧倒的に女子学生が多い。もと

⁶ 本論文で扱うデータ内では専攻者の人数が少なかったが、弦楽器専攻学生は早期からの演奏技能習得が必要である等、ピアノ専攻学生と類似の特徴を持つと予想される。

もと女の子に楽器演奏に関するお稽古事経験者が多いことが一つの理由として考えることはできる。その他の理由としては、卒業後の仕事に関する不安定さが将来主に家計を担う役割を果たすであろうと一般的には期待される男子学生の進学を困難なものにしていることも考えられる。一方で、かつての良縁への期待という親世代の認識もあってか、比較的反対されにくい状況にある女子学生が、進学しやすい分野であったという指摘もあるが（大内, 2015）、これについては昨今の経済状況のためか若干の減少も見られ、女子学生の意識に変化が出てきている可能性もある（久保田, 2017）。

1.5 本研究全体の目的および主要検討内容

本研究においては、ここまで見てきたような特徴を持ち、この分野特有の問題も抱えていると予想される音楽領域における大学進学に関わる心理・社会的要因について検討することを目的とする。特に、音楽の専門家への発達の一過程として、日本国内においては重要な意味を持つと考えられる音楽大学への進学を中心に提起し、この領域特有の社会的状況が、音楽大学に進学した学生の心理的な特徴としてどのように表れているのかについて、質問紙調査を実施することで明らかにしていきたい。

以下に、検討する内容を整理して示す。

①音楽大学へ進学した学生の進学理由（動機）の認知の構造について明らかにする（因子分析を用いた検討）。

②そのような進学理由の特徴を明らかにするために、進学した大学での適応感との関係を検討する（共分散構造分析を用いたモデル①の作成）。

③進学理由および大学での適応感に影響する可能性のある背景要因（本人の音楽経験、家族からのサポート、家庭の音楽環境）との関係について検討する（共分散構造分析を用いたモデル②の作成）。

④音楽大学へ進学した学生のその他の心理的特徴（進学決定時期、進学理由および葛藤要因の男女差、女子学生の希望するライフスタイルおよび進路）、および進学調査に使用した項目と性格検査との関係について検討する。

⑤進学理由および適応感をはじめ、モデル②で扱った変数について、経年比較分析を行い、変化の有無について検討する。

これらの内容を検討するために、音楽大学の学生および総合大学の音楽専攻学生を対象とした質問紙調査を実施し、その回答データを分析する。調査および分析データの概要については第2章で述べ、第3章～第6章においてデータの分析を中心に示す。上記の①および②については主に第3章（第4章でも触れる）、③については第4章、④については第5章、⑤については第6章で検討を行う（Figure1.1 参照）。さらに、これらのまとめとして第7章で総合考察を行う。

主要検討内容	検討を行う章および節
検討内容①	第3章
音楽大学への進学理由の認知の構造(因子分析)	3.1
検討内容②	第3章／第4章
進学理由と大学での適応感の関係(モデル①)	3.2
追加データを加えた再検討	4.1
検討内容③	第4章
背景要因との関係(モデル②)	4.2
(本人の音楽経験, 家族のサポート, 家庭の音楽環境)	
検討内容④	第5章
学生の心理的特徴, 性格との関係	
進学決定時期	5.1
男女差(進学理由, 進学時の葛藤)	5.2
女子学生の希望するライフスタイルと進路	5.3
進学調査項目と性格検査との関係	5.4
検討内容⑤	第6章
モデル②使用変数について経年比較分析	

Figure1.1 主要検討内容と検討を行う章および節との対応図

第 2 章

分析データの概要

第2章 分析データの概要

本研究において使用するデータは、音楽大学および総合大学で音楽を専門に学ぶ学生を対象とした、大学進学理由や進学後の適応状態等をテーマとした質問紙調査によって得られたものである。本章の2.1では、質問紙調査の概要および調査対象者の特徴について述べる。2.2では質問紙調査項目の構成についての詳細を示し、2.3では分析データを取得する際の倫理的配慮について述べる。

2.1 質問紙調査の概要、および調査対象者の特徴

質問紙調査を行った対象は、関東圏のA音楽大学の学生と、同じく関東圏の総合大学であるB大学で音楽を主に学ぶ課程の学生である。A音楽大学は、西洋クラシック音楽の教育を中心に行っており、本研究の調査対象学生には主にピアノや管楽器・打楽器などの楽器演奏や声楽を専門に学ぶ学生と、音楽教育を専門に学びつつ演奏についても指導を受けている学生等が含まれている。B大学は総合大学であり、本研究で調査の対象となった学生が所属する音楽を専門に学ぶ課程においては、実技と理論の両面を重視する教育を謳っており、演奏実技指導も行われている。取得できる資格としては、教職、音楽療法士（補）、学芸員、司書があり、幅広く学ぶことが推奨されている。中には本格的に演奏家を目指す学生もいる。

A音楽大学では、1999年および2000年には1,2年生、2009年および2010年には2年生、2017年調査では1,2年生を対象に調査を実施した¹。本研究における主な分析対象データは1999年および2000年調査の2年生女子学生データであるが、それ以降のデータは主に経年比較分析を行うために使用する。また、音楽大学の特殊性から、女子学生数に比較して男子学生数が極端に少ないため、主な分析対象としては女子学生データを用い、男子学生データについては、性別による差の有無を検討する目的等で使用するにとどめる。

B大学の音楽を専攻する学生対象の調査では、進学に関わる質問紙調査と並行して性格検査であるNEO-FFIまたはNEO-PI-Rを実施した（性格検査の詳細については該当箇所(5.4)で詳述する）。B大学データについては、B大学教員との共同研究としてデータ収集

¹ 本研究の調査対象であるA音楽大学の2年生はすべて教職科目の履修学生であるが、この大学では大多数の学生が履修する傾向が見られた。また、1999年および2000年の1年生はすべて音楽教育を専門とする学生であり、2017年の1年生は、新しいカリキュラム下の多様な専攻の学生を含んでいた。

を行った。本研究の中では、進学に関する質問項目と性格特性との関係を検討するために使用する。またデータ数の男女差については、A 音楽大学と同様の特徴を持つため、女子学生データを分析には使用する。

以下に質問紙調査の実施手続きについて示す。

(1) A 音楽大学調査の手続き

1999 年, 2000 年調査

1999 年 10～11 月および 2000 年 6 月に、A 音楽大学において、授業中に担当教員（著者および調査依頼を承諾した A 音楽大学教員）の指示によって行なわれた。質問紙の最初のページを読み、本調査の趣旨および手続きについて理解した上で、自発的に回答してもらう形式で依頼を行った。実施時間は 30 分ほどであり、教室内において無記名で回答が行われ、その場で回収された。回答したくない場合は、回答せずに提出のみは行うよう指示した。

2009 年, 2010 年調査

2009 年 11 月および 2010 年 12 月に、A 音楽大学において、1999 年および 2000 年調査と同様の手続きで行われた。

2017 年調査

2017 年 9 月に A 音楽大学において、1999 年および 2000 年調査とほぼ同様の手続きで行われたが、この年の調査においては、「調査協力をお願い」（付録 2.1）を別に配布し、必要かつ十分な情報の提供を行い、インフォームドコンセントを得た。また、調査開始前の指示によって、調査協力が自由意志で判断できること、判断の結果に関していかなる不利益も被らないこと、いったん承諾した協力を無条件で中断できることを保証した。

(2) B 大学調査の手続き

2008 年, 2009 年調査

2008 年および 2009 年に B 大学において、授業中に担当教員（共同研究者）の指示に従って行なわれた²。進学に関わる調査票の実施時間は 30 分ほどであり、教室内で回答が行わ

² この調査は 2013 年まで継続して実施されているが、本研究ではそのうち 2008 年および 2009 年データのみを使用している。

れ、その場で回収された。性格検査である NEO-PI-R（2008 年は、その短縮版である NEO-FFI を使用）については、時間内に回答が終わらなかった学生については後日担当教員に提出する形式をとった。

なお、B 大学における調査では、進学に関わる調査票と性格検査との対応を確認するために記名式とした³。

³ B 大学において、この調査が開始された時期には倫理審査の仕組みが出来上がっていなかった。

2.2 質問紙調査項目の構成

A 音楽大学において 1999 年に実施された進学に関する質問紙の調査項目が基本となる。後の調査において、一部項目に修正を加えている。質問項目作成手順および 1999 年度調査項目の詳細、2000 年以降の調査年度ごとの変更点について以下に示す。

(1) 予備調査

1999 年 5～6 月、関東圏の A 音楽大学の 2 年生（102 名）に対して授業時間内に「自己の音楽に関する発達について」というタイトルで小レポートの提出を求めた。梅本（1992）を参考にして、これまでの音楽経験、大学で音楽を専攻することを決めた理由や、そのことについての家族や友人の影響、さらに今後の進路希望について現在考えていることなどを各自でまとめるよう指示した。この小レポートについては、主に授業の課題として提出されたものであり、その後の授業にも活用した。

(2) 本調査項目の詳細

1999 年度に行った調査票の構成としては、タイトルおよび回答依頼文に始まり、フェイス項目、音楽経験や家庭の音楽環境についての質問、進学理由についての質問、適応感に関する質問等が含まれていた。調査項目の詳細は以下の①～⑩の通りである。なお、調査票については、1999 年に行った A 音楽大学対象の調査（付録 2.2）、2008 年度に B 大学において行った調査（付録 2.3）、2017 年に行った A 音楽大学対象の調査（付録 2.4）で使用したものを付録として示す。なお、全調査の概要については Table2.1 に示す。

A 音楽大学 1999 年調査項目

①フェイス項目

学年，専攻，性別等についての質問項目を用意した。

②音楽経験に関する質問

大学入学前までの音楽レッスン経験，音楽関係のグループ活動経験，音楽の好み等についての質問に回答させた。

③家庭の音楽環境

Table2.1 全調査の概要について

実施年度	1999年	2000年	2008年	2009年	2009年 2010年	2017年
調査対象大学	A音楽大学	A音楽大学	B大学	B大学	A音楽大学	A音楽大学
調査対象学年	1,2年	1,2年	主に1年	主に1年	2年	1,2年
調査内容	<u>付録2.2</u> 参照		<u>付録2.3</u> 参照		<u>付録2.4</u> 参照	
①フェイス項目	I.1～6	同左	10.1～6 (変更あり)	同左	同右 (変更あり)	10.1～6
②音楽経験	II.1～5	同左	1.1～5 (変更あり)	同左	同左	1.1～5
③家庭の音楽環境	III.1～9	同左	2.1～9	同左	同左	2.1～11 (10,11は新項目)
④進学決定時期	IV	同左	3	同左	同左	3
⑤進学理由	V.1～30	同左	4.1～30	同左	同左	4.1～30
⑥葛藤要因	VI.1～12	同左	5.1～12	同左	同左	5.1～12
⑦大学適応感	VII.1～14	同左	6.1～13 (2項目削除, 13は新項目)	同左	同左	6.1～13
⑧希望進路	VIII.1～12	VIII.1～13 (13は新項目)	7.1～13	同左	同左	7.1～13
⑨女子ライフ	IX.1～7	IX.1～7 (選択肢変更)	8.1～7	同左	同左	8.1～7
⑩男子ライフ	X.1～7	X.1～7 (選択肢変更)	9.1～7	同左	同左	9.1～7
性格検査			NEO-FFI	NEO-PI-R		

直近の調査票から変更があった場合には、()内に説明を加えている。

家庭の音楽環境に関わる 9 つの選択肢を作成し、当てはまるものすべてに○を付ける形式で回答させた。

④進学決定時期

自分の中で音楽大学への進学を決定した時期について、年齢を記入する形式で質問を行った。

⑤音楽大学への進学理由に関する項目

予備調査で得られた自由記述を参考に、進学理由等に関する質問項目を仮作成し、KJ法の手続きに準じて30項目にまとめた。回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの5件法とした。なお、分析を行う際には、「あてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点に換算したものをを用いた（以下、5件法の場合の点数化は、同様の方法で行った）。

⑥音楽系への進学を妨げる可能性のあった葛藤要因に関する項目

予備調査で得られた自由記述を参考に、音楽大学進学時の葛藤に関する質問項目を12項目作成した。内容としては、学生自身の葛藤に関する項目と、他者との関係の中で生じる葛藤に関する項目を含むものである。回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの5件法とした。

⑦大学での適応感に関する項目

予備調査で得られた自由記述および柳井・前川・鈴木・石塚・豊田（1993）で用いられた項目を参考に、現在の大学での生活状況に関する12項目を作成した。回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの5件法とした。

⑧大学卒業後の希望進路に関する項目

予備調査で得られた自由記述および一般的な音楽大学卒業生の進路を参考に、大学卒業後の希望進路に関する12項目を作成した。回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの5件法とした。

⑨女子学生向けのライフスタイル

大学卒業後の希望進路との関係で、女子学生のみを対象とする将来のライフスタイルに関係する7つの選択肢を作成した。回答は、最も当てはまるものを一つ選択する形式であった。

⑩男子学生向けのライフスタイル

大学卒業後の希望進路との関係で、男子学生のみを対象とする将来のライフスタイルに

関係する 7 つの選択肢を作成した。回答は、最も当てはまるものを一つ選択する形式であった。

(3) 2000 年以降の調査における変更点について

A 音楽大学 2000 年調査における変更点

「希望進路」項目を 1 項目増やし、13 項目とした。また、ライフスタイルについての選択肢の内容は全面的に見直して差し替えた。このような変更は、その後の調査にも引き継がれた。

B 大学 2008 年～2009 年調査における変更点

「大学適応感」項目を 2 項目削除し、別の 1 項目に差し替えた。元の項目が音楽大学の学生を対象とした項目であったため、総合大学の音楽専攻の学生であっても回答が可能であるように修正を行ったものである。また、「音楽経験」についての質問方法にも一部修正を加えた。なお、導入文や一部の説明文、およびフェイス項目は、音楽大学だけでなく、B 大学で音楽を専門とする学生にも回答が可能なものになるよう変更を加えた。

A 音楽大学 2009 年および 2010 年における変更点

「大学適応感」項目、「音楽経験」についての質問の一部、および説明文について、B 大学調査において行った変更点を、そのままその後の A 音楽大学における調査にも適用した。

A 音楽大学 2017 年調査における変更点

「家庭環境」項目を 2 項目増やした以外は、2009 年および 2010 年に A 音楽大学で行われた調査と基本的な項目変更は無い。ただし、別紙として「調査協力のお願ひ」（後述）を配布したため、導入文は削除した。

2.3 倫理的配慮

A 音楽大学の調査においては、すべて無記名とした。B 音楽大学の調査においては、性格検査との照合のために記名式とした。すべての調査で質問紙配付時に十分な説明を行い、回答については自発的に行われた。2017 年度調査においては、先述の「調査協力をお願い」（付録 2.1）を配布し、よく読んだ上で回答が行われた。

なお、2017 年調査を行う前に、東北大学において倫理審査を受けて承認を得た（承認 ID：教情研倫第 17-002）。倫理審査の機会が無かったそれ以前の調査についても同時期に審査を受け、「非該当」であった。

第 3 章

音楽大学への進学理由の認知についての検討

——大学適応感との関係から——

第3章 音楽大学への進学理由の認知についての検討——大学適応感との関係から——¹

本章では、まず、音楽大学への進学理由を学生自身がいかに関知しているかに焦点をあてる。そのため、A 音楽大学の学生を対象として行った質問紙調査から、進学理由に関する項目への回答データを用いて因子分析を行う (3.1)。

次に、学生自身に認知された進学理由についての因子の特徴を検討するために、大学での適応感との関係を示すモデルの作成（専攻別の多母集団比較）を行う (3.2)。

3.1 進学理由項目への回答データの因子分析による検討

3.1.1 目的

音楽大学の学生を対象とした調査データを用いて、進学理由に関する学生自身の認知の構造を検討する。

3.1.2 方法

(1) 分析対象データ

1999 年に A 音楽大学において実施した質問紙調査に回答した 1, 2 年生 418 名には、器楽学科（ピアノ専攻、管楽器専攻）、声楽学科、音楽教育学科の学生が含まれていた。そのうち男子学生 29 名のデータを除き、さらに、今回の分析対象となる項目についての記入に不備のない、女子学生 378 名分のデータを分析対象とした。その内訳は、1 年生 94 名（全て音楽教育学科）、2 年生 284 名（器楽学科・ピアノ専攻：145 名、器楽学科・管楽器専攻 35 名、声楽学科：77 名、音楽教育学科：27 名）であった。

(2) 分析使用項目

進学理由に関する質問項目は 30 項目であるが、今回の分析対象となる、より直接的な進学理由を示すものは 19 項目である。進学理由に関する項目への回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの 5 件法とした。なお、分析を行う際には、「あてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1 点に換算したものをを用いた。

(3) 分析方法

¹本章の内容は、佐藤（2001）を加筆修正したものである。

進学理由に関する 19 項目のうち、分布に偏りの大きかった 1 項目を除き、18 項目で探索的因子分析を行った。なお因子分析には、統計パッケージ SPSS 7.51J for Windows を用いた。

3.1.3 結果と考察

進学理由に関する 18 項目を用いて、因子分析を行った。スクリープロットと因子の解釈可能性を考慮して 5 因子を抽出した。因子間に相関があることが予想されたため、斜交解を求めた。複数因子に高い負荷の見られた 1 項目を除いた 17 項目で再度因子分析を行い、同様の 5 因子に分解されることを確認した。この最終 17 項目および平均値と標準偏差を **Table 3.1** に、因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）を **Table 3.2** に示す。

見出された 5 因子は、他者からの影響を示す因子（「他者のすすめ」）と、それ以外の 4 因子（「将来展望」「能力活用」「同一視」「消極的動機」）である。

他者の影響については、以下の観点から作成された 3 項目に負荷の高い 1 つの因子が抽出された。第 1 の観点は、音楽専門家への発達についての先行研究から、より音楽発達に影響の大きいことが示されていた両親と音楽の先生の影響である。第 2 の観点は、一般的な進学理由研究で取り上げられた他律志向と比較が可能な他者の「すすめ」である。

音楽大学への積極的な進学動機を示すと思われる「将来展望」「能力活用」「同一視」の 3 因子は、測上（1984）の「大学の本来的功能」にあたるとと思われる。ただし、自分の能力に気づき生かそうとする「能力活用」、音楽活動を行うこと自体がアイデンティティの形成につながる可能性を示す「同一視」、より「大学の本来的功能」に近い「将来展望」に分かれたことは、入学以前から専門である音楽についての知識・技能を身につける必要のあるこの分野の特徴が現れたものとも考えられる。

さらに、「消極的動機」因子には、「他の選択肢がなかった」という、音楽大学進学時に生じる可能性のある消去法的な選択を表す項目が集まっている。なお、明確な進学理由を持たないことを示すと思われる「なんとなく決めてしまった」という項目は、この因子ではなく、「将来展望」に逆転項目として含まれた。

また、因子間相関を見ると、「将来展望」「能力活用」「同一視」の 3 因子間には、中程度の正の相関が見られた（ $r=0.39\sim0.49$ ）。この 3 因子には、音楽大学への積極的な進学動機という上位因子を仮定することが妥当と考えられる。また、「消極的動機」と「将来展望」との間には中程度の負の相関が見られた（ $r=-0.42$ ）。これは、自分には音楽以外の選択肢が

Table3.1 進学理由項目と基礎統計量 (N=378)

進学理由項目		M	SD
「能力活用」の因子			
V1	自分の音楽的な才能に気づくことができたから	2.63	(1.22)
V2	他の教科より音楽が得意だったから	4.16	(1.14)
V3	自分の能力を生かすことができると思ったから	3.78	(1.14)
「同一視」の因子			
V4	音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから	3.56	(1.45)
V5	音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから	4.00	(1.18)
V6	音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから	4.08	(1.08)
V7	音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから	3.19	(1.36)
「将来展望」の因子			
V8	専門的な知識や技術を身につけたかったから	4.26	(1.10)
V9	希望の仕事につくために必要だと思ったから	3.77	(1.33)
V10	自分の求めている生き方ができると思ったから	3.66	(1.30)
V11 R	なんとなく決めてしまった	2.40	(1.56)
「消極的動機」の因子			
V12	勉強はしたくないが、大学には行きたかったから	1.96	(1.37)
V13	音楽以外に得意な科目がなかったから	2.22	(1.42)
V14	音楽以外に好きなものがなかったから	2.13	(1.39)
「他者のすすめ」の因子			
V15	父親のすすめがあったから	1.54	(1.18)
V16	母親のすすめがあったから	2.29	(1.58)
V17	音楽の先生のすすめがあったから	3.08	(1.62)

Rのつくものは、逆転項目である。

Table3.2 進学理由項目の因子パターン行列(プロマックス回転後)および因子間相関

項目	因子	同一視	将来展望	消極的動機	能力活用	他者のすすめ
V5	音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから	0.87	-0.08	-0.02	0.01	-0.02
V4	音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから	0.63	-0.04	0.28	-0.05	0.05
V6	音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから	0.56	0.06	0.00	0.13	0.03
V7	音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから	0.47	0.17	-0.11	-0.10	0.11
V10	自分の求めている生き方ができると思ったから	0.06	0.66	0.02	0.09	-0.03
V8	専門的な知識や技術を身につけたかったから	-0.02	0.63	0.09	0.00	0.05
V9	希望の仕事につくために必要だと思ったから	-0.09	0.59	0.08	-0.06	0.05
V11 R	なんとなく決めてしまった	-0.16	-0.48	0.12	0.01	0.13
V13	音楽以外に得意な科目がなかったから	-0.01	0.06	0.96	0.03	0.00
V14	音楽以外に好きなものがなかったから	0.13	0.07	0.75	-0.03	-0.09
V12	勉強はしたくないが、大学には行きたかったから	-0.15	-0.24	0.34	0.07	0.05
V3	自分の能力を生かすことができると思ったから	0.05	-0.06	-0.09	0.97	-0.06
V1	自分の音楽的な才能に気づくことができたから	-0.11	0.30	-0.02	0.54	0.09
V2	他の教科より音楽が得意だったから	0.02	-0.11	0.20	0.53	0.08
V16	母親のすすめがあったから	0.01	0.00	-0.03	-0.03	0.91
V15	父親のすすめがあったから	-0.01	0.13	-0.01	0.02	0.62
V17	音楽の先生のすすめがあったから	0.21	-0.16	-0.10	0.08	0.34
因子間相関	将来展望	0.49				
	消極的動機	-0.04	-0.42			
	能力活用	0.39	0.42	-0.02		
	他者のすすめ	0.03	-0.20	0.20	0.19	

ない，と消極的に考えることが，将来に向けて積極的に知識や技能を身につけようとする明確な目的意識が希薄であることと関係することを意味する。

3.2 進学理由因子と大学適応感との関係についての分析

3.2.1 目的

音楽大学への進学理由の認知が、大学進学後の適応とどのように関わっているかを検討する。さらに、専攻間の相違についても考察する。

3.2.2 方法

(1) 分析対象データおよび分析使用項目

分析においては、進学後の適応に関して異質であることが予想される 1 年生のデータを除き、2 年生 ($N=284$) のみを対象とした。また、モデルの作成には、3.1 の進学理由についての因子分析により最終的に残した 17 項目と、進学後の適応感を測定する項目を用いた。

適応感を測る項目については、現在の大学での生活状況に関する 12 項目への回答に対する主成分分析の結果、第 1 主成分の負荷が高かった 8 項目 (Table 3.3 参照) をモデルの作成に用いることとした。適応感に関する調査項目への回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの 5 件法であり、分析を行う際には、「あてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1 点に換算したものをを用いた。

Table 3.3 適応感項目と基礎統計量 ($N=284$)

	適応感項目	<i>M</i>	<i>SD</i>
V18	大学での生活は充実している	3.79	(1.15)
V19	大学に入ること、自分の音楽の幅が広がった	4.10	(1.17)
V20	大学で必要な知識や技術が身につけられている	3.97	(1.02)
V21 R	音楽がきらいになった	1.64	(1.04)
V22 R	音楽に関して自信がなくなった	2.71	(1.27)
V23 R	大学では、自分の好きな音楽ができないと思う	2.30	(1.31)
V24	もう一度選びなおせるとしても音楽大学に進学する	3.35	(1.49)
V25	もう一度選びなおせるとしても今の専門を選ぶ	3.49	(1.47)

Rのつくものは、逆転項目である。

(2) 分析方法

音楽大学の学生に認知された進学理由と大学における適応感との関係を示すために、統計ソフトウェア Amos 4.0 を用いて、平均・共分散構造モデルを作成した。

進学理由項目に関する 5 因子のうち、「将来展望」「能力活用」「同一視」の 3 因子を下位因子として持つ「積極的動機」因子に、「消極的動機」「他者のすすめ」を加えた 3 因子が大学への適応感を予測するものとして、モデルを作成した。ただし、「消極的動機」と、「積極的動機」の下位因子である「将来展望」との間の相関を考慮したパスを導入した。

以下の、4つの専攻別の比較を行った。

器楽学科 ピアノ専攻 ($N=145$, 以下「ピアノ群」とする。)

器楽学科 管楽器専攻 ($N=35$, 以下「管楽器群」とする。)

声楽学科 ($N=77$, 以下「声楽群」とする。)

音楽教育学科 ($N=27$, 以下「教育群」とする。)

豊田 (1998) を参考に、モデルに以下の制約を入れた。

まず、平均・共分散構造モデルを用いて因子の比較を行う上で、「ピアノ群」の因子の平均を 0、分散を 1、切片を 0 と固定し、他の群の因子については「ピアノ群」との比較で推定を行うこととした。ただし、このモデルの識別のためには、一部の因子の切片または平均値をすべての群で固定する必要がある。進学理由に関する因子の平均および切片の値に関するグループ間の差異を推定することは、この研究の中心的検討課題であるため、「適応感」の因子についてすべての群の切片を 0 に固定した。

また、因子間の比較をおこなうために必要な、観測変数の切片はすべての群で等しいという制約を入れた。さらに、因子の性質が群間で等質であると見なして、ある構成概念が、観測変数に与える影響は、すべての群で同じであるという制約を入れた。また、「積極的動機」因子については、同様の理由から、3つの下位因子へ与える影響について、すべての群で等しいという制約を入れた。

なお、誤差の分散がすべての群で等しいという仮定も導入した。

その他、モデルの識別のために、各因子に関して観測変数への影響を示す係数のうち任意に 1 つを選び、その変数への影響を示す係数の値を 1 に固定した。

3.2.3 結果と考察

方法で述べた平均・共分散構造モデルを **Figure 3.1** に示した。なお、**Figure 3.1** には、因子の性質を表すために、群間で等値の制約をおいたパス係数について、ピアノ群の標準化係数を例として示してある。なお、標準化解であるため、分析方法で述べた群間における等値の制約や固定した係数の値が、そのままの形ではパス係数の値に反映されていない。

この多母集団モデルの適合度は、 $CFI=0.940$, $RMSEA=0.052$ であり、モデルがデータに適合していることが示された。

今回検討の対象とするのは、まず、自由に推定を行う以下のパラメータについてである。すなわち、3つの進学理由に関する因子（「積極的動機」「消極的動機」「他者のすすめ」）か

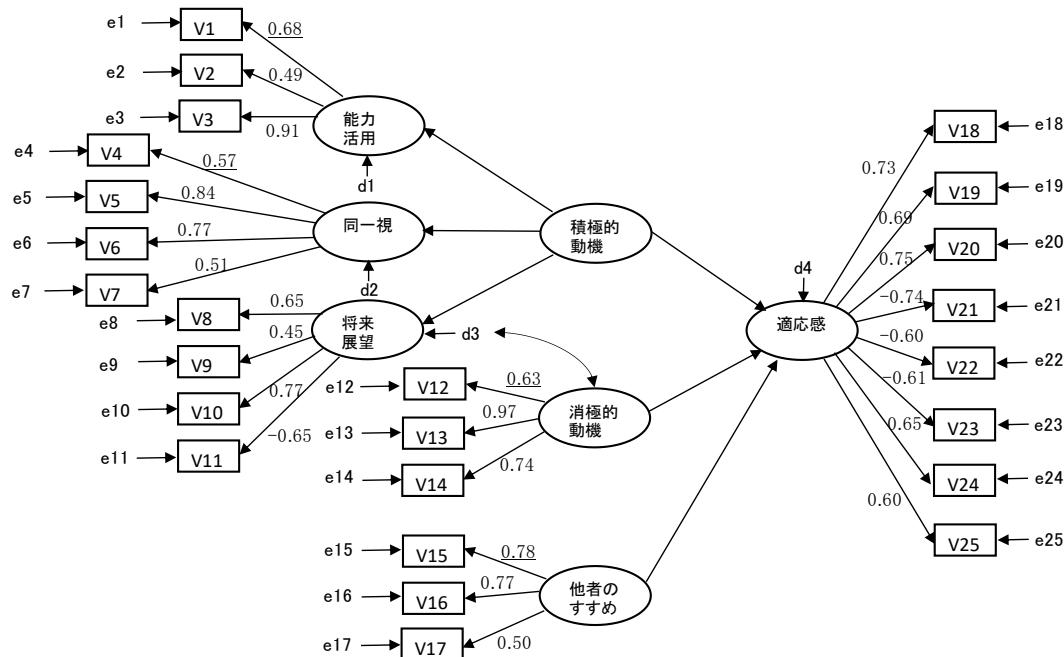


Figure3.1 進学理由と大学での適応感の因果モデル

パス係数の標準化解は、すべて群間で等値の制約をおいたものである。
なお値を1に固定したものについては、下線を付した。
(標準化解は、ピアノ群(N=145)のもの)

ら「適応感」への影響を示す係数、「積極的動機」の下位因子である「将来展望」因子の誤差成分と「消極的動機」因子との間の相関である (Table 3.4, Table 3.5 を参照)。また、進学理由に関する因子のうち、3 つの外生変数 (「積極的動機」「消極的動機」「他者のすすめ」) の平均・分散と、3 つの内生変数 (「能力活用」「同一視」「将来展望」) の切片については、方法で述べたように「ピアノ群」を基準とした群間比較を行う (Table 3.6 を参照)。

以下、群ごとに検討を行う。なお、パス係数の大きさの判断基準については、相関係数に関する一般的な目安 (豊田・前田・柳井, 1992) を参考にする。つまり、絶対値が 0.2 未満でほとんど関係がないものとみなし、0.2 以上 0.4 未満で「弱い」、0.4 以上 0.7 未満で「中程度の」、0.7 以上の場合に「強い」関係を示すとみなして解釈を行う²。また、パス係数の大きさに言及する際には、標準化解 (Table 3.4) を用いる。

「ピアノ群」については、まず「積極的動機」から「適応感」への影響を示す係数が 0.69 である。専門である音楽活動を自分の一部と感じ、自分の能力を生かし、将来を見通して進学を考えるとという積極的な動機に基づく理由で進学した場合に進学後の適応感も高くなり

² パスが有意であるかどうか重要な判断基準になり得るが、今回の分析においてはデータ数が少なかったため、影響力の大きさに関する判断基準のみを使用している。

Table3.4 自由推定を行ったパラメータ(標準化解)

専攻	パス	積極的動機 →適応感	消極的動機 →適応感	他者のすすめ →適応感	将来展望の誤差と 消極的動機との相関
ピアノ群	(N=145)	0.69	-0.40	-0.17	-0.41
管楽器群	(N= 35)	0.66	0.17	-0.34	0.04
声楽群	(N= 77)	0.59	-0.27	0.01	-0.60
教育群	(N= 27)	0.51	-0.21	0.37	-0.77

Table3.5 自由推定を行ったパラメータ(非標準化解)

専攻	パス	積極的動機 →適応感	消極的動機 →適応感	他者のすすめ →適応感
ピアノ群	(N=145)	0.61 (0.08)	-0.35 (0.07)	-0.15 (0.07)
管楽器群	(N= 35)	0.54 (0.15)	0.15 (0.14)	-0.29 (0.15)
声楽群	(N= 77)	0.66 (0.20)	-0.24 (0.11)	0.01 (0.18)
教育群	(N= 27)	0.53 (0.26)	-0.18 (0.18)	0.26 (0.15)

非標準化解の下のカッコ内に示した値は、標準誤差である。

Table3.6 進学理由因子の平均・分散・切片(非標準化解)

因子	積極的 動機		消極的 動機		他者の すすめ		能力 活用	同一視 切片	将来 展望 切片
専攻	平均	分散	平均	分散	平均	分散	切片	切片	切片
ピアノ群(N=145)	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	0.00	0.00
管楽器群(N= 35)	-0.37 (0.34)	0.94 (0.35)	0.21 (0.18)	0.82 (0.23)	-0.34 (0.21)	0.85 (0.29)	0.10 (0.21)	0.25 (0.23)	0.22 (0.21)
声楽群(N= 77)	0.17 (0.19)	0.36 (0.13)	-0.11 (0.13)	0.56 (0.12)	-0.28 (0.13)	0.34 (0.11)	0.02 (0.14)	-0.05 (0.15)	0.21 (0.14)
教育群(N= 27)	0.02 (0.31)	0.44 (0.22)	-0.13 (0.18)	0.61 (0.19)	-0.15 (0.24)	0.98 (0.36)	-0.67 (0.22)	-0.18 (0.23)	-0.16 (0.21)

非標準化解の下のカッコ内に示した値は、標準誤差である。

なおピアノ群は、固定した値を示した。

やすいことが示唆される。次に、「消極的動機」から「適応感」へのパスは、 -0.40 と低い負の係数であり、他により良い選択肢がなかったという消極的な理由で進学した場合に、進学後の適応感も低くなる可能性が示唆される。なお、この「消極的動機」因子と「将来展望」の誤差成分との間には、 $r=-0.41$ という負の相関が見られ、「消極的動機」による進学が将来への見通しに乏しいものであることがうかがわれる。さらに、「他者のすすめ」から「適応感」へは、ほとんど影響が見られないことが示された (-0.17)。「他者のすすめ」は、両親と音楽の先生によるすすめに関する 3 項目に影響を与える因子である。両親のすすめがあることは家庭の音楽環境の充実を示し、音楽の先生のすすめがあることは本人の能力の高さを示す可能性がある。一方、「他者のすすめ」を進学理由として学生自身が認知していること、つまり進学に関して他律志向的であることは、過去の進学理由研究の結果から、大学における不適応につながる可能性が指摘されていた。今回の結果は、この両者の効果が相殺されたためとも考えられる。

この「ピアノ群」とほぼ同じ構造が見られたのは、「声楽群」である。まず、進学理由に関する因子から適応感へのパス係数については、「積極的動機」から「適応感」への影響を示す係数が 0.59 と中程度の強さを示し、「消極的動機」から「適応感」へのパスは、 -0.27 と低い負の係数であり、「他者のすすめ」から「適応感」へは、影響が見られないことが示された (0.01)。なお、「消極的動機」因子と「将来展望」の誤差成分との間には、 $r=-0.60$ という負の相関が見られる。また、「ピアノ群」を基準として、3 つの外生変数の平均・分散について比較すると、分散の値が小さくなってはいるが（「ピアノ群」の 1 に対して、「積極的動機」 0.36 、「消極的動機」 0.56 、「他者のすすめ」 0.34 ）、その分散の大きさの違いに比べると平均は、「ピアノ群」とほとんど違いが見られない（「ピアノ群」の 0 に対して、「積極的動機」 0.17 、「消極的動機」 -0.11 、「他者のすすめ」 -0.28 ）。さらに、3 つの内生変数の切片についても、ほとんど違いが見られない（「ピアノ群」の 0 に対して、「能力活用」 0.02 、「同一視」 -0.05 、「将来展望」 0.21 ）。声楽専攻群とピアノ専攻群は、例えば Manturzewska (1990) にも示された音楽経験年数の違いなどから、異質な群と見なされることが多い。しかし、本研究で扱った音楽大学への進学理由という観点からは、構造に大きな違いはないということが示された。

「管楽器群」の進学理由因子の平均・分散・切片については、「ピアノ群」や「声楽群」とほぼ同様の値を示した。ただし、進学理由因子から適応感へのパス係数については、「積極的動機」から「適応感」への影響を示す係数が 0.66 と中程度に高い点以外は、異なる傾

向を示した。まず、この群の「消極的動機」から「適応感」へのパスは、上記2群に見られるような負の係数が示されていない(0.17)。その原因として、「消極的動機」因子と「将来展望」の誤差成分との間がほぼ無相関である($r=0.04$)ことを考慮する必要があるだろう。つまり、今回使用した項目で測定される「消極的動機」は、「将来展望」因子特有の目的意識がはっきりしている傾向と負の相関にある場合にのみ、「適応感」にマイナスに働く可能性が示唆される。また「他者のすすめ」については、 -0.34 と低い負の係数を示した。そもそも一般的な進学理由研究では、親のすすめなどの環境的要因に基づく進学は不適応につながるものとして扱われていた。もし、音楽領域特有の事情として、家族や先生のすすめが、本人の音楽能力の高さや音楽的環境の豊かさを示すものであれば、上述の効果と相殺されることが予想され、本研究においても、「ピアノ群」と「声楽群」ではそのような結果が示された。しかし、「管楽器群」の場合、「他者のすすめ」は大学での「適応感」を低めている。この専攻に進学した学生の音楽的環境の特徴が、「他者のすすめ」の表す意味に影響している可能性がある。例えば梅本(1992)の研究にも見られるが、この専攻の学生には、中学校の部活動等において自主的に楽器演奏の訓練を開始した者が含まれている。そのような学生の音楽的環境において家族や先生のすすめは重要な位置を占めていないために、適応を高める要因として働いていないことが予想される。ただし、「管楽器群」のデータ数($N=35$)は少なく、結果の解釈は慎重に行う必要がある。

「教育群」について、進学理由に関する因子から適応感へのパス係数を見ると、「積極的動機」から「適応感」への影響を示す係数が0.51を示し、「消極的動機」から「適応感」へのパスは、 -0.21 と低い負の係数であることは、「ピアノ群」や「声楽群」と同様である。また、「消極的動機」と、「将来展望」の誤差成分との間にも、これら2群と同様に負の相関($r=-0.77$)が見られる。ただし、「他者のすすめ」から「適応感」へのパスは、低い正の係数である(0.37)。これを、この専攻の特徴と考えるには、十分な根拠が見出せない。さらにデータを集めた上で検討する必要があるだろう。また、進学理由に関する因子の平均・分散・切片については、「積極的動機」因子の下位因子である「能力活用」について、「教育群」の切片が他群より低い(「ピアノ群」と比べて、 -0.67)点に特徴がある。つまり、「積極的動機」因子からの影響を受ける前の「能力活用」因子の値に差が見られるのである。これはおそらく、音楽教育専攻へ進学する学生には、他の専攻と比べて幅広い能力が求められるため、一つの分野に特化した専門技術に関しては他群ほどの自負を持っていないためと思われる。

以上のように、専攻群間の違いも一部に見られたが、「積極的動機」が大学における高い適応感を予測し、「消極的動機」が将来への見通しの欠如と関連する場合に適応感を低める可能性を示唆し、「他者のすすめ」による適応感の予測は困難であるという基本的構造が示された。

3.3 本章のまとめ

本章では、音楽大学の学生対象の調査における、進学理由に関する項目への回答について因子分析を行った。その結果、音楽大学への積極的な進学動機という上位因子を仮定できる3因子（「将来展望」「能力活用」「同一視」）、他者からの影響を示す「他者のすすめ」因子と、他の選択肢がなかったからという「消極的動機」因子の、5因子が見出された。

また、専攻間の比較が可能な、多母集団の平均・共分散構造モデルを作成し、音楽大学への進学理由の認知が、進学後の適応とどのように関わっているかを検討した。その結果、群間の違いも一部に見られたが、進学理由を示す3因子（「積極的動機」「消極的動機」「他者のすすめ」）と、「適応感」との関係についての基本構造が確認できた。

まず、「将来展望」「能力活用」「同一視」を下位因子として持つ「積極的動機」因子が、音楽大学におけるより高い適応感を予測するという結果は、一般的な大学進学に関する研究（例えば、柳井，1975）結果と同様に、音楽領域の進学においても、自分の興味や能力にあった選択が、大学における適応感に大きな影響を与えている事を示すものである。また、音楽大学への進学においても、一般大学への進学と同様に、必ずしもすべての学生が自らの積極的な動機づけによって進学しているとは限らないという側面を示しているという見方も可能であろう。どちらにせよ、音楽大学への進学においても、本人の興味・能力・将来展望に対応させた選択がなされることの重要性が示唆されたと言えるだろう。

次に、「消極的動機」が、将来への見通しの欠如と結びついた時に、大学における適応感を低めることを示した結果は、明確な進学理由を持たないことと、大学における不適応との関係を示した濱田（1981）の結果とも対応する。つまり、音楽大学への進学においても、無目的入学と大学での不適応との関連が示されたと言えるだろう。ただし、今回見出されたこの「消去法的な選択」を示す因子の意味の解釈については注意が必要である。自分にとって他により良い選択肢がないという判断が、本人の将来の見通しに関する探索の結果行われているものであれば、表現としては「消極的」であっても、大学における不適応とは必ずしもつながらない可能性に留意すべきであろう。

また、他者からの影響を示す進学理由についての因子と、大学における適応感との関係については、明確な結果は得られず、両者の関係に複数の要因が関与すると予想された。つまり、他者からのすすめを進学理由として認知することが、その学生の他律志向を示す可能性とともに、音楽特有の事情が反映されたものであることも考えられた。しかし、実際にこのような要因が関係しているかについては、今後の研究によって明らかにしていく必要がある。

るだろう。

そのほかに、以下の点についても今後さらに検討する必要があるだろう。

「積極的動機」については、進学後の適応感を予測することが明確に示されたが、このような進学への動機づけの高さを形成する要因について検討することは、進路選択とその動機づけに関する研究領域において重要な情報となるだろう。形成要因としては、例えば音楽経験、家族のサポートや、家庭の音楽的環境などが考えられる。このような点については、**第4章**において検討したい。

また、本章で分析に用いたのは、すべて女子のデータであったが、この点についても更なる検討を行うべきであろう。まず、過去の研究（例えば、権藤, 1974；三川, 1985）において大学の進学理由の男女差が指摘されている。本章で見出された進学理由に関する因子について、男女間で何らかの違いが見いだされるかについて確認する必要があるだろう。また、音楽の専門家への発達過程の一時点を取り上げたものとして今回の研究を見た場合にも、女性特有の傾向の有無を男性データとの比較で見ていくことは重要である。女性の進路発達を理解するために行われるようになった、進路に関する自己効力感研究において、性差を扱った研究が積み重ねられてきた（廣瀬, 1998）ことから、その重要性をうかがい知ることができる。音楽領域における男子学生のデータも含めた分析については、**第5章の5.2**において検討したい。

第 4 章

音楽大学進学理由と背景要因との関係について

第4章 音楽大学進学理由と背景要因との関係について

本章では、まず4.1において、3.1で行った因子分析および3.2で共分散構造分析によって作成したモデルを確認するための分析を、2000年にA音楽大学において行った調査で得られた追加データも含めて行う。

次に4.2において、ここまでに行った因子分析およびモデル作成の結果、重要と思われる音楽大学への積極的な進学理由および大学での適応感と、本人の音楽経験、家族からのサポート、家庭の音楽環境という背景要因との関係を示すモデルを、共分散構造分析を行って作成し、これら変数の関係性について検討する。その際に、専攻別の多母集団比較も行う。

4.1 追加データを加えた因子分析および共分散構造分析によるモデルの確認¹

3.1では、A音楽大学の学生を対象とした1999年調査から、女子学生データ(1, 2年生)を用いて音楽大学への進学理由の因子分析を行って検討し、5因子を抽出した。また3.2では、同じ調査データから2年生女子データのみを用いて進学理由と学生の大学における適応感との関係を示す共分散構造分析によるモデルを作成し検討した。その結果、積極的な進学理由を持つことが適応感を高めることを示す等の特徴が明らかとなった。同時に各専攻の比較も行ったが、専攻によっては学生数が少ないためにモデルの安定性の面で問題が残った。より安定したモデルを作成するため、追加データも含めての再検討が必要と思われる。

4.1.1 目的

3.1および3.2の分析結果について確認するために、追加データ(A音楽大学で行った2000年調査データ)を加えた分析を行い、進学理由の構造、および共分散構造分析によって作成されたモデルの再検討を行うことを目的とする。

4.1.2 方法

(1) 分析対象データ

1999年および2000年にA音楽大学において実施した質問紙調査で回答を行った2年生女子学生のデータから、今回の分析対象となる項目についての回答に不備のない、531名分

¹ 本節の内容は、佐藤(2002)を加筆修正したものである。

を分析対象とした。その内訳は、ピアノ専攻 243 名、管楽器・打楽器専攻 109 名²、声楽専攻 111 名、音楽教育専攻 68 名であった。

(2) 分析使用項目

今回の分析では、**3.1** の分析で最終的に残った 17 項目を使用した。項目への回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの 5 件法であり、「あてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1 点に換算したものをを用いた。

(3) 分析方法

追加データを加えて、進学理由について上記に述べた 17 項目を用いて再度、**3.1** と同様の探索的因子分析を行った。その因子分析結果を参考に、進学理由と適応感の関係を示す **3.2** と同様の平均・共分散構造モデルと修正モデルを作成し、比較検討を行った。

4.1.3 結果と考察

まず、進学理由について **3.1** で行った因子分析で最終項目として残った 17 項目を用いて因子分析を行った。5 因子を指定し、斜交解（最尤法・プロマックス回転）を求めた結果、**3.1** と同様の結果は得られなかったが、唯一の逆転項目である 1 変数を除いて再分析した結果、同様の 5 因子に分解されることを確認した (**Table 4.1**)。因子間相関についても **3.1** と同様、「将来展望」「能力活用」「同一視」の 3 因子間に正の相関 ($r=0.38\sim 0.47$)、「消極的動機」「将来展望」間に負の相関 ($r=-0.28$) が見られた。また「他者のすすめ」「能力活用」間に正の相関 ($r=0.27$) があった。

次に、進学理由と適応感との関係を示す、平均・共分散構造モデルを作成した。進学理由は上記 16 項目、適応感は **3.2** と同様の 8 項目を用いた。まず「将来展望」「能力活用」「同一視」の 3 因子を下位因子として持つ「積極的動機」と、「消極的動機」「他者のすすめ」の各因子が大学での適応感を予測し、「消極的動機」と「将来展望」の誤差成分間に相関があるという **3.2** と同じ構造のモデルと、修正を加えたモデルとを作成した。適合度により比較し、**Figure 4.1** の修正モデル ($CFI=0.963$, $RMSEA=0.042$) を採用した。なお、モデルに

² 追加した 2000 年データには、管楽器専攻学生に加え、打楽器専攻学生も確認できた。

1.4.4 でも議論したように両専攻は入学前の音楽経験等で類似の特徴を持つと考えられる。

Table4.1 進学理由項目の因子パターン行列および因子間相関

因子 項目（内容は要旨のみ）	能力 活用	同一視	将来 展望	消極的 動機	他者の すすめ
V3 自分の能力を生かす	1.02	0.01	-0.01	-0.09	-0.07
V1 音楽的な才能への気づき	0.43	0.01	0.28	-0.01	0.08
V2 他の教科より得意	0.41	0.01	-0.01	0.24	0.05
V5 音楽は自分の一部分	0.01	0.92	-0.10	-0.02	-0.03
V6 音楽活動を行うことが自然	0.05	0.62	0.04	-0.07	0.06
V4 音楽を取り上げたら何も残らない	0.07	0.56	-0.09	0.32	0.01
V7 精神的に不安定な時の支え	-0.14	0.42	0.23	-0.12	0.11
V10 求めている生き方ができる	0.06	0.07	0.66	0.00	-0.04
V9 希望の仕事につくために必要	-0.02	-0.08	0.60	0.08	0.06
V8 知識や技術を身につけたい	0.04	-0.03	0.56	0.03	0.00
V13 音楽以外に得意な科目なし	-0.02	-0.03	0.05	0.96	0.01
V14 音楽以外に好きなものなし	-0.03	0.10	0.08	0.73	-0.09
V12 勉強したくないが、大学行きたい	0.06	-0.21	-0.10	0.43	0.11
V16 母親のすすめ	0.03	0.00	-0.07	0.00	0.82
V15 父親のすすめ	0.02	0.02	0.02	-0.04	0.63
V17 音楽の先生のすすめ	-0.08	0.08	0.11	0.01	0.35
因子間 相関	同一視 0.38	将来展望 0.45	消極的動機 0.08	他者のすすめ 0.27	
		0.47	-0.28	0.14	

入れる制約は 3.2 と同じものとした。

専攻ごとに進学理由から適応感へのパス係数を自由推定した (Table4.2)。「積極的動機」からのパス係数は 0.49~0.66 の値を示し、積極的動機による進学が適応感を高めることを示唆した。「消極的動機」から「適応感」へのパス係数は管楽器・打楽器群以外の 3 群では有意であり、-0.29~-0.46 の値を示した。消極的動機による進学は適応感を低めると考えられる。

「他者のすすめ」から「適応感」へのパスは、修正モデルでは取り除かれた。「他者のすすめ」と「能力活用」の誤差間の相関 ($r=0.25\sim0.45$) から、音楽大学への進学における他者のすすめは本人の音楽技能の高さと関係することが示唆された。

因子の平均・切片の専攻比較を行うため、ピアノ群の値は固定し (平均と切片は 0、分散は 1)、他群はその差を示した (Table4.3)。「他者のすすめ」の平均値は、管楽器・打楽器群と声楽群がピアノ群より低めである (-0.29、-0.25)。一般にピアノ専攻学生より音楽経験が短く、レッスン開始が遅い傾向にあるとされる管楽器・打楽器専攻の学生が、自分の意志で音楽のレッスンを始める事が多いことも関連すると思われる。また、管楽器・打楽器群の「能力活用」の切片がピアノ群より低い (-0.34) が、これも音楽経験の短さが関連する

Table4.2 自由推定を行ったパラメータ（標準化解）

専攻	パス	積極的動機 →適応感	消極的動機 →適応感	将来展望(誤差) ⇔消極的動機	能力活用(誤差) ⇔他者のすすめ
ピアノ群 (N=243)		0.61 ***	-0.46 ***	-0.35	0.37
管打群 (N=109)		0.66 ***	-0.18	-0.27	0.26
声楽群 (N=111)		0.53 ***	-0.29 **	-0.62	0.45
教育群 (N= 68)		0.49 **	-0.30 *	-0.55	0.25

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

なお、相関については統計的検定を行っていない。

Table4.3 進学理由因子の平均・分散・切片（非標準化解）

因子	積極的 動機		消極的 動機		他者の すすめ		能力 活用	同一視	将来 展望
専攻	平均	分散	平均	分散	平均	分散	切片	切片	切片
ピアノ群 (N=243)	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	0.00	0.00
管打群 (N=109)	0.16 (0.19)	0.90 (0.22)	0.09 (0.11)	0.82 (0.14)	-0.29 (0.13)	0.78 (0.16)	-0.34 (0.12)	-0.14 (0.12)	-0.08 (0.10)
声楽群 (N=111)	0.25 (0.20)	0.56 (0.15)	-0.06 (0.11)	0.66 (0.11)	-0.25 (0.11)	0.40 (0.10)	-0.10 (0.12)	-0.13 (0.12)	0.00 (0.11)
教育群 (N= 68)	0.37 (0.29)	0.66 (0.21)	-0.09 (0.13)	0.75 (0.16)	-0.10 (0.16)	0.96 (0.23)	-0.58 (0.18)	-0.34 (0.17)	-0.36 (0.16)

非標準化解の下のカッコ内に示した値は、標準誤差である。

なおピアノ群は、固定した値を示した。

と思われる。教育群については「能力活用」「同一視」「将来展望」の切片が、ピアノ群より低い（-0.58、-0.34、-0.36）。演奏の実技以外の科目履修がより重視されるこの専攻の性質から、音楽活動自体への動機づけがピアノ専攻の学生ほど高くない可能性はある。

このように、追加データを加えて再度の分析を行った結果、不一致な部分もあったが、3.1の進学理由に関する5因子の構造、および3.2の進学理由と大学での適応感との関連について、基本的な構造は保たれていることを確認できた。

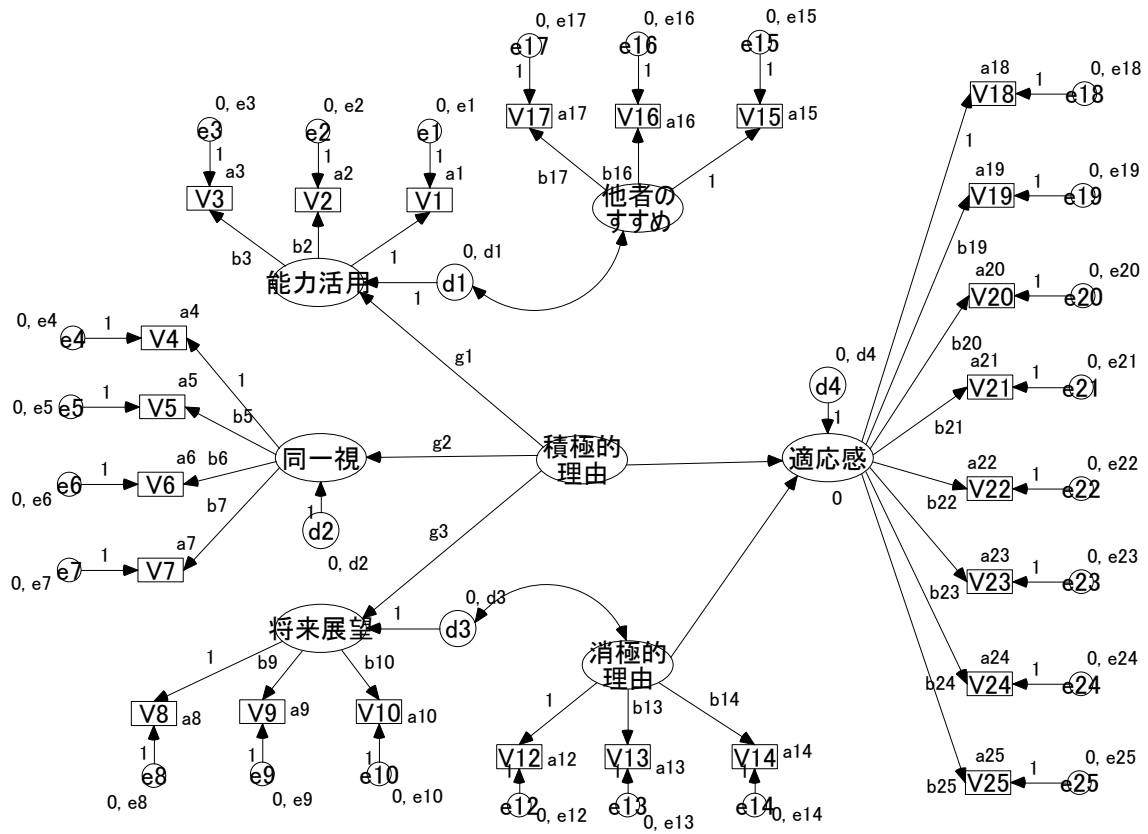


Figure4.1 進学理由と大学での適応感の修正モデル（制約入り）

4.2 積極的進学理由と適応感および背景要因との関係についての分析³

3.2 で作成したモデルにおいて (4.1 で作成した修正モデルにおいても), 「積極的動機」の下位因子である 3 因子は, 淵上 (1984) において見出された, 高校生の大学進学志望動機 5 因子のうち, 「大学の本来的機能」に近いものであった。

さらに, 本研究の開始時期とほぼ同時期に行われた研究のうち, 八木・齊藤・牟田 (2000) と栗山・上市・齋藤・楠見 (2001) で共通に見出された進学動機因子である「社会的地位」「得意分野」「無目的・漠然」「エンジョイ」「専門・資格」(栗山ら (2001) では, 「資格・専門」と比較すると, 自分の能力を自認し, それを活かそうという項目により成る「能力活用」は, 「得意分野」にあたり, 将来のために専門的な知識や技術を身につける等の内容の項目により成る「将来展望」は, 「専門・資格」にあたると思われる。つまり, これら 2 因子は一般的な大学進学動機に対応することが確認できたと言えるだろう。ただし「同一視」については, 音楽を自分の一部分のように感じ, 音楽活動を行うこと自体がごく自然であるという内容から, 「積極的動機」の中でも他の因子とは異質である。横山 (1998) において, 音楽大学への進学理由を尋ねる選択肢に類似した内容の項目が用いられており, 音楽大学への進学の特徴が現れた因子であると考えられる。

なお, この「同一視」と名付けた因子については, その内容から, 2000 年以降に取り上げられるようになった音楽的同一性 (musical identity) (MacDonald, Hargreaves, & Miell, 2002) の概念と対応する。これは音楽活動を好んで行う子どもから, プロの音楽家に至るまで, 様々な人が持つとされ, 音楽活動を継続して行う上では重要な役割を果たす心理的特徴である。これまで「同一視」としてきた因子に, これ以降はこの「音楽的同一性」という名称を本論文の中でも用いることにしたい。

以上の 3 因子は, どれも大学における適応感を高める影響を持つと考えられるが, その性質や形成過程は異なると予想される。その点も考慮したモデルを作成することで, 学生が認知する進学理由が大学における適応感に与える影響の質を検討できると思われる。

進学理由に影響を与える可能性のある要因として, 音楽経験, 音大進学をはじめとする様々な音楽活動に対する家族のサポート, これらに影響を与えると予想される家庭の音楽環境を挙げることができる。

まず, 音楽経験が豊富であることについては, 1.4 でも議論したように, 技能を高める要

³ 本節の内容は, 佐藤 (2005) を加筆修正したものである。

因であると考えられる。音楽活動に関する能力が高い学生は、自分の能力を活用して進学したいという動機を高めることもあるのではないかと。また、より長い音楽経験の中で、「音楽的同一性」を感じられる体験をする可能性も高いだろう。また、「将来展望」との関係や、大学における適応感にも何らかの影響を与えているのかについても確認は必要であろう。

次に、家族のサポートについて **3.2** では、「他者のすすめ」因子として、音楽の先生からのすすめとともに、両親からのすすめをとりあげた。この因子に関しては、先述したように、大学における適応感への明確な影響力は示されなかった。ただし、家族のサポートが音楽技能の発達に大きな影響を与えており、その中でも特に両親の役割が重要であることは指摘されている (Davidson, Howe & Sloboda, 1997)。また、両親の信念や行動および家族間の関係が、子どもの音楽技能の進歩や、音楽家としての肯定的なセルフ・イメージの発達に与える影響を示すケース研究も行われている (Davidson, & Borthwick, 2002)。また、進路選択行動という観点からは、清水・坂柳 (1988) が概観しているように、多くの進路発達研究者が、両親、兄弟、友人などの私的なエイジェントからの働きかけの重要性を指摘している。以上のことから、家族、特に両親からのサポートは、大学における適応感を直接には高めないとしても、適応感に影響を与える積極的動機の形成にはかかわっているのではないかとと思われる。なお、先行研究では進学理由因子の1つとして「他者のすすめ」を取り上げたが、音楽大学への進学を「すすめ」られなくても、進学へのサポートを学生が感じることはあると思われる。そのような要素も含めて進学動機の形成および、大学への適応に直接かかわるかどうかも検討する必要がある。

家庭の音楽環境については、必ずしも親がプロの音楽家であったり、演奏活動を行っていたりする必要はないが、音楽鑑賞も含めた親自身の音楽への関わりの強さは、子どもの音楽活動に影響を与えることが示されてきた (Sloboda & Howe, 1991; Davidson, Howe, Moore & Sloboda, 1996)。このように両親の音楽への関与を中心とする家庭の音楽環境は、本人の音楽活動の豊かさや、家族のサポートを決める要因になると予想できる。さらに、直接、進学動機の形成要因になっているかについても検討する必要がある。

さらに、専攻による違いにも目を向けたい。同じ音楽を専門に学ぶ音大生であっても、専攻によって、入学までの音楽経験には大きな違いのあることが指摘されており (梅本, 1999), **1.4** でも議論した。今回は、特にピアノ専攻、管楽器・打楽器専攻、声楽専攻、音楽教育専攻を取り上げ、その違いについて検討する。

4.2.1 目的

3種の積極的な進学理由と、大学における適応感との関係について、より詳細な検討を行うために、本人の音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境が与える影響を検討するためのモデルを進学理由ごとに作成する。その上で、専攻別の特徴についても考慮し、3種の積極的進学理由それぞれに対応して作成された3つのモデルを検討する。

4.2.2 方法

(1) 分析対象データ

分析対象データは、A音楽大学において行った1999年および2000年調査の回答時点で2年生であった女子学生のデータのうち、分析に使用する項目の回答に不備のない529名分であった。この中で、ピアノ専攻は241名（以下、ピアノ群）、管楽器・打楽器専攻は109名（以下、管打群）、声楽専攻は111名（以下、声楽群）、音楽教育専攻は68名（以下、教育群）であった。

(2) 分析使用項目

本節で分析の対象とする項目についてTable4.4に示す。

大学への進学理由

基本的には、3.1において音大への進学理由に関する項目への回答データに因子分析を行った結果として見いだされた因子のうち、「積極的動機」を示すと思われる「能力活用」「音楽的同一性（同一視）」「将来展望」の3因子を構成する質問項目を今回の分析に使用することにした。ただし、4.1において、追加データも含めて同様の分析を行ったところ、「将来展望」因子の1項目に不安定な動きが確認されたため、今回はその項目を除いて使用した。なお、進学理由に関する項目への回答は、「あてはまる」～「あてはまらない」までの5件法であり、分析を行う際には、「あてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点に換算したものをを用いた。

家族のサポート

第3章において、「他者のすすめ」を音楽大学への進学理由の一つとしてとりあげたが、この因子を構成した項目のうち、両親のすすめをあらわす2項目に、両親の協力を示す2項

Table4.4 分析対象項目および専攻ごとの基礎統計量

分析対象項目	ピアノ (N=241)		管打 (N=109)		声楽 (N=111)		教育 (N=68)		範囲
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
進学理由									
能力活用									
x1「自分の音楽的な才能に気づくことができたから」	2.85	(1.22)	2.59	(1.12)	2.85	(1.15)	2.49	(1.17)	1-5
x2「他の教科より音楽が得意だったから」	4.24	(1.13)	4.09	(1.26)	4.32	(0.90)	3.99	(1.22)	1-5
x3「自分の能力を生かすことができると思ったから」	3.97	(1.09)	3.64	(1.19)	4.02	(0.97)	3.49	(1.07)	1-5
音楽的同一性									
x4「音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから」	3.73	(1.41)	3.61	(1.41)	3.51	(1.38)	3.22	(1.50)	1-5
x5「音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから」	3.99	(1.19)	3.94	(1.22)	4.02	(1.15)	3.84	(1.17)	1-5
x6「音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから」	4.05	(1.06)	4.03	(1.10)	4.05	(1.08)	3.99	(1.09)	1-5
x7「音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから」	3.13	(1.36)	3.01	(1.36)	3.35	(1.36)	3.15	(1.30)	1-5
将来展望									
x8「専門的な知識や技術を身につけたかったから」	4.32	(1.09)	4.36	(1.08)	4.31	(1.04)	4.29	(1.04)	1-5
x9「希望の仕事につくために必要だと思ったから」	3.81	(1.28)	3.56	(1.40)	3.89	(1.30)	3.72	(1.38)	1-5
x10「自分の求めている生き方ができると思ったから」	3.67	(1.24)	3.75	(1.20)	4.01	(1.13)	3.31	(1.43)	1-5
家族のサポート									
x11「父親のすすめがあったから」	1.62	(1.23)	1.56	(1.21)	1.47	(1.03)	1.66	(1.27)	1-5
x12「母親のすすめがあったから」	2.60	(1.64)	1.97	(1.46)	2.09	(1.40)	2.28	(1.61)	1-5
x13「父親の協力があったから」	3.05	(1.71)	3.12	(1.78)	3.00	(1.68)	3.16	(1.72)	1-5
x14「母親の協力があったから」	3.81	(1.46)	3.58	(1.59)	3.43	(1.67)	3.66	(1.60)	1-5
音楽経験									
x15 レッスンを受けた期間	14.41	(1.63)	12.05	(3.83)	12.73	(3.13)	12.60	(3.67)	1-17
x16 グループでの音楽活動期間	3.88	(3.22)	6.44	(2.91)	4.40	(3.21)	4.91	(3.25)	0-17
x17 音楽の好み	2.35	(0.81)	2.17	(0.74)	2.49	(0.74)	2.32	(0.85)	0-3
大学における適応感									
x18「大学での生活は充実している」	3.81	(1.07)	3.85	(1.09)	3.89	(1.04)	3.93	(1.01)	1-5
x19「大学に入ることで、自分の音楽の幅が広がった」	4.03	(1.18)	4.38	(0.90)	4.04	(1.18)	4.38	(0.67)	1-5
x20「大学で必要な知識や技術が身につけられている」	3.95	(1.02)	3.94	(0.96)	4.03	(1.01)	3.97	(0.88)	1-5
x21「音楽がきれいになった」	1.67	(1.03)	1.63	(1.03)	1.48	(0.91)	1.54	(0.85)	1-5
x22「音楽に関して自信がなくなった」	2.65	(1.25)	2.91	(1.28)	2.68	(1.28)	2.53	(1.07)	1-5
x23「大学では、自分の好きな音楽ができないと思う」	2.29	(1.29)	2.14	(1.24)	2.23	(1.24)	2.41	(1.24)	1-5
x24「もう一度選びなおせるとしても音楽大学に進学する」	3.40	(1.38)	3.20	(1.51)	3.59	(1.47)	3.60	(1.39)	1-5
x25「もう一度選びなおせるとしても今の専門を選ぶ」	3.35	(1.37)	3.63	(1.49)	3.90	(1.35)	3.69	(1.40)	1-5
家庭の音楽環境									
x26 下記の項目への回答の合計得点	1.06	(0.89)	0.90	(0.88)	1.05	(0.99)	0.91	(0.94)	0-4
「父親が音楽に関わる仕事をしている(いた)」									
「父親が音楽好きである」									
「母親が音楽に関わる仕事をしている(いた)」									
「母親が音楽好きである」									

目を加えた4項目を、家族のサポートを示す項目として使用した。なお、これらの項目の回答形式は5件法であり、項目に自分が「あてはまる」と答えた時に5点、「あてはまらない」に1点とした。

音楽経験

音楽経験に関する項目のうち、今回は以下の3種類を取り上げた。

レッスンを受けた期間については、回答者の記述(内容、時期、形式)から、レッスンを開始した年齢、特別な音楽のレッスンを受けていない期間を考慮して、18歳までにレッスンを行っていた年数を計算した。

グループでの音楽活動期間については、回答者の記述(内容、時期、形式)から、そのよ

うな活動を初めて行った年齢、活動を行っていない期間を考慮して、18歳までに活動を行っていた年数を計算した。

音楽の好みについては、西洋クラシック音楽と、それ以外の音楽を好むかについて、質問項目の文章に「あてはまる」場合に○をつける形式の2件法で回答を求めた。なお、分析においては、今回の調査対象者の通うA音楽大学で西洋クラシック音楽の指導が中心であることを考慮し、クラシック音楽に○がつけられた場合を2点、それ以外の音楽に○がつけられた場合を1点として加算し、0～3点の範囲を示す1つの変数とした。

大学における適応感

3.2において作成したモデルと同じ8項目を使用した。5件法の回答形式であり、項目に自分が「あてはまる」と答えた時に5点、「あてはまらない」に1点とした。

家庭の音楽環境

家庭の音楽環境について尋ねた質問において、今回は特に両親の音楽への関与を示す4つの選択肢を使用した。これらは、選択肢が示す内容に「あてはまる」場合に○をつける形式の2件法で回答を求めた。なお分析においては、○がつけられた場合を1点、○がつけられない場合を0点とし、4項目のデータを加算して一つの変数にしたものを使用した。

(3) 分析方法

大学における適応感と、それを予測すると思われる大学への進学理由について、本人の音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境からの影響を検討し、さらに4つの専攻別の比較を行うために、Amos4.0を用いて平均・共分散構造モデルを作成した。

なお、今回取り上げる3つの積極的な進学理由は、互いに中程度の相関があることが3.1（および4.1）において示されているが、本節では、各進学理由の特徴をその他の要因との関係において検討することを目的とするため、進学理由ごとにモデルを作成した。また、進学理由、適応感および家族のサポートについては因子を想定したが、本人の音楽経験と家庭の音楽環境については、観測変数をそのまま用い、他の要因との関係を検討した。

モデルの作成にあたっては、まず、家庭の音楽環境が、家族のサポートや本人の音楽経験に及ぼす影響とともに、進学理由に与える影響を示すパスを入れた。次に、家族のサポートと音楽経験が、進学理由に与える影響を示すパスを入れた。また、進学理由が大学における

適応感を予測するパスとともに、家族のサポートや本人の音楽経験が適応感に直接与える影響について示すパスも入れた。

このような基本モデルにおいて、4 専攻群の中に一つも有意な値が示されなかったパスを削除して、最終モデルを決めた。なお、音楽経験については、各進学理由への影響を示すパスが有意ではなかった場合、観測変数自体をモデルから外した⁴。

多母集団比較を行うにあたって、豊田（1998）を参考に、以下の制約を入れた。まず、平均・共分散構造モデルを用いて因子の比較を行う上で、ピアノ群の因子の切片を 0 と固定し、他の群の因子については、ピアノ群との比較で推定を行うことにした。また、因子間の比較を行うために必要な、各因子から影響を受けている観測変数の切片はすべての群で等しいという制約を入れた。さらに、因子の性質が群間で等質であるとみなして、ある因子が観測変数に与える影響は、すべての群で同じであるという制約を入れた。因子および、各因子から影響を受けている観測変数の誤差分散がすべての群で等しいという仮定も導入した。その他、モデルの識別のために、各因子に関して観測変数への影響を示す係数のうち任意に 1 つを選び、その変数への影響を示す係数の値を 1 に固定した。

なお、観測変数としてモデルに取り入れた、家庭の音楽環境および、音楽経験については、その平均値または切片について群間で等値の制約はおかず、自由に推定を行った。

4.2.3 結果と考察

方法で述べた、平均・共分散構造モデルを **Figure4.2～4.4** に示す。また、モデルに使用した項目の専攻ごとの平均と標準偏差を **Table4.4** に示す。なお、**Figure4.2～4.4** には、各モデルで自由推定を行ったパス係数の標準化解および、進学理由と適応感がこのモデルの中に取り入れられている予測変数によって説明できる割合を示す決定係数を専攻群ごとに示す。また、因子の性質を示すために、群間で等値の制約をおいたパス係数について、ピアノ群の標準化係数を例として示してある。なお、標準化解であるため、分析方法で述べた群間における等値の制約や、固定した係数の値がそのままの形でパス係数の値に反映されてはいない。さらに、ピアノ群との比較を行った因子の切片および標準誤差を **Table4.5** に示す。

⁴ つまり、3 種類の音楽経験（「レッスン期間」「グループ活動期間」「好み」）のうち、少なくとも 1 専攻において有意なパスがあった場合、その変数をモデルに残した。

能力活用モデルについて

モデルの適合度は、CFI=0.960、RMSEA=0.051であり、モデルがデータに適合していることが示された。

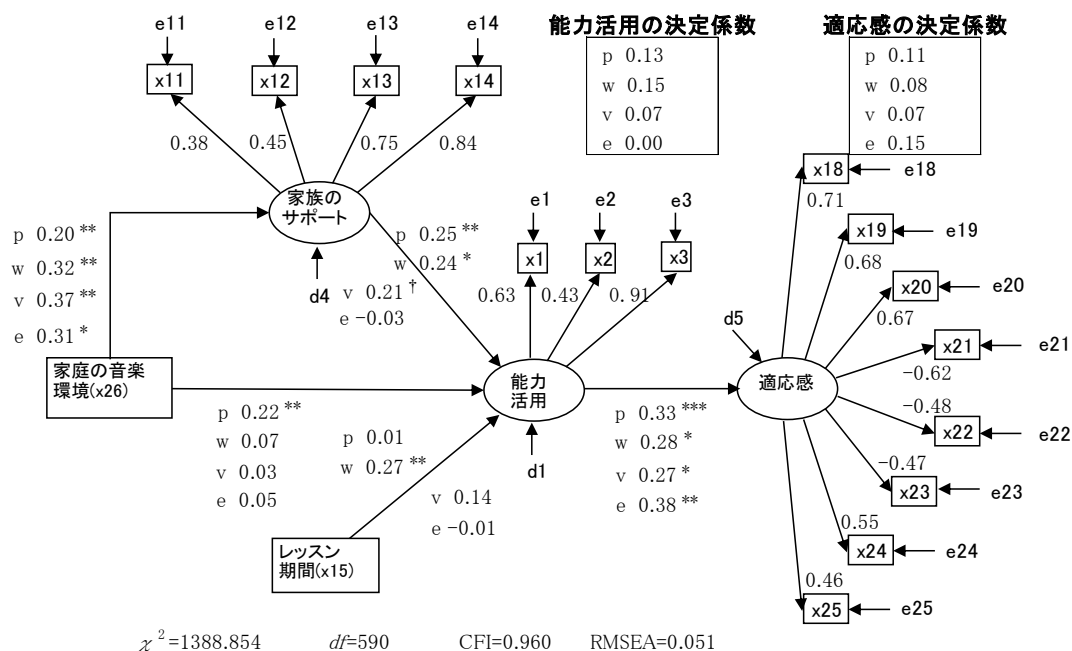


Figure 4.2 能力活用モデル

自由推定を行ったパス係数の標準化解, および決定係数については, ピアノ群:p, 管打群:w, 声楽群:v, 教育群:eとして示す。また, 上記のパス係数については, その有意性を *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.1$ と示す。なお, 群間で等値の制約をおいたパス係数については, ピアノ群の標準化解のみを示す。

Table 4.5 因子の切片と標準誤差

因子	サポート	能力活用	音楽的同一性	将来展望	適応感
専攻 ピアノ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
管打	-0.11 (0.09)	-0.65 (0.51)	-0.07 (0.24)	0.33 (0.29)	0.16 (0.10)
声楽	-0.19 * (0.09)	-0.09 (0.54)	0.19 (0.19)	0.38 (0.31)	0.13 (0.10)
教育	-0.07 (0.10)	-0.06 (0.56)	0.26 (0.22)	0.02 (0.33)	0.29 * (0.12)

サポートおよび適応感は, 能力活用モデルの結果を示す。
なお, ()内の数字は標準誤差。

* $p<.05$

このモデルにおいて自由に推定を行ったパラメータには, まず, 「家庭の音楽環境」(以下, 「音楽環境」とする) から「家族のサポート」(以下, 「サポート」とする) へのパスがある。

このパスの標準化係数は 0.20～0.37 で、すべて有意であった⁵⁵。両親が音楽活動に関わりが深いほど、学生は音楽大学へ行くことへのすすめや協力が得やすかったことが示された。なお、このパスの標準化係数については、他の 2 つのモデルにおいてもほぼ共通である。

「音楽環境」から、本人の音楽経験の一種である「レッスン期間」への影響については、どの群においても有意ではなかった。両親の音楽への関与の高さが、本人のレッスン期間の長さを決めてはいないことが、今回の音楽大学の学生のデータにおいては示された。現代の日本において、レッスンを子どもに受けさせることは一般的であり、特に親の音楽への関与が高くなくても、子どもに幼少期から習わせてみたいと思うことも多いことを示した先行研究とも一致する結果である。

「音楽環境」から「能力活用」へのパスと、「レッスン期間」から「能力活用」へのパスは、それぞれ 1 つの群のみ有意であった。つまり、両親の音楽への関与の高さは、ピアノ群でのみ「能力活用」という進学理由を高める (0.22) ことが示される一方、本人の音楽経験に関する 1 変数である「レッスン期間」は、管打群のみで有意であった (0.27)。「能力活用」という進学理由は、本人が自分の音楽に関する能力の高さを自認した上で、それを生かしたいという気持ちの強さを示す内容であり、本人の音楽技能の高さを反映していると思われる。「レッスン期間」が本人の音楽能力を高め、さらに「能力活用」という進学理由を高めるとはじめに予想した。また、家庭の音楽環境の豊かさも、本人の音楽能力を高めている可能性はある。しかし、今回このような結果になったのはなぜだろうか。ピアノ群では、ほぼ全員のレッスン期間が長く ($M=14.41$, $SD=1.63$)、そのことで実力に差はつかないと思われる。一方、管打群では、演奏のスタートが遅い学生も多く含まれており、もともとレッスン期間のばらつきが大きい ($M=12.05$, $SD=3.83$)。そのため、管打群において「レッスン期間」の影響が明確にあらわれたものと思われる。一方、ピアノ群のみで、「音楽環境」が「能力活用」を高めていることについては、「レッスン期間」で差がつかない能力的な差、つまり家庭の音楽環境に密接に結びつく音楽経験の幅や質が反映したものとも考えられる。声楽群と教育群については、レッスン期間の特徴が管打群に似ているが (声楽群: $M=12.73$, $SD=3.13$, 教育群: $M=12.60$, $SD=3.67$)、管打群のような「レッスン期間」の影響は示され

⁵⁵ 本節においては、2000 年調査データを追加したことにより、パス係数の解釈について有意であることも判断基準として使用している。ただし、3.2 で述べたようなパス係数の値の大きさによる解釈も並行して行っている。

なかった。声楽群については身体が楽器という特徴から、必ずしも入学以前のレッスン期間の長さが能力の高さと結びつかない可能性がある。教育群については、もともと演奏技能中心に学ぶ専攻ではないために、明確な影響があらわれなかったとも考えられる。

「サポート」から「能力活用」へのパスについては、ピアノ群と管打群は有意で (0.25, 0.24), 声楽群にも有意傾向は見られた (0.21)。つまり、教育群を除く群では、家族のサポートが「能力活用」を高める影響を示した。このような結果は、音楽演奏活動を継続し、技能を高めていく上で、家族のサポートの重要性を示す先行研究から、予想できるものである。また、教育群においてそのような影響が示されなかったことについては、この専攻における演奏技能の比重が他の専攻とは異なることと関係すると思われる。

また、「能力活用」から「適応感」へのパスがある。これについては、標準化解の値が 0.27 ~ 0.38 で、すべての専攻において有意であったが、先行研究における「積極的動機」から「適応感」へのパス係数と比較すると値は低めである。「積極的理由」の 1 つである「能力活用」が「適応感」を高めることは確認できたが、その影響は比較的小さいと言えよう。

進学理由以外で「適応感」への直接的な影響を示すパスとして、家族のサポートからと、音楽経験からのものをあらかじめ想定した。「サポート」からのパスは、どの群においても有意ではなく、家族のサポートの認知が、大学における適応感に直接的な影響を与えないことを確認した。このパスについては、他の 2 つのモデルについても共通である。「レッスン期間」についても、「適応感」への直接的な影響は見られず、これらの要因が、進学理由のような媒介変数を通して影響することをうかがわせた。

また、決定係数については、「能力活用」という進学理由因子を、「音楽環境」「サポート」「レッスン期間」という変数によって説明できる割合 (ピアノ群: 13%, 管打群: 15%, 声楽群: 7%, 教育群: 0%) から見て、入学前に演奏技能を高めておくことが必要と思われる専攻においては、少ないながらも説明力があると言えるだろう。

「適応感」の説明率 (ピアノ群: 11%, 管打群: 8%, 声楽群: 7%, 教育群: 15%) については、「能力活用」という進学理由からの直接効果として考えられる。この進学理由の説明力は 10% 前後であり、あまり大きなものではないと言えるだろう。

因子の切片については、「サポート」の切片がピアノ群と比較して声楽群でわずかに低いことと、「適応感」の切片がピアノ群と比較して教育群でわずかに高いことが示されたが、進学理由を示す因子の切片において示された違いは有意なものではなく、これ以降の考察は行わない。

音楽的同一性モデルについて

モデルの適合度は、CFI=0.960, RMSEA=0.048 であり、モデルがデータに適合していることが示された。

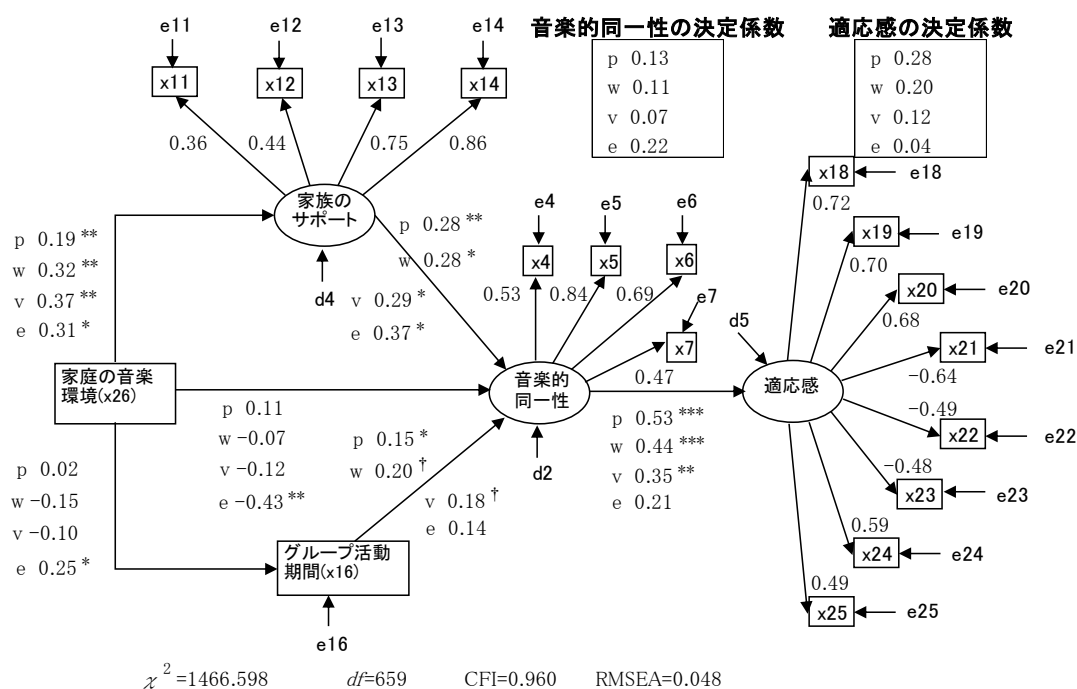


Figure4.3 音楽的同一性モデル

このモデルにおいて自由に推定を行ったパラメータには、まず、「音楽環境」から音楽経験の一つである「グループ活動期間」へのパスがあり、その標準化係数は教育群のみで 0.25 と有意であった。教育群以外の結果からは、学校の吹奏楽や合唱などをはじめとするグループ活動について、予想通り家庭の音楽環境とは基本的にあまり関係ないことが示されたとと言えるだろう。教育群においては、専攻する楽器にばらつきが大きく（声楽も含む）、それぞれの専攻によりグループ活動の意味も異なることが予想される。そのため、なぜこの群においてのみ、家庭の音楽環境からグループ活動期間への影響を示す値が得られたのか、解釈を行うことは困難である。

「音楽環境」から「音楽的同一性」へのパスと、「グループ活動期間」から「音楽的同一性」へのパスは、それぞれ 1 つの群のみ有意であった。まず、「グループ活動期間」からのパスについては、ピアノ群のみ 0.15 で有意であったが、声楽群と管打群においても 0.18, 0.20 で有意傾向にはあった。影響は少ないにせよ、グループ活動経験は、音楽を自分の一部

分のように感じることを示す項目等より成る「音楽的同一性」という進学理由を高める可能性を示すと考えられる。一方、「音楽環境」から「音楽的同一性」へのパスは、教育群のみが-0.43で有意であり、他はほぼ無関連であることが示された。少なくとも家庭の音楽環境が豊かであることが、本人の「音楽的同一性」を直接高めはしないことは示されているが、なぜ教育群においてむしろ低下させる影響を示しているのかについては、家族のサポートとの関連も含めて考察を行う。

「サポート」から「音楽的同一性」へのパスについては、0.28~0.37とすべての群で有意であり、家族のサポートがあることは、本人の「音楽的同一性」を高めることにつながることを示された。ここで、先ほどの家庭の音楽環境との関連を考えてみる。能力活用モデルについて述べたように、家庭の音楽環境が豊かであることは、家族のサポートを得やすいことにつながるため、たとえ、「音楽環境」から「音楽的同一性」への直接的な影響が見られなくとも、「サポート」を通しての間接的影響があるといえる。つまり、「音楽環境」から「音楽的同一性」へ直接ひいたパスであらわされているのは、そのような「サポート」や、さらに「グループ活動」のような音楽経験を通しての間接的影響を除いたものであるため、直接のパスが有意ではなかったとしても、「音楽環境」の豊かさが全く「音楽的同一性」に結びつかないことを表すものではないと考えられる。教育群におけるマイナスの値については、家庭の音楽環境が豊かであっても、家族のサポートを得たり、本人の音楽経験の豊かさにつながったりしなかった場合に、むしろ本人の「音楽的同一性」を低下させる影響を与える場合があることを示唆している。そもそも、家庭の音楽環境が豊かであるのに、あえて音楽以外の要素もある音楽教育専攻を選ぶということは、学生自身が音楽以外のものへ目を向けようとする志向、つまり音楽を自分の一部のように感じる「音楽的同一性」とは相反する傾向の現れであるとも考えられる。

また、「音楽的同一性」から「適応感」へのパスについては、教育群を除くと0.35~0.53ですべて有意であった。教育群についても有意ではないが0.21という値を示しており、今回の分析では、データ数が少なかったために有意ではなかった可能性もある。この「音楽的同一性」という進学理由についても、大学における適応感を高めることが確認された。ただし、音楽技能以外のものを学ぶ教育群のみが有意にならなかったことが、この進学理由の特徴を示しているとも言えるだろう。

なお、「グループ活動期間」の長さは、大学における「適応感」に直接的な影響を示してはいなかった。

決定係数については、まず、「音楽的同一性」を今回取り上げた変数で説明できる割合（ピアノ群：13%，管打群：11%，声楽群：11%，教育群：22%）から見て、どの群においても10%以上は説明されることが示された。ただし、教育群については、「音楽環境」からのパス係数が負の値であったことから、他の専攻とは異なる意味を持つと言えるだろう。

また「適応感」の説明率（ピアノ群：28%，管打群：20%，声楽群：12%，教育群：4%）は、演奏の習得に比重が高い専攻において、この「音楽的同一性」という進学理由が適応感を説明する重要な変数であることを示している。

将来展望モデルについて

モデルの適合度は、CFI=0.957，RMSEA=0.053 であり，モデルがデータに適合していることが示された。

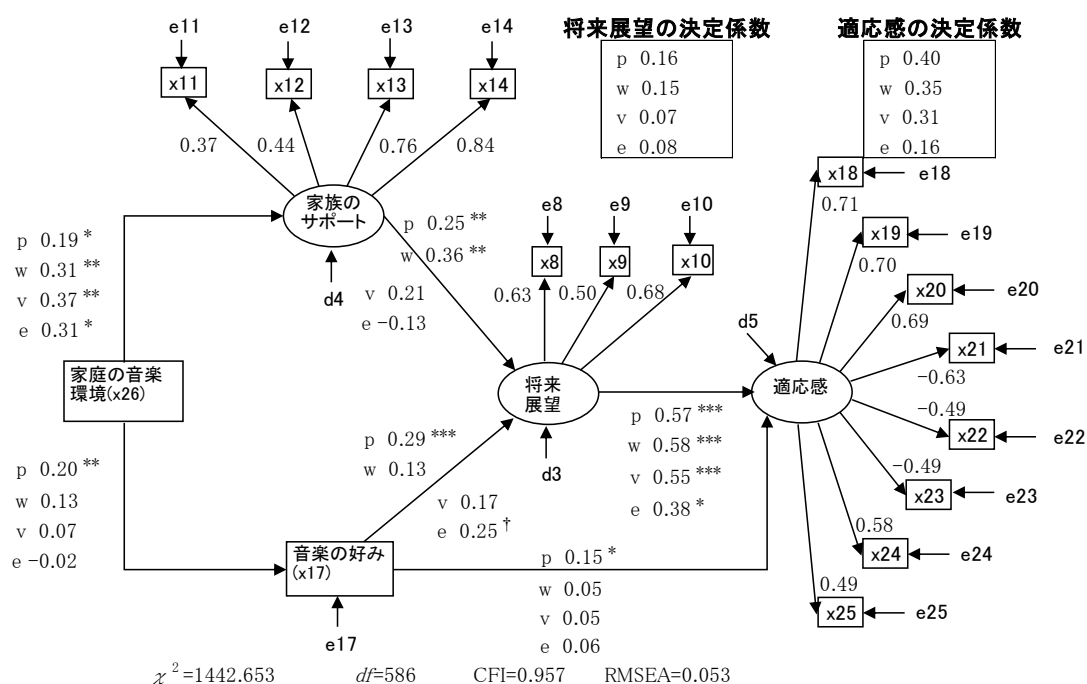


Figure4.4 将来展望モデル

このモデルにおいて自由に推定を行ったパラメータには、まず、「音楽環境」から、「将来展望」へのパスがあるが、これには有意なものが見られない。両親の音楽への関与度と、学生本人が将来を考えた上で進路選択を行うかどうかには、直接的な関係のないことが示された。

「音楽環境」から、音楽経験の一つとして今回とりあげた「音楽の好み」へのパスは、ピアノ群のみ 0.20 で有意であった。次に、「音楽の好み」から「将来展望」へのパスについても、ピアノ群のみ 0.29 で有意であり、教育群には有意傾向があった (0.25)。さらに、「音楽の好み」から「適応感」へのパスも、ピアノ群のみ 0.15 で有意であった。ピアノ群において、家庭の音楽環境が、本人の音楽の好みを強め、さらにそのような好みは、「将来展望」という進学理由と、大学における「適応感」を高めているという関係を理解するには、この「音楽の好み」が西洋クラシック音楽への好みに重みづけして作成した変数であることを考慮する必要がある。つまり、両親が好むクラシック音楽を本人も好むようになり、今回の研究の調査対象者が通う大学の性質、つまりクラシック音楽を中心に指導を行っているということをよく考えて進学することにつながり、そのような大学で学ぶことに対する満足感を得やすいということが考えられる。

「サポート」から「将来展望」へのパスについては、ピアノ群と管打群において 0.25 と 0.36 で有意であった。将来を考えて音楽大学へ進学し、演奏技能を高める、という本人の進学理由を高める要因として、家族のサポートも関係する事が、楽器演奏を主とするこの 2 専攻については示されたと言える。

「将来展望」から「適応感」へのパスについては、0.38～0.58 ですべて有意であった。この「将来展望」という進学理由についても、大学における適応感を高めていることが確認された。また、この結果だけを見れば、他の積極的な進学理由と比べても、この「将来展望」が大学における適応感を最も高めていると思われる。

決定係数については、まず「将来展望」を今回取り上げた変数で説明できる割合（ピアノ群：16%，管打群：15%，声楽群：7%，教育群：8%）から、入学前の技能習得が重視される専攻においては、10%以上の説明力があることが示された。

また「適応感」の説明率（ピアノ群：40%，管打群：35%，声楽群：31%，教育群：16%）は、他の進学理由と比較して、より高い割合である。主な説明変数である「将来展望」が音大生の適応感に与える影響の大きさがうかがわれる結果である。

4.3 本章のまとめ

本章の 4.1 においては、まず 3.1 の進学理由についての因子分析、および 3.2 で作成した 5 つの進学理由と大学での適応感との関係を示すモデルについて、追加データも加えて再検討を行った。その結果、進学理由の因子構造および進学理由と適応感との関係について基本的には同一の構造を確認できた。

この分析結果を受けて、4.2 では 3 つの積極的な進学理由因子を取り上げ、各理由と大学での適応感の関係に背景要因（音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境）も加えたモデルを作成して、進学理由因子と適応感の関係について再度検討を行った。

本節では、特に 4.2 で作成したモデルによる検討も踏まえたまとめを行い、今後の展望についても言及する。

4.3.1 本人の音楽経験について

学生の入学前の音楽経験については、今回、「レッスン期間」、「グループ活動期間」、「音楽の好み」を取り上げた。このような音楽経験は、積極的進学理由を高める可能性のあるものとして取り上げたが、結果を見ると、量的に測定できる大学進学理由への影響は小さく、影響が認められる専攻も限られていた。影響が表れにくかったことについての 1 つの理由には、たとえば、「レッスン期間」に関してピアノ群が示したように、音楽経験において同質の集団であったことが考えられる。また、専攻によって結果が異なっていることから、このような分析を行う上で、専攻の特徴も押さえた分析を行う必要のある事が示唆される。

「適応感」へのパスは、「音楽の好み」のみがピアノ群で有意であったが、パス係数の値から考えて適応感への影響はほとんどないと言って良いだろう。

今回のような一定レベル以上の音楽技能を身につけて入学してきている音楽大学の学生のデータにおいては、入学前の音楽経験は、大学における適応感にはほとんど直接的影響を与えず、進学理由に与える影響も限定されていると言えるだろう。

4.3.2 家族のサポートについて

家族のサポートから進学理由への影響については、「音楽的同一性」へのパスではすべての群で、「能力活用」と「将来展望」へのパスでは、ピアノ群と管打群の 2 つの器楽専攻で、有意な値を示した。ただし、「サポート」から「適応感」への直接的影響は見られなかった。

3.2 により、両親や音楽の先生のような他者によるすすみを進学理由として認知すること

が、大学における適応感を高めないことは示されており、両親の協力を加えた「サポート」因子も、直接的な影響力を持たないことは予想される結果であった。しかし、音楽技能の向上に関する諸要因を扱った先行研究からは、家族のサポートの重要性が主張されてきた。今回の結果は、音楽大学への進学についての積極的動機づけを高めることで、間接的に大学における適応感を高め、さらなる技能の向上をうながすことをうかがわせる。

4.3.3 家庭の音楽環境について

「音楽環境」が、「サポート」や「音楽経験」へ及ぼす影響と、進学理由への直接的影響を検討するためにパスが導入された。

まず、「サポート」へのパスは、すべての群で有意であった。また、音楽経験へのパスについては、「レッスン期間」へのパスはどの群にも有意な値を示さず、「グループ活動期間」へのパスは教育群でのみ有意であり、クラシック中心の「音楽の好み」へのパスはピアノ群でのみ有意であった。両親の音楽への関与の高さは、音楽大学への進学についてのサポートを本人が得やすいことにつながるが、量的に測定できる音楽経験への影響は極めて限られていると言える。

また、進学理由への直接的影響は、「能力活用」へのパスはピアノ群のみで有意であり、「音楽的同一性」へのパスは教育群のみで有意だが、パス係数はマイナスの値を示した。また、「将来展望」へのパスはどの群も有意ではなかった。このように、音楽環境が積極的な進学理由を直接高めることはほとんどないことが示唆される。

以上のように、両親の音楽への関わりの強さという家庭の音楽環境の効果は、主に家族からのサポートの得やすさという効果を通して進学理由に反映すると考えられる。

先行研究において、親の音楽への関与度が、子どもの演奏技能レベルに複雑な影響を与えることが示されていた。今回の結果は、音楽大学への進学に関して、親の音楽への関与が高い事は、本人へのサポートを高めるときにのみ、子どもの積極的進学動機を高めることを示したと言える。単に、家庭の音楽環境が豊かであることが本人のやる気を促す訳ではなく、子どもに脅威を与えたりすることなく、本人が親からのサポートを十分感じられる状況においてのみ効果的であるということであろう。

4.3.4 3つの進学理由の性質の違い

一般大学への進学動機研究との比較から、「能力活用」と「将来展望」は、一般大学への

進学動機に対応し、「音楽的同一性」は、これらの因子と同様に積極的な進学動機に関わる因子ではあるものの、音楽領域の高等教育機関への進学に特有な因子と解釈した上で分析を進めてきた。

3つの進学理由因子の中で最も「適応感」を高めたのは、「将来展望」であった。自分の将来を考えて、進学を決定するという進学理由の認知が最も大学における適応感を高めていることは、先述した進路発達に関する先行研究からも理解可能である。「音楽的同一性」の適応感への影響は、演奏中心の3専攻においてのみ有意な値を示した。音楽という専門領域に進むことを考えると、一般大学生と同様の積極的な進学理由のみでなく、音楽との一体感を示す「音楽的同一性」が大切なことがわかる。「能力活用」は、すべての群について適応感への影響を示したが、パス係数の値は、「将来展望」より低めである。自分の能力を生かしたいと思って入学しても、自分と同じ方面が得意な学生の集団の中では、これまでのように自分の能力の高さが認められず、大学生活の中で満足を得られにくい可能性もある。

次に、進学理由の形成に影響を与えることが予想された3要因との関係で、各因子の違いを見ていく。

まず、音楽経験に関して、「能力活用」には管打群の「レッスン期間」、「音楽的同一性」にはピアノ群の「グループ活動期間」、「将来展望」にはピアノ群の「音楽の好み」のみが有意なパス係数の値を示した。このような各進学理由因子と、音楽経験との組み合わせは、各進学理由の内容からも納得のできるものであった。どの専攻群においてパス係数に有意な値が見られたかについては、基本的に音楽経験において同質性の高い音大生の中でも、比較的個人差の生じやすい部分にのみ、そのような値が示されているようである。

また、「サポート」からの影響については、音楽大学への進学に特有の因子である「音楽的同一性」には、すべての群において有意な値を示しており、この進学理由因子の形成に家族のサポートが影響力を持つことが示された。一般的な進学理由因子と対応する「能力活用」と「将来展望」については、ピアノ群と管打群の2つの器楽専攻のみが有意な値を示している。これらの専攻を選択した学生に対するサポートが、これまで身につけてきた技能を活かし、さらなる向上を目指すように促す形で働いている事をうかがわせる結果と言えるだろう。

家庭の音楽環境については、先述したように、主にサポートを通して、各進学理由に間接的な影響を与えており、各進学理由因子の違いとの関係についても、これまでに「サポート」や「音楽経験」との関係で述べられた内容を確認するのみである。ただし、教育群において、

「音楽的同一性」への直接効果が負の値を示したことは、音楽活動を行うこと自体への動機づけの高さを表すというこの因子の特徴をうかがわせるものではある。

大学進学理由にかかわる研究において、今回とりあげた音楽大学のように、専門分野の特徴を考慮した研究を行なっていくことは、その分野に進学する学生の実態をより正確に理解するために重要であることが、今回の研究結果から示唆されるだろう。

4.3.5 限界と今後の展望

本章の分析においては、ある音楽大学の、大学には慣れたが、まだ就職に向けての活動は始まっていない段階である2年生女子のみのデータを用いて検討を行った。つまり、ある程度共通の特徴を持つ学生に関してモデルを作成した上での分析であった。今回の結果は、西洋クラシック音楽中心の指導を受ける音楽専攻の日本の女子学生については一般化が可能と思われる。ただし、男子学生や、違う特色を持つ音楽領域の高等教育機関に通う女子学生では、結果が異なることも予想される。今後、対象を広げた検討が行われることにも意義はあるだろう。

また、本研究は探索的に行われたものであり、分析に用いた項目については、今後より洗練させていく必要がある。例えば、今回の家族のサポートに関する項目は、本来は進学理由として学生に尋ねたものを使用した。両親のすすめや協力に関して、進学理由として評価したために、低い値で回答された可能性も残る。しかし、そのような点を考慮しても、今回の結果は、音楽大学への進学について家族からのサポートを感じることで、積極的な進学動機の形成に何らかの影響を与えていることを示すものであると言えるだろう。

横山(1998)も指摘しているように、日本において、高等教育機関で音楽を専攻するために必要な、専門分野についての高度な知識や技能の習得には、学校教育制度外にある教育システムへのアクセスが鍵となっている。そのため、幼少期からの親の意図による教育への関与の必要性がしばしば語られる。しかし、今回の結果は、青年期に達した学生が積極的動機で音楽大学に進学するためには、家庭環境が音楽的であることや、早期から音楽訓練を受けさせること以上に、家族からの様々な面でのサポートを学生本人が十分に感じられることが大切であることを示している。今後、音楽専攻への進路選択場面において、このような点を考慮した指導が行われることが望まれる。

さらに、今後この分野の研究を続けて行く上では、今回取り上げていない要因についての分析を行うことも必要であろう。例えば、家族からの影響において、サポートよりもむしろ

進学をさまたげる効果を持つ可能性や、そのことで本人が感じる葛藤についての分析も行うことは、この領域に関わる進路指導を行う上で重要な情報を提供する可能性があるだろう。

第 5 章

音楽大学の学生の特徴，および進学調査使用項目と 性格検査との関係

第5章 音楽大学の学生の特徴、および進学調査使用項目と性格検査との関係

本章では、音楽大学の学生の特徴をより詳細に把握するために、以下の5.1～5.3についての分析を行う。5.1では、進学決定時期についての回答データを取り上げ、決定の時期に影響を与える可能性のある要因（音楽経験、家庭の音楽環境）についても検討を行う。音楽大学の入学準備の特殊性から考えて、一般的な大学入学準備よりも早い段階での決断を必要とする可能性が考えられる。5.2では、ここまで主に分析対象としてきた女子データと、男子データとの比較検討を行う。特に、ここまで主な分析対象項目であった進学理由と、男女差が表れやすいと思われる大学進学に関わる葛藤要因を取り上げる。第1章でも言及したように、音楽大学の学生数の男女比には大きな偏りがあり、入学前のお稽古事経験や、卒業後の職業選択に関わるジェンダー・バイアスも指摘されており、学生の回答データから読み取れることを示す。5.3では、音楽専攻の女子大学生が希望するライフスタイルについての回答データを中心に検討を行う。この領域の学生に女子が多いことと、学生自身が考えている将来設計に何らかの関りがあるのかについて、女子学生が希望する将来のライフスタイルおよび具体的な将来の職業等の希望進路に関する回答データから見ていきたい。

さらに、本研究で用いている進学調査項目の特徴について、一般的な性格検査データとの関係を示すことができれば、今回の調査結果を学生の適応という観点で捉える上で重要な情報になると思われる。5.4では、総合大学であるB大学の音楽専攻学生を対象とした調査結果から、進学調査項目と性格検査データとの相関分析を行う。

5.1 音楽大学への進学決定時期に影響を与える諸要因¹

本節では、進学決定時期の回答データを中心に取り上げ、決定した年齢に影響を与えている可能性のある要因（音楽経験、家庭の音楽環境）との関係についても検討を行う。

5.1.1 目的

大学等の高等教育機関に進学する際、自らの進学先となる専門分野の決定は青年期の重要な選択の一つである。一般的には高等学校等の学習成果を参照しつつそのような決定が行われるが、音楽領域への進学を志す学生はそれ以前に様々な音楽経験があることが普通であり、そのような経験から影響を受けながら早期の自己決定が行われることも多いと予

¹ 本節は、佐藤（2011b）を加筆修正したものである。

想される。実際の決定時期（年齢）および決定に影響すると思われる要因（音楽経験、家庭の音楽環境）との関係を検討する。

5.1.2 方法

(1) 分析対象データ

A 音楽大学 2 年生を対象とする 2009 年および 2010 年に行われた進学調査データを用いて分析を行う。回答者は 172 名（2009 年 79 名、2010 年 93 名）、男子 36 名、女子 132 名、不明 4 名、専攻は音楽教育学科 23 名、器楽科（ピアノ）46 名、器楽科（管・弦・打楽器）94 名、作曲 1 名、声楽 1 名、不明 7 名であった。

(2) 分析使用項目

音楽大学への進学決定時期（年齢）についての質問への回答（Q1）、音楽関係のレッスンあるいはグループ活動経験についての質問への回答から、どちらかを最初に開始した年齢（Q2.1）、回答されたレッスンの種類（Q2.2）、グループ活動の種類（Q2.3）を分析に使用した。また、親族の音楽との関わりの有無についての質問のために用意された 9 つの選択肢（Q3.1～3.9）への回答データも用いた。

(3) 分析方法

進学決定時期として回答された年齢と、その決定に影響すると予想される要因（音楽経験、家庭の音楽環境）についての回答データとの相関係数を主に用いて分析を行った。なお、家庭の音楽環境に関する質問の選択肢への回答データは、選択した（○をつけた）場合を 1、選択しなかった場合を 0 として計算を行ったため、点双列相関係数を求めたことになる。

5.1.3 結果と考察

Table 5.1.1 に進学決定時期（Q1）と、音楽経験（Q2.1～2.3）の平均値、標準偏差と範囲を示した。進学決定時期（Q1）は $M=15.6$ 歳（ $SD=2.1$ ）、範囲は 7～20 歳であった。中学を卒業して高等学校に入学する段階で決定を行うことが一般的であることがうかがわれる。レッスン等開始年齢（Q2.1）は $M=6.1$ 歳（ $SD=3.2$ ）、範囲は 2～15 歳であった。開始年齢には大きなばらつきがあり、回答内容を見ると、音楽関係のレッスンを早期に始める者と、授業外音楽活動等が先で後にレッスンを受けるようになった者に分かれる傾向も見られた。

Table5.1.1 進学決定時期および音楽経験の基礎統計
($N=172$, ただし欠損値により, Q1($N=170$), Q2.1($N=168$))

	内容	M	SD	範囲
Q1	進学決定時期(歳)	15.6	(2.1)	7-20
Q2.1	レッスン等開始年齢(歳)	6.1	(3.2)	2-15
Q2.2	レッスン回答項目数	2.0	(1.0)	0-5
Q2.3	グループ活動回答項目数	1.8	(1.0)	0-5

Table5.1.2 家庭の音楽環境についての基礎統計($N=172$)

選択肢(複数回答可)の内容	選択者数	割合(%)
Q3.1 自宅が音楽教室	30	17.4
Q3.2 父:音楽が仕事	3	1.7
Q3.3 父:音楽好き	58	33.7
Q3.4 母:音楽が仕事	33	19.2
Q3.5 母:音楽好き	91	52.9
Q3.6 兄弟:先にお稽古	47	27.3
Q3.7 兄弟:音楽好き	45	26.2
Q3.8 その他親族:音楽が仕事	31	18.0
Q3.9 その他親族:音楽好き	46	26.7

回答されたレッスンの種類(Q2.2)は $M=2$ 項目($SD=1$), 範囲は0~5項目であり, その中でも1~3種類の回答を行う学生が多かった。グループ活動の種類(Q2.3)は $M=1.8$ 項目($SD=1$), 範囲は0~5項目であり, 回答内容としては中学校や高等学校の吹奏楽部等の部活動への参加についての記述が多かった。

Table5.1.2には家庭の音楽環境についての質問への回答のために用意された9つの選択肢(Q3.1~3.9)にあてはまると回答した者の人数と割合(%)を示した。父親が音楽に関わる仕事をしている(いた)(Q3.2)は3名(1.7%)と少なかったが, 自宅が音楽教室である(あった)(Q3.1)は30名(17.4%), 母親が音楽に関わる仕事をしている(いた)(Q3.4)は33名(19.2%)であり, 特に母親が音楽に関わる仕事を自宅で行っている(いた)と思われる学生が一定数存在していることが示された。音楽に関わる仕事はしていなくても, 両親が音楽を好んでいると学生が認知している割合, および兄弟やその他の親族の音楽との関わりについての割合についても示した。

Table5.1.3 進学決定時期との相関係数
($N=170$, ただし欠損値によりQ2.1のみ $N=168$)

内容	r
Q2.1 レッスン等開始年齢(歳)	0.23 **
Q2.2 レッスン回答項目数	-0.21 **
Q2.3 グループ活動回答項目数	-0.13
Q3.1 自宅が音楽教室	-0.20 *
Q3.2 父:音楽が仕事	-0.23 **
Q3.3 父:音楽好き	-0.03
Q3.4 母:音楽が仕事	-0.19 *
Q3.5 母:音楽好き	-0.04
Q3.6 兄弟:先にお稽古	0.06
Q3.7 兄弟:音楽好き	-0.10
Q3.8 その他親族:音楽が仕事	-0.06
Q3.9 その他親族:音楽好き	-0.06

** $p<.01$, * $p<.05$ Q3.1~9との相関は、点双列相関係数を示す。

Table5.1.3 には進学決定時期と他の分析対象の変数との相関係数を示した。有意な相関を示した変数は Q2.1「レッスン等開始年齢」($r=0.230, p<.01$), Q2.2「レッスン回答項目数」($r=-0.210, p<.01$), Q3.1「自宅が音楽教室」($r=-0.197, p<.05$), Q3.2「父が音楽の仕事」($r=-0.229, p<.01$), Q3.4「母が音楽の仕事」($r=-0.189, p<.05$)であった。

今回の調査結果から、大学での音楽専攻を決定する時期の多くは中学校から高等学校への移行期であり、一般的な専攻決定時期よりやや早めであると確認できた。中学時点での決定者の多さは、高校進学で音楽専攻コース等への入学を考慮する学生の存在も関係するだろう。進学決定時期と音楽経験との関係については、レッスン等の開始が早いほど、多くのレッスンを受けた者ほど、音楽大学への進学を決める時期が早い傾向にあることが示された。さらに、家庭の音楽環境との関係については、親族が音楽との関係が強く、特に親が仕事として関わっている場合に、音楽大学への進学を決める時期が早い傾向が示された。Q3.2のように、回答の偏りの大きい変数との相関は参考程度にとどめる必要はあるが、親が音楽に関わる仕事をしていることがロールモデルとして機能し、早期の自己決定を促していることがうかがわれる結果ではある。

5.2 男女差の検討

音楽大学への進学者数について、女子学生が多数を占めているという事情から、本論文ではここまで女子学生のデータを中心に分析し、検討を行ってきた。本節では、この男女差を検討するために、進学理由および進学時の葛藤を取り上げて分析した結果を示す。

5.2.1 音楽大学への進学理由の男女差について——音楽経験および家族のサポートとの関連——²

大学生の適応に影響を与える可能性のある大学進学動機については、これまで多くの研究で取り上げられてきた。音楽大学への進学については第3章において学生が認知している進学理由について因子分析が行われ、さらに積極的な進学理由と大学での適応感の高さとの関係が示された。これらの分析は、相対的に人数の多い女子学生のデータを用いて行っている。ただし、男子学生については、進学理由について女子学生とは異なる特徴を持っていることが予想され、そのような特徴について検討する必要もあると思われる。

5.2.1.1 目的

男子学生の進学理由の特徴について、女子学生のデータとの比較によって検討する。

5.2.1.2 方法

(1) 分析対象データ

A 音楽大学の 1999 年および 2000 年データを使用した。今回の分析対象となるのは、回答時点で 2 年生であった男子学生 66 名、女子学生 562 名のデータである。

(2) 分析使用項目

主に進学理由についての質問項目を使用した。5 件法の回答形式であり、項目に自分が「あてはまる」と答えた時に 5 点、「あてはまらない」に 1 点を与えた。音楽経験の変数として、レッスンを受けた期間（年数）および、音楽大学への進学決定時期（年齢）についての回答データも分析に使用した。

² 5.2.1 は、佐藤（2004a）を加筆修正したものである。

(3) 分析方法

男子学生と女子学生の平均値に関して等分散を仮定しない 2 条件の差の検定を行った。

5.2.1.3 結果と考察

音楽経験（レッスン期間）、進学決定時期および進学理由項目への回答について、男女別の平均値、標準偏差および検定結果を **Table5.2.1** に示す。また、男女差を検討するために平均値に関して等分散を仮定しない 2 条件の差の検定を行ったが、検定の結果から有意差が見られたものおよび有意傾向³を示した進学理由項目のみを取り上げて作表している。

まず、レッスン期間（Q1）の男女差については、男子学生（ $M=8.22$ ）より女子学生（ $M=13.37$ ）の経験年数が長い。この結果は、一般的に女子に対して幼年期からお稽古ごととして音楽のレッスンを受けさせるケースが多いことを示した先行研究とも対応しているが、音楽大学に進学した学生の中でも、このような男女差の存在が確認された。

また、音楽大学への進学決定時期（Q2）の男女差を見ると、女子学生（ $M=15.22$ ）よりも男子学生（ $M=16.27$ ）の決定時期がやや遅い。これは、音楽経験年数について相対的に男子学生が短いことが影響している可能性もある。ただし全体としては、多くの学生が高校入学前から高校入学して間もなく進路を決定しているようだ。

進学理由については、積極的な進学理由を示していると思われる項目のうち、「将来展望」因子にも含まれる項目「自分の求めている生き方ができる（Q3.2）」について、やや男子学生の値が高い（ただし、 $p<.1$ ）。次に、「能力活用」因子に含まれる 2 項目「他の教科より音楽が得意（Q3.3）」「自分の能力を生かすことができる（Q3.4）」は、女子学生の値が高い。また、「音楽的同一性」因子に含まれる 3 項目「音楽を自分から取り上げたら何も残らない（Q3.5）」「音楽は自分の一部（Q3.6）」「音楽活動を行うことが自然（Q3.7）」および、内容的には似た要素を持つと思われる「音楽活動を行うことで自信（Q3.8）」についても、女子学生の値が高い（ただし、Q3.5 については $p<.1$ ）。なお、「感動体験」の影響を示す項目（Q3.1）については男子学生の値が高かった（ただし、 $p.<1$ ）。

他者の影響を示す進学理由項目（Q3.9～Q3.13）で男女差が見られたものは、1 項目（Q3.11）

³ $p<.1$ を「有意傾向」とすることは、統計的検定結果を示す上で望ましくないと指摘されることもあるが、今回の分析においては考察上重要な意味を持つ項目も含まれており、解釈を控えめに行う方針でここでは使用する。

Table5.2.1 レッスン期間, 進学決定時期および進学決定理由項目への回答の男女別平均値

分析対象項目		男子学生 <i>N</i> =66		女子学生 <i>N</i> =562		
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
Q1	レッスン期間(年)	8.22	(4.60)	13.37	(2.98)	***
Q2	進学決定時期(歳)	16.27	(1.56)	15.22	(2.41)	**
<進学理由項目(文章の一部を省略)>						
Q3.1	音楽の素晴らしさを知る感動的な体験があった	4.26	(1.09)	3.99	(1.14)	†
Q3.2	自分の求めている生き方ができると思った	4.03	(1.23)	3.73	(1.24)	†
Q3.3	他の教科より音楽が得意だった	3.64	(1.44)	4.20	(1.12)	***
Q3.4	自分の能力を生かすことができると思った	3.48	(1.36)	3.85	(1.10)	*
Q3.5	音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思った	3.29	(1.60)	3.61	(1.42)	†
Q3.6	音楽は自分の一部分であり, やめられない	3.67	(1.44)	3.98	(1.17)	*
Q3.7	音楽活動を行うことが自分にとって自然	3.64	(1.39)	4.04	(1.07)	**
Q3.8	音楽活動を行うことで自分に自信が持てる	3.20	(1.44)	3.56	(1.21)	*
Q3.9	母親の音楽活動に影響を受けた	1.47	(1.13)	1.82	(1.39)	*
Q3.10	母親のすすめがあった	1.52	(1.07)	2.36	(1.58)	***
Q3.11	父親の協力があつた	3.48	(1.74)	3.06	(1.71)	†
Q3.12	音楽の先生のすすめがあった	2.15	(1.41)	3.14	(1.59)	***
Q3.13	両親以外の家族の影響があつた	1.52	(1.08)	1.81	(1.35)	†
Q3.14	なんとなく決めてしまった	1.68	(1.26)	2.35	(1.50)	**
Q3.15	勉強はしたくないが, 大学には行きたかった	1.52	(0.96)	1.98	(1.37)	**
Q3.16	音楽以外に得意な科目がなかった	2.00	(1.47)	2.31	(1.44)	†

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

を除いてすべて女子学生の値が高い(ただし, Q3.13 については $p < .1$)。レッスン期間も長く, 高い技能を持っていることにより, 家族を含む周りからのサポートを得やすいことにつながっているとも言えるが, 女子学生の方が周りからの影響を受け易いという可能性も考えられる。唯一, 男子学生がより高い値を示した項目が「父親の協力」(Q3.11)であった(ただし, $p < .1$) ことは, 同性の親からの影響力の強さをうかがわせるものである。

また, 「消極的進学理由」因子に含まれる 2 項目「勉強したくないが大学に行きたい (Q3.15)」「音楽以外に得意な科目がなかった (Q3.16)」, および第3章の分析において「将来展望」因子に逆転項目として含まれていた「なんとなく決めてしまった (Q3.14)」については, 学生全体の平均値が低い中でも, 男子学生は女子学生よりもさらに平均値が低かった(ただし, Q3.16 については $p < .1$)。

これらの結果から女子学生, 男子学生それぞれの特徴を以下にまとめる。

まず、女子学生は多くの場合、音楽経験が長いことから高い技能を身に付け、そのことに自信を持ち、音楽活動との一体感も強いことが音楽大学への進学につながっていることも多いと言えるだろう。また、そのためもあるのか両親を含む周囲からのサポートを得やすい環境にあることも多いと思われる。ただし、場合によっては本人の積極的な意志を伴わない決断がなされる危険性もあると言えるだろう。

一方、男子学生については音楽経験がより短いこともあり、自分の技能への自信に乏しく、音楽活動への一体感が薄い場合もあるが、進学を決める背景には何か特別な感動体験を持っていることも多い。周りからのサポートも女子学生に比べると得にくい環境にある傾向もうかがえるが、結果的に進学できた学生にとって、父親のサポートは女子学生よりも心理的に重要な意味を持つ可能性がある。また、消極的な理由で進学するケースは女子学生よりもさらに少ないと考えられ、多くの場合はある程度の覚悟を持って進学を決定しているのではないと思われる。

5.2.2 音楽大学への進学時の葛藤に関する男女差⁴

音楽大学の学生が認知している進学理由および音楽経験年数等について、5.2.1では、相対的に人数の多い女子学生のデータとの比較によって男子学生の特徴を検討した。男子学生の進学に関わる困難についてより正確に把握するためには、このような進学理由の違いの検討に加え、進学時の学生自身の葛藤および家族をはじめとする他者との葛藤の様相に関する男女差についても検討する必要がある。

5.2.2.1 目的

音楽大学への進学に際しての学生自身の葛藤、および他者との葛藤の様相について男女差を検討する。

5.2.2.2 方法

(1) 分析対象データ

A 音楽大学の 1999 年および 2000 年データを使用した。今回の分析対象となるのは、回答時点で 2 年生であった男子学生 66 名、女子学生 562 名のデータである。

⁴ 5.2.2 は、佐藤 (2004b) を加筆修正したものである。

(2) 分析使用項目

この分析に使用した項目は、音楽大学進学時の葛藤に関する質問項目(12項目)であり、6項目が学生自身の葛藤に関する内容、残りの6項目が家族や先生の反対等の他者との葛藤を示す内容であった。これらの項目は5件法の回答形式であり、項目に自分が「あてはまる」と答えた時に5点、「あてはまらない」に1点を与えた。

(3) 分析方法

音楽大学への進学時の葛藤に関する項目への回答について男女差を検討するため、等分散を仮定しない2条件の平均値の差の検定を行った。

5.2.2.3 結果と考察

男女別の平均値、標準偏差および検定結果を **Table5.2.2** に示す。

まず、学生自身の葛藤に関する項目については、「音楽以外の分野への進路の検討(Q1)」「進学に際しての経済的な問題の悩み(Q2)」「大学卒業後の就職の悩み(Q3)」の3項目について、男女差は見られなかった。一方、「練習がつらいので、やめたい(Q4)」「自分の才能に自信が持てなくなった(Q5)」「音楽が本当に好きかわからなくなった(Q6)」の3項目については、すべて女子の平均値が男子より高い。後者の3項目において男女差が見られたのは、進学に際しての基本的な悩みである前者の3項目において男女差が見られなかったことから考えて、女子が男子より葛藤を抱きやすいためと単純に推測することはできない。むしろ、女子の音楽経験が男子より長い傾向にあり(5.2.1 参照)、それだけに音楽活動と自分との関係に葛藤を抱きやすいためと思われる。男子学生側から考えれば、音楽領域への進学は非典型的な進路選択でもあり、比較的音楽経験が短いにもかかわらず、場合によっては周囲の反対も押し切る等、固い決意で進学している学生も含まれている結果という見方もできるだろう。

次に、他者との葛藤に関する項目については、男女とも全体的に平均評定値は低いですが、男女差を見ると、家族の反対を示す3項目(Q7,8,9)で男子学生の評定値が女子学生よりは高い。これら3項目は、学生自身の葛藤に関する項目の中で男女差の見られなかった3項目と内容が対応している。それにもかかわらず、そのような結果が示されたのは、この分野を専攻することに関するステレオタイプが男子学生の家族の反対を引き出したためであるか

Table5.2.2 音楽大学進学時の葛藤に関する項目への回答の男女別平均値

音楽大学進学時の葛藤に関する項目	男子学生 N=66		女子学生 N=562	
	M	SD	M	SD
<学生自身の葛藤(文章の一部を省略)>				
Q1 音楽以外の分野への進路の検討	3.36	(1.58)	3.35	(1.65)
Q2 進学に際しての経済的な問題の悩み	3.52	(1.54)	3.29	(1.63)
Q3 大学卒業後の就職の悩み	3.86	(1.50)	3.96	(1.32)
Q4 練習が辛いので、やめたい	2.61	(1.59)	3.49	(1.51) ***
Q5 自分の才能に自信が持てなくなった	3.70	(1.32)	4.17	(1.18) **
Q6 音楽が本当に好きかわからなくなった	2.41	(1.56)	3.37	(1.58) ***
<他者との葛藤(文章の一部を省略)>				
Q7 音楽を専攻することに家族が反対	2.45	(1.64)	1.81	(1.35) ***
Q8 進学に際しての経済的な問題で、家族が反対	2.35	(1.57)	1.96	(1.39) *
Q9 大学卒業後の就職を考えて、家族が反対	2.55	(1.64)	1.86	(1.37) ***
Q10 音楽の先生が受験に間に合わないとは反対	2.02	(1.33)	1.65	(1.20) *
Q11 高校の担任や進路指導の先生が反対	1.92	(1.48)	1.42	(1.04) ***
Q12 音楽の先生の指導方法が合わずに悩んだ	2.15	(1.52)	2.29	(1.60)

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

もしれない。さらに、「音楽の先生が受験に間に合わないとは反対 (Q10)」「高校の担任や進路指導の先生が反対 (Q11)」の2項目についても、男子学生の平均評定値が高い。前者については、男子学生の音楽経験年数の短さが関与していると思われるが、後者については、学校教育の進路指導場面における、この分野への進学に関するステレオタイプの影響力もうかがわれる。

5.3 音楽専攻の女子学生が希望するライフスタイルについて⁵

大学進学に関して、音楽を含む芸術分野は、女性の進学が偏って多いものの代表として挙げられることもある。その一方、幼少期からの音楽への興味や音楽に関する成績について女子が高い傾向にあることと比較して、優秀な音楽家になる割合については女性が少ないと指摘されることもある（O'Neill, 1997）。このようなジェンダー・バイアスは、社会的な条件により生じる部分も大きいと思われるが、学生自身の将来の職業生活への意識について取り上げることも重要と考えられる。また、ただ職業に対する意識のみでなく、結婚や出産・子育てという人生におけるその他の重要な要素との関係で、女性がどのようなライフスタイルを希望するかは、現代において多様化している。音楽領域において特有の就業形態（家庭での音楽指導など）は、家庭と仕事との両立を希望する学生にとっては、理想的なものと考えられている可能性もある。

5.3.1 目的

音楽大学に在学する女子学生が希望する将来のライフスタイルを調べるとともに、具体的な卒業後の希望進路との関連を検討する。

5.3.2 方法

(1) 分析対象データ

A 音楽大学の 1999 年データを使用した。調査対象は、1,2 年生 418 名であったが、そのうち女子学生 389 名を分析対象とした。

(2) 分析使用項目

女子学生が希望するライフスタイルについては、Table 5.3.1 の 1～7 の選択肢のうち一つに○をつけさせた（複数回答者は別にして集計している）。具体的な卒業後の進路希望に関しては、12 項目（Table 5.3.2 参照）に対して自分の考えに「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 段階評定とし、分析時に 5～1 点の得点を与えた。

(3) 分析方法

⁵ 本節は、佐藤（2000）を加筆修正したものである。

Table5.3.1 女子学生が希望するライフスタイル(N=389)

ライフスタイルについての選択肢		度数	割合(%)
選択肢1	結婚したら、仕事はやめと思う。	9	2.3%
選択肢2	結婚したら、家の中でできる仕事をすると思う。	48	12.3%
選択肢3	子どもができたら、仕事はやめと思う。	13	3.3%
選択肢4	子どもができたら仕事はやめるが、子どもが大きくなったら再び働くと思う。	77	19.8%
選択肢5	結婚しても子どもができて関係なく、ずっと働き続けると思う。	175	45.0%
選択肢6	ずっと働き続けたいので、結婚はしないと思う。	16	4.1%
選択肢7	その他	18	4.6%
複数選択者		32	8.2%
未回答者		1	0.3%

Table5.3.2 女子学生が希望するライフスタイルパターン別の希望する進路

希望する進路に関する項目 (文章の一部を省略)	ライフスタイルのパターン					
	家庭優先 (N=22)		仕事制限 (N=125)		仕事優先 (N=191)	
	M	SD	M	SD	M	SD
Q1 西洋クラシック音楽の演奏家になる	2.14	(1.46)	1.98	(1.27)	2.73	(1.61) ***
Q2 西洋クラシック音楽以外の演奏家になる	1.91	(1.23)	1.78	(1.15)	2.14	(1.44)
Q3 音楽制作に直接かかわる仕事につく	2.27	(1.39)	1.78	(1.13)	1.95	(1.35)
Q4 学校の音楽の先生になる	2.68	(1.36)	2.83	(1.49)	2.86	(1.59)
Q5 学校以外の音楽の先生になる	2.64	(1.29)	3.71	(1.33)	3.60	(1.36) **
Q6 音楽で人を助ける仕事につく	2.82	(1.44)	3.03	(1.43)	2.95	(1.42)
Q7 音楽関連産業への就職	2.86	(1.55)	3.14	(1.33)	2.87	(1.51)
Q8 音楽とは関係のない仕事につく	2.86	(1.52)	2.16	(1.29)	1.81	(1.29) ***
Q9 大学卒業後さらに音楽について勉強する	2.82	(1.33)	3.10	(1.37)	3.78	(1.31) ***
Q10 大学卒業後の進路を考えていない	2.45	(1.50)	2.59	(1.43)	2.22	(1.42)
Q11 音楽は趣味で続けられればよい	3.77	(1.23)	3.20	(1.35)	2.39	(1.45) ***
Q12 好きな仕事なら、収入不安定でもかまわない	2.95	(1.29)	2.95	(1.33)	2.94	(1.42)

*** $p < .001$, ** $p < .01$

女子学生が希望するライフスタイルについての選択項目への回答者数と割合を示した。さらに、希望するライフスタイルの内容から学生を3タイプに分け(後述)、卒業後の希望進路に関する各項目の評定値について一元配置の分散分析を行い、シェフェ法で多重比較を行った。

5.3.3 結果と考察

女子学生が希望するライフスタイルについては、「結婚しても子どもができて、ずっと働き続ける(選択肢5)」が最も多く、次いで、出産・子育てによる一時中断後の復職を希

望する回答（選択肢 4）、自宅での仕事の希望（選択肢 2）が多い。また、結婚や出産により仕事をやめることを希望する学生（選択肢 1, 3）や、仕事優先で結婚を希望しない学生（選択肢 6）は少なかった（Table 5. 3. 1）。これらのライフスタイルを、家庭を優先して仕事をやめる（選択肢 1, 3）、仕事を制限する（選択肢 2, 4）、仕事を優先する（選択肢 5, 6）の 3 タイプに分け、卒業後の希望進路に関する各項目の平均評定値について一元配置の分散分析を行い、シェフェ法で多重比較を行った。西洋クラシック音楽の演奏家（Q1）や学校以外の音楽指導者になること（Q5）、音楽と関係のない仕事に就くこと（Q8）、卒業後のさらなる研鑽を目指すこと（Q9）、音楽を趣味として位置づけること（Q11）に関する項目で、群間の有意差が見られた（Table 5. 3. 2）。

学年から考えて仕事に就くことがあまり現実問題になっていない時期であると考えられるが、今回の分析対象となった女子学生の回答パターンから見て、全体としては何らかの仕事が続けていくライフスタイルを希望する学生が多いと言えるだろう。希望するライフスタイルと具体的な希望進路との関係では、まず「仕事優先タイプ」の学生が、大学卒業後もさらに音楽を勉強することや、高度な演奏技能を要求される仕事に就くことを希望する傾向にあることが示された。次に「家庭優先タイプ」の学生は、音楽は趣味として位置づけ、音楽とは関係のない仕事に就くこともかまわないと考えている傾向が見られた。「仕事制限タイプ」の学生については、家庭との両立が可能で、現実的に就労可能性の高い仕事を希望する傾向にあることが示された。学生自身が思い描く将来のライフスタイルと、具体的な進路選択への希望には密接な関係があることが示された。

5.4 進学調査項目と性格検査との関係性について⁶

音楽専門課程の学生に対する教育を遂行する上で、今彼らが抱えている問題点の把握はその基礎として重要である。例えば卒業後の進路の問題もその一例として挙げられる。音楽専門課程の学生が抱えるこの種の問題に取り組むためには、彼らがどのような理由で進学を決め、現状をどう捉え、どのような将来展望を抱いているのかについて詳しく知る必要がある。また、現状への適応や、不安、悩みなどに焦点を絞るのであれば、音楽への動機付けや関与の強さを理解する上で、性格を初めとする個人差についての検討も必要となる。しかし、音楽専攻学生と性格についての研究としては、高橋（1973）による音楽学生を含む芸術専攻の短期大学生の性格特性についての研究などがあるものの、国内の研究については数の上ではまだ少ない。進学理由や将来展望などについて性格の観点から捉えた研究は、知られていない。

第3章から**第5章**の**5.3**までの一連の研究で、ある1つの音楽大学における進学理由や大学での適応感およびその他の関連要因についての分析結果は報告された。このような進学に関わる心理的な要因について理解をより深めるためには、個人の性格の把握も重要と考えられる。これらの関係を探るためにも進学に関する調査と性格を測定する検査を同一の調査対象に行なうことが望まれる。なお、性格の基本的な特性に関しては、性格特性研究の歴史から様々な因子が仮定されてきているが、柏木（1997）の解説にもあるように、主要な性格特性として5つの因子を取り上げる見解が出てきており、Costa & McCreaによる名称 Neuroticism（神経症傾向、または情緒不安定性）、Extraversion（外向性）、Openness to Experience（経験への開放）、Agreeableness（調和性、または協調性）、Conscientiousness（誠実性、または勤勉性）が、普及している。Neuroticismは、その特性の名称からも適応との関係は大きいことが予想されるが、それ以外の対人関係の取り方と関係が深い Extraversion や Agreeableness、自己コントロールに関わる Conscientiousness や、様々な経験への対処に関わる Openness についても、大学生として周囲の人々とどのように交流し、必要な知識や技能を身につけ、音楽を中心とした様々な体験をどう受け取り消化していくかという点で、進学に関する諸要因および適応と何らかの形で関わる可能性がある。

5.4.1 目的

⁶ 本節は、磯部・佐藤・沖野（2010）を加筆修正したものである。

本節の主要な目的は、総合大学である B 大学において、音楽を専門に学ぶ大学生を対象として、進学に関する諸要因と性格との関係について検討することである。具体的には、進学理由および葛藤、大学での適応、卒業後の希望進路に関する調査データを用い、その結果と 5 つの主要な性格次元を測定する心理検査の結果との相関を分析する。その前提として、性格検査の結果から、今回の調査対象である音楽専攻の大学生に関して、一般的な大学生と比較して何らかの特徴が見られるかについても調べる。

5.4.2 方法

(1) 分析対象データ

2008 年および 2009 年に、B 大学で音楽を専攻している 1 年生（調査時点で）を対象に行った調査データを用いる。回答者は、2008 年調査では 39 名（男子 6 名、女子 33 名）、2009 年は 36 名（男子 2 名、女子 34 名）であったが、今回は女子のみ 67 名のデータについて分析を行い、報告する。

(2) 進学調査における分析使用項目

今回分析に使用する項目は、以下にあげる 4 領域に関する質問項目群であり、これらの回答はすべて 5 件法で行なわれた。

大学で音楽を専攻することを決めた理由に関する項目

A 音楽大学で行った調査で用いていた進学理由に関する 30 項目を、そのまま本節の分析対象である B 大学の音楽専攻学生対象の調査でも用いた（Table 5.4.3 参照）。なお、この大学の調査対象者を考慮して、項目への回答方法を説明する文章に一部修正を加えた。

音楽系への進学を妨げる可能性のあった葛藤要因に関する項目

音楽系への進学を妨げる可能性のあった要因に関する 12 項目（Table 5.4.4 参照）には、学生自身の葛藤に関する 6 項目（項目 1～6）、両親や教師など他者との関係で生じる葛藤に関する 6 項目（項目 7～12）が含まれている。A 音楽大学における調査で使用した項目と同じものである。

大学での適応感に関する項目

第3章および第4章で報告された調査でも使用された大学での適応感に関わる内容を示す14項目のうち2項目が、音楽大学への進学に関わる項目であったため、第2章でも説明したように、それらの項目を削除し、代わりに「もう一度選びなおせるとしても大学で音楽を専攻する。」という項目を追加した計13項目をB大学での調査では使用している (Table5.4.5 参照)。

大学卒業後の希望進路に関する項目

5.3において分析対象となった、大学卒業後の希望進路にかかわる12項目と同一のもの (Table5.4.6の項目1~12) に1項目 (Table5.4.6の項目13) を加えた計13項目を使用した。

(3) 性格検査

2008年調査ではNEO-FFIの日本語版、2009年はNEO-PI-Rの日本語版を使用した。これらの性格検査は、Costa & McCreaにより開発された検査であり、下仲らによって翻訳されたものである (下仲・中里・榎藤・高山, 1999)。NEO-PI-Rには、健康な成人の人格特性の5つの主要な次元を計るための尺度が含まれる。5つの尺度とは、神経症傾向 (Neuroticism) 尺度 (以下, N 尺度), 外向性 (Extraversion) 尺度 (以下, E 尺度), 開放性 (Openness) 尺度 (以下, O 尺度), 調和性 (Agreeableness) 尺度 (以下, A 尺度), 誠実性 (Conscientiousness) 尺度 (以下, C 尺度) であり、NEO-PI-Rではさらに各次元の6つの下位次元についても測定できるよう作成されている。NEO-FFIは、NEO-PI-Rの短縮版であり、5つの主要な次元を代表する各12項目、計60項目が選び出されて作成されている。2009年調査においてNEO-PI-Rを使用しているが、今回の分析では、NEO-FFIに使用されている項目のみを選択して得点を計算した結果を用い、2008年度と同様NEO-FFIの結果として示す。なお、質問項目への回答は、どちらの検査においても5件法で行なわれている。

主要な5次元については、下仲ら (1999) によると以下のような内容である。N 尺度得点が高い人は、低い人よりも情緒的に不安定であり、ストレスへの対処が苦手な傾向にある。E 尺度得点が高い人は、低い人よりも外向的、社交的、活動的であり、周りに人がいることや刺激的なことを好む傾向にある。O 尺度得点が高い人は、低い人よりも様々な経験に対して開かれており、知的好奇心や想像力が豊かで、多様性を好む傾向にある。A 尺度得点が高い人は、低い人よりも他者と協力することを好み、衝突を避ける傾向にある。C 尺度得点

が高い人は、低い人よりも衝動のコントロールが可能であり、意志が強く、断固としており、偉大な音楽家やスポーツ選手になるためにはこの特性が必要という記述も見られる。

(4) 分析方法

上記の進学調査で使用した項目への回答データと、性格検査の各尺度との相関係数を計算した。

5.4.3 結果と考察

性格検査について

Table5.4.1 に、今回使用した性格検査に含まれる性格の 5 つの次元を測る尺度の平均得点と標準偏差 (*SD*) を示した。なお、各質問項目の得点は、0～4 点の範囲であり、各尺度とも 12 項目の合計得点である 48 点が（可能性としては）最高得点となる。この表を見る限り、下仲ら（1999）が標準化資料として示した大学生女子の NEO-FFI の尺度得点の平均値と 1*SD* 以上の高低が見られるような大きく異なる結果ではない。

また、**Table5.4.2** には、性格検査に含まれる 5 次元の尺度間相関係数を示した。E 尺度と A 尺度、E 尺度と C 尺度、A 尺度と C 尺度間に有意な正の相関が見られた。下仲ら（1999）では、NEO-PI-R の成人の結果についてのみ尺度間相関を示しているが、今回の調査で見られた有意な相関のうち、E 尺度と A 尺度間には正の相関が示されておらず、その点については一致していない。ただし、E 尺度と A 尺度は項目内容から考えて、どちらも他者との関わりを好む傾向と関係しており、正の相関が見られたとして、今回の対象者が特殊であると考えことは難しい。以上のことから、今回の調査対象者となった音楽専攻の女子学生について、集団としては一般的な大学生の性格の特徴と大きく異なる特徴は見られなかったと解釈できる。

性格検査尺度と、進学に関わる調査項目との相関について

Table5.4.3～Table5.4.6 に、進学調査で使用された項目群ごとに、回答データの平均値、標準偏差および、性格検査に含まれる 5 尺度の得点との相関係数を示した。

以下に、相関係数の値から、両者にどのような関係が見られるかについて考察を行う。

まず、音楽専攻への進学理由に関する項目と性格検査の各尺度との相関については（**Table5.4.3** 参照）、N 尺度と項目 1,20 に有意な（以下同様）負の相関、項目 11,27 に正

Table5.4.1 性格検査(NEO-FFI)尺度の平均と標準偏差(N=67)

性格検査尺度	M	SD
N尺度 (神経症傾向)	32.42	(7.91)
E尺度 (外向性)	28.55	(8.37)
O尺度 (開放性)	30.54	(5.77)
A尺度 (調和性)	28.88	(6.01)
C尺度 (誠実性)	26.28	(5.96)

Table5.4.2 性格検査尺度間の相関係数行列

性格検査尺度	N尺度	E尺度	O尺度	A尺度	C尺度
N尺度 (神経症傾向)		-0.09	0.14	-0.10	-0.01
E尺度 (外向性)			0.02	0.53 **	0.27 *
O尺度 (開放性)				0.18	0.24
A尺度 (調和性)					0.40 **
C尺度 (誠実性)					

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

の相関が見られ、全体としてN尺度得点が高い学生の否定的な物の見方が反映した結果として解釈できよう。項目11に関しては、4.2では音楽への結びつきの強さを示す項目の一つとして「音楽的同一性」の因子に含まれており、積極的な進学理由のグループに入ると解釈されてきたが、おそらくこの項目11の「音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから。」という否定的な言葉の響きに影響された結果と思われる。E尺度と項目21,23,24,25,26に正の相関も見られているが、これらはすべて他者の協力や影響を示す内容となっており、E尺度得点の高い回答者が他者からの影響を肯定的に受け取っていることが反映していると思われる。O尺度と項目5に正の相関、項目11,29,30に負の相関が見られているが、O尺度得点の高い回答者が、専門的な知識や技術を積極的に身につけようとする気持ちが強く、音楽以外にも興味の対象が広いことを反映した結果と思われる。A尺度と項目2,3に正の相関が見られたことについては、音楽活動の楽しさやすばらしさを知る体験がおそらく音楽のグループ活動の中で得られることが多いことが関係すると思われ、項目21,26に正の相関が見られることについては母親や友人の協力や励ましを肯定的に評価しているためと思われる。C尺度と項目1,3,5,6,7,15,21に正の相関、項目11,27,28,29に負の相関が見られたが、全体として自分の音楽活動を肯定的に評価し、積極的に音楽に関わる将来展望について計画しており、いいかげんな気持ちで音楽を専攻している訳ではないと自覚していることを示す回答結果であると解釈できよう。

Table5.4.3 音楽専攻への進学理由項目の平均と標準偏差および性格尺度との相関

項目内容(文章の一部を省略)	M	SD	N尺度	E尺度	O尺度	A尺度	C尺度
1 音楽が好きだった	4.74	(0.64)	-0.26 *	0.08	-0.11	0.08	0.28 *
2 音楽活動の楽しさを知る特別な体験があった	4.39	(0.87)	-0.14	0.18	0.14	0.29 *	0.24
3 音楽の素晴らしさを知る感動的な体験があった	4.41	(0.98)	0.04	0.07	0.21	0.26 *	0.33 **
4 特定の曲を演奏し(歌い)たかった	2.95	(1.34)	0.14	0.21	0.12	-0.12	-0.14
5 専門的な知識や技術を身につけたかった	4.36	(0.77)	0.17	-0.19	0.32 **	0.01	0.27 *
6 希望の仕事につくために必要だと思った	4.31	(1.16)	-0.07	0.10	0.16	0.19	0.27 *
7 自分の求めている生き方ができると思った	4.09	(1.12)	0.01	0.07	0.07	0.04	0.37 **
8 自分の音楽的な才能に気づくことができた	2.45	(1.22)	0.20	0.22	-0.06	-0.10	-0.03
9 他の教科より音楽が得意だった	4.16	(1.01)	0.01	0.16	-0.06	-0.08	-0.16
10 自分の能力を生かすことができると思った	3.53	(1.27)	0.17	0.15	-0.15	0.08	0.13
11 音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思った	3.79	(1.39)	0.37 **	-0.09	-0.27 *	-0.14	-0.30 *
12 音楽は自分の一部分であり、やめられないと思った	4.20	(0.96)	-0.03	0.06	-0.08	0.04	0.16
13 音楽活動を行うことが自分にとって自然であった	4.18	(1.11)	0.06	0.16	0.08	0.00	0.19
14 音楽が、精神的に不安定な時の支えになった	3.62	(1.29)	-0.02	0.12	0.07	-0.07	0.13
15 音楽活動を行うことで自分に自信が持てると思った	3.40	(1.28)	0.06	0.21	0.05	0.05	0.30 *
16 父親の音楽活動に影響を受けた	1.36	(0.89)	-0.15	0.02	0.14	0.00	-0.09
17 母親の音楽活動に影響を受けた	1.33	(0.77)	-0.18	0.03	-0.08	-0.10	-0.23
18 父親のすすめがあった	1.42	(1.04)	-0.14	-0.01	-0.01	-0.14	-0.21
19 母親のすすめがあった	1.88	(1.38)	-0.10	0.09	-0.04	0.04	0.03
20 父親の協力があった	1.98	(1.51)	-0.25 *	0.09	-0.02	0.10	0.06
21 母親の協力があった	2.64	(1.63)	-0.09	0.28 *	-0.03	0.40 **	0.27 *
22 あこがれの音楽の先生のようにになりたいと思った	2.93	(1.63)	0.01	0.12	0.02	-0.06	0.15
23 音楽の先生のすすめがあった	2.76	(1.57)	0.03	0.33 **	0.02	0.23	0.17
24 両親以外の家族の影響があった	1.86	(1.36)	-0.04	0.28 *	0.20	0.20	0.01
25 音楽を志す友人の影響があった	2.42	(1.58)	0.17	0.34 **	0.02	0.16	0.10
26 友人の励ましがあった	3.02	(1.51)	0.07	0.41 **	0.20	0.31 *	0.11
27 なんとなく決めてしまった	1.91	(1.37)	0.32 **	-0.08	0.02	-0.22	-0.43 **
28 勉強はしたくないが、大学には行きたかった	2.03	(1.44)	0.08	0.09	-0.18	-0.21	-0.62 **
29 音楽以外に得意な科目がなかった	2.27	(1.45)	0.21	-0.05	-0.36 **	-0.13	-0.28 *
30 音楽以外に好きなものがなかった	2.42	(1.48)	0.06	-0.16	-0.27 *	-0.29 *	-0.17

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

次に、音楽系への進学を妨げる可能性のあった葛藤要因にかかわる質問項目と、性格検査の各尺度との相関については (Table5.4.4 参照)、まず N 尺度と項目 2,3,6,7,8,9,12 に正の相関が見られた。学生本人の葛藤に関する項目と N 尺度との間に正の相関が見られることは、内容的に予想通りと言えるが、特に家族からの反対にかかわる項目との間にも正の相関が得られたことについて単純な解釈はできない。結果的に音楽専攻に進学できた学生でも、

Table5.4.4 葛藤要因項目の平均と標準偏差および性格尺度との相関

項目内容(文章の一部を省略)	M	SD	N尺度	E尺度	O尺度	A尺度	C尺度
1 音楽以外の分野への進路の検討	3.82	(1.62)	0.21	0.03	0.07	0.08	-0.08
2 進学に際しての経済的な問題の悩み	3.82	(1.55)	0.27 *	0.00	-0.03	0.07	0.00
3 大学卒業後の就職の悩み	4.00	(1.35)	0.38 **	0.08	-0.09	0.06	0.13
4 練習がつらいので、やめたい	3.01	(1.56)	0.14	-0.01	-0.01	-0.12	-0.34 **
5 自分の才能に自信が持てなくなった	4.06	(1.31)	0.19	0.11	0.02	0.18	0.09
6 音楽が本当に好きかわからなくなった	3.03	(1.74)	0.26 *	0.05	0.13	-0.16	-0.18
7 音楽を専攻することに家族が反対	2.34	(1.58)	0.38 **	-0.09	0.21	-0.19	-0.06
8 進学に際しての経済的な問題で、家族が反対	2.39	(1.59)	0.39 **	-0.14	0.07	-0.14	-0.13
9 大学卒業後の就職を考えて、家族が反対	2.27	(1.51)	0.29 *	-0.22	0.07	-0.23	-0.11
10 音楽の先生が受験に間に合わないかと反対	1.81	(1.40)	0.04	-0.13	0.17	-0.28 *	-0.05
11 高校の担任や進路指導の先生が反対	1.76	(1.33)	-0.08	-0.08	0.08	-0.08	-0.22
12 音楽の先生の指導方法が合わずに悩んだ	1.85	(1.35)	0.29 *	-0.15	0.11	-0.13	-0.06

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

進学以前に家族から様々な理由からポジティブなメッセージとネガティブなメッセージの両方を受け取ってきた可能性はあり、そのどちらをどのように評価するかは現在の学生 of 精神状態によって左右される可能性がある。そのため現在やや情緒不安定である回答者が、家族からの否定的なメッセージをより高く評価したと考えるのがまずは妥当であろう。ただし、学生自身の性格形成において重要な影響力を持つ家族とのやり取りにおいて、そのような学生と家族との長年に渡る交流において否定的なメッセージが交わされやすかったという可能性も否定できず、この点については追加データによる検討が必要といえるだろう。また、A尺度と項目10に負の相関、C尺度と項目4に負の相関が見られたが、それぞれA尺度得点の高さが他者との交流を高く評価する傾向にあること、C尺度得点の高い者の意思の強さによって説明可能であろう。

また、現在の大学での適応感にかかわる項目と、性格検査の各尺度との相関については (Table5.4.5 参照)、まずN尺度と項目5に負の相関、項目10,12に正の相関が見られた。N尺度得点が高い学生が、友人関係についての問題を抱え、大学のカリキュラムへの不満、将来の仕事のついての不安を感じやすい可能性はある。E尺度と項目1,2,5との間に正の相関が見られることから、E尺度得点の高い学生が友人関係の豊かさを基軸とした大学での適応の高さを示していることが窺える。また、C尺度と項目2,3,13に正の相関、項目7,10に負の相関が見られており、C尺度得点の高い学生が自分の身につけたい知識や技能の獲得への満足感を基軸として、大学での適応が高めであると考えられる。

Table5.4.5 大学での適応感項目の平均と標準偏差および性格尺度との相関

項目内容	M	SD	N尺度	E尺度	O尺度	A尺度	C尺度
1 大学での生活は充実している	4.19	(1.12)	-0.05	0.38 **	-0.06	0.15	0.09
2 大学に入ること、自分の音楽の幅が広がった	4.13	(1.03)	0.07	0.28 *	0.14	0.24	0.34 **
3 大学で必要な知識や技術が身につけられている	3.75	(1.16)	0.04	0.23	-0.05	0.07	0.29 *
4 大学の先生とはうまくいっている	4.27	(0.85)	0.02	0.21	0.13	0.00	0.20
5 大学の友人とはうまくいっている	4.46	(0.75)	-0.25 *	0.43 **	0.01	0.19	0.21
6 音楽以上にやってみみたいことができた	2.76	(1.33)	0.12	-0.03	-0.05	-0.07	-0.06
7 音楽が嫌いになった	1.40	(0.82)	0.08	-0.10	0.01	-0.21	-0.40 **
8 音楽に関して自信がなくなった	2.45	(1.28)	0.11	-0.14	0.11	0.01	-0.09
9 大学では、自分の好きな音楽ができないと思う	2.16	(1.27)	0.19	0.03	0.13	0.10	-0.24
10 大学では、音楽以外にやるが多すぎると思う	2.87	(1.43)	0.33 **	-0.13	-0.04	-0.19	-0.25 *
11 音楽に関係するアルバイトなどをしたことがある	1.42	(1.12)	0.13	-0.19	0.15	-0.23	-0.13
12 将来の仕事について不安を感じる	3.67	(1.32)	0.50 **	-0.05	-0.12	-0.05	0.04
13 もう一度選びなおせるとしても大学で音楽を専攻する	3.76	(1.45)	-0.05	0.11	0.01	0.17	0.25 *

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table5.4.6 大学卒業後の希望進路項目の平均と標準偏差および性格尺度との相関

項目内容(一部省略)	M	SD	N尺度	E尺度	O尺度	A尺度	C尺度
1 西洋クラシック音楽の演奏家になる	1.87	(1.34)	0.14	-0.03	0.06	-0.25 *	0.22
2 西洋クラシック音楽以外の演奏家になる	1.84	(1.33)	0.03	-0.02	0.28 *	-0.18	0.00
3 音楽制作に直接かかわる仕事につく	1.87	(1.30)	0.01	-0.01	0.12	-0.15	-0.05
4 学校の音楽の先生になる	2.64	(1.62)	0.01	0.17	0.09	0.06	0.23
5 学校以外の音楽の先生になる	2.57	(1.53)	0.13	0.12	0.12	-0.11	0.13
6 音楽療法士など、音楽で人を助ける仕事につく	2.97	(1.68)	-0.01	0.13	-0.06	0.21	0.17
7 音楽関連産業への就職	2.66	(1.54)	0.07	-0.22	-0.14	-0.17	-0.14
8 音楽とは関係のない仕事につく	2.14	(1.40)	0.18	-0.05	-0.20	-0.08	-0.32 **
9 大学卒業後さらに音楽について勉強する	2.83	(1.43)	0.26 *	-0.10	0.10	0.09	0.18
10 大学卒業後の進路について考えていない	2.28	(1.47)	0.33 **	0.05	-0.03	-0.05	-0.04
11 音楽は趣味で続けられればよい	2.85	(1.34)	0.00	0.26 *	0.07	0.04	-0.14
12 好きな仕事なら、収入不安定でもかまわない	3.03	(1.44)	-0.18	-0.20	0.32 **	0.04	0.21
13 家の中でできる仕事がしたい	1.88	(1.18)	0.07	0.16	-0.05	0.17	-0.03

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

大学卒業後の希望進路にかかわる項目への回答結果と性格検査の各尺度との相関については (Table5.4.6 参照), まず, N 尺度と項目 9,10 に正の相関が見られた。項目 9 については, 大学卒業後も積極的にさらに音楽を勉強したいという気持ちを示す項目とも言えるが, 項目 10 とあわせて考えると, N 尺度得点の高い回答者がいわゆるモラトリアム状態になりやすい可能性を示唆する結果と言えよう。E 尺度と項目 11 に正の相関が見られることについては, 音楽への強いこだわりよりは, むしろ積極的に卒業後は社会と関わりたいとい

う志向の表れと見ることもできるだろう。O 尺度と項目 2,12 に正の相関が見られることについては演奏者志向の強さと、収入がたとえ不安定でも自分の好きな仕事を追及した気持ちの強さが現れているものと思われる。A 尺度と項目 1 に負の相関については解釈が難しいが、他者への同調性の強さから、この分野の演奏家になることに関する一般的に知られている困難さを、そのまま自分の選択の中に受け入れている結果とも考えられる。C 尺度と項目 8 に負の相関が見られたことについては、現在大学で音楽を専攻している以上、音楽とは関係ない仕事につくことは考えられないという自分の目的への意思の強さが現れた結果とも考えられる。

上述のような、進学に関する調査項目と性格検査結果との相関は、音楽専攻学生の進学理由や葛藤、大学での適応感や卒業後の希望進路を検討する上で、基本的な性格の 5 次元尺度による測定が有効な手段となることを示唆している。N 尺度得点の高い学生に関しては、進学理由に関してやや否定的な物の見方が表れ、進学に関する葛藤を強く感じるとともに家族から否定的なメッセージを受け取ったと感じている度合いが強く、大学生活への不満や将来への不安、およびモラトリアム傾向が見られる等、心配な点が多く見られた。E 尺度得点の高い学生に関しては、進学に際して他者からの影響を肯定的に受け取り、友人関係も含めて大学生活への適応も良いが、必ずしも音楽を将来の仕事として考えてはいないという一面も見られた。O 尺度得点の高い回答者に関しては、進学に際して専門の知識技術を身につけたい気持ちと同時に音楽以外にも興味の幅が広いこと、希望進路として(クラシック以外の)演奏家志向が高めであり、収入よりも好きな仕事を選ぶという一面も見られた。A 尺度得点の高い回答者に関しては、全体としてやや他者からの影響を受け易い傾向が示唆された。C 尺度得点の高い回答者に関しては、積極的に音楽に関わる将来展望を計画し、いいかげんな気持ちで音楽を専攻してはいないという自覚が強く、真面目に知識や技術の習得に励んでいる様子がうかがえた。今回の結果がさらなる追加データの下で検証されるならば、音楽専攻学生の教育および進路等の指導にとって、より有益な資料になるものと思われる。

一方で、本研究に使用してきた進学調査項目に対する学生の回答パターンについて、このような性格の 5 次元との関係で考察を加えることも意味があると思われる。

第 6 章

積極的進学理由，適応感および背景要因についての
経年比較分析

第6章 積極的進学理由、適応感および背景要因についての経年比較分析¹

本研究で使用しているデータを収集するために行われた質問紙調査は1999年に始まっている。昨今の国内における社会経済状況の変化の中で、本研究で取り上げてきた音楽大学への進学理由や、大学での適応感など音楽大学への進学に関わる心理的な側面に変化は見られるのだろうか。本章では、ここまで分析に使用してきた1999年および2000年調査データ、2009年および2010年調査データに、2017年調査データを加えて経年比較分析を行い、調査時期による違いの有無について検討する。

6.1 目的

本章では、A音楽大学で1999年および2000年に行われた調査で得られたデータを用いて、共分散構造分析により作成されたモデル（4.2参照）で取り上げた変数について、その後に行われた同一の音楽大学の学生を対象とした調査データ（2009年および2010年、2017年実施分）と比較することで、先に示したモデルの構成要因に本質的な変化が生じていないかの確認を行う。具体的には、積極的な進学理由についての3因子（「能力活用」「音楽的同一性」「将来展望」）、大学における適応感、および背景要因（音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境）を取り上げ、主に調査実施時期を条件とする一元配置分散分析を行うことで検討する。

¹ 本章の進学理由因子の経年比較の分析結果については、佐藤（2018）に加筆修正を行ったものである。

6.2 方法

(1) 分析対象データ

経年比較の分析においては、すべて A 音楽大学で行った質問紙調査データを使用する。

まず、1999 年および 2000 年調査は 1,2 年生を対象に行われたが、データの重複を避けるために 2 年生のみのデータを使用する。2009 年および 2010 年に行われた調査は同大学の 2 年生のみを対象とした。2017 年 9 月にも、同大学 1,2 年生を対象に追加調査を行っており、そのデータを使用する（調査の詳細は第 2 章参照）。

調査においては男子学生も含めて実施したが、本章の分析においては女子学生データのみを使用する。その理由としては、今回の分析の元となる 4.2 のモデルを作成する際に、音楽を専攻する学生の中で女子学生の占める割合が大きく、男子学生のデータ数が量的分析を行うには十分とは言えないため、まず女子学生データの分析を行うことが妥当と考え、モデルを作成して分析しているため、それに準じるものである。

今回の分析には、1999-2000 年調査の 2 年生女子 562 名分、2009-2010 年調査の 2 年生女子 132 名分、2017 年調査の 1 年生及び 2 年生女子 64 名分のデータを使用した。各調査年度の学生の大学内での専攻については、Table 6.1~6.3 に示した。調査時期により専攻学生の割合には違いも見られるが、全体として調査対象者の性質は大きく変わるものではないため、今回の経年比較に関する分析は行えるものとする。なお、分析する際には欠損値処理を行ったため、分析する変数によって使用するデータ数が異なっている（詳細は、後述）。

(2) 分析使用項目

4.2 に示したモデルで取り上げた変数 (Table 4.4 参照) を分析に使用する。具体的には、積極的な進学理由についての 3 因子（「能力活用」「音楽的同一性」「将来展望」）、家族のサポート、音楽経験、大学における適応感、および家庭の音楽環境である。

音楽大学への積極的な進学理由

積極的な進学理由については、音楽能力の高さの自認に関する「能力活用」(3 項目)、自己と音楽との一体感に関わる「音楽的同一性」(4 項目)、将来のキャリア等に役立つ知識技能の修得に関わる「将来展望」(3 項目) の 3 因子に含まれる各項目を使用した (Table 6.4 参照)。これらの項目への回答は、すべての年度の調査において「あてはまる」～「あてはまらない」までの 5 件法で行われており、「あてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1 点

Table6.1 1999-2000年調査2年女子の専攻

専攻(選択肢として提示)	N
器楽(ピアノ)	247
器楽(管・弦・打楽器) ^a	128
声楽	117
作曲	1
音楽教育(ピアノ)	14
音楽教育(管・弦・打楽器)	22
音楽教育(声楽)	33
合計	562

^a記入された専攻楽器名から、
1999年は管楽器専攻のみであったこと、
2000年は管楽器および打楽器専攻を
含んでいたことを確認している。

Table6.2 2009-2010年調査2年女子の専攻

専攻(空所への回答)	N
器楽(ピアノ)	42
器楽(管楽器)	37
器楽(打楽器)	15
器楽(弦楽器)	13
声楽	1
音楽教育	21
未回答	3
合計	132

Table6.3 2017年調査1年および2年女子の専攻

	専攻(空所への回答)	N
1年	器楽(ピアノ)	17
	器楽(管楽器)	3
	器楽(打楽器)	2
	器楽(弦楽器)	2
	器楽(不明)	2
	音楽総合	6
	オープン	1
	小計	33
2年	器楽(ピアノ)	31
	合計	64

として分析に使用した。

家族のサポート

家族のサポートについては、質問紙内では進学理由の項目群の中から、父親および母親のすすめおよび協力があったことを示す4項目を、家族のサポートを示す項目として4.2のモデル作成に使用しており、本章の分析においても同様の方針で項目を使用した(Table6.6参照)。回答方法および分析時に使用した得点については、積極的な進学理由と同様であった。

大学における適応感

大学における適応感については、**4.2** のモデルにおいても **3.2** のモデル作成時の項目選択理由に従って同様の 8 項目を使用していたが、2009 年以降の A 音楽大学での調査においては一部項目を変更した²。そのため、2009 年および 2010 年、2017 年の調査データについては、それ以前の調査で使用していた音楽大学および自身の専攻を選択したことへの是認を示す内容の 2 項目と差し替えた、ほぼ同内容の新たな 1 項目を分析に用いた。それ以外の項目はすべての調査時期について同様の項目を使用した（**Table6.8** 参照）回答方法および分析時に使用した得点については、積極的な進学理由と同様であった。

家庭の音楽環境

家庭の音楽環境については、**4.2** と同様に、質問紙内で家庭の音楽環境を尋ねる質問への選択肢（複数回答可）の中から、両親の音楽への関与を示す 4 つの選択肢（**Table6.10** 参照）に対して「あてはまる」場合に○をつける形式で回答を求めたデータを用いた。分析においては、○がつけられた場合に 1 点、つけられない場合を 0 点とし、4 つの選択肢への回答データを加算した得点を使用した。

音楽経験

音楽経験については、**4.2** と同様に、レッスンを受けた期間、グループでの音楽活動期間、音楽の好みを取り上げた。

レッスンを受けた期間については、2009 年以降の調査において、それ以前の調査と質問方法を変更した部分もあるが、回答者の記述内容から（最大 5 種類まで記入可能）、大学入学時点まで（18 歳まで含める）にレッスンを受けていた年数を計算した点では、すべての調査時期で共通である。

グループでの音楽活動期間についても、レッスンを受けた期間と同様の手続きで、回答者の記述内容から（最大 3 種類まで記入可能）、活動を行っていた年数を計算した。

² 2008 年から B 大学で行われた調査において、総合大学で音楽を専攻する学生対象の調査が可能になるように適応感に関する項目に修正を加えたものを、それ以降の A 音楽大学調査でも踏襲したためである。

音楽の好みについては、4.2 の記述にあるように 1999-2000 年調査においては、西洋クラシック音楽と、それ以外の音楽を好むかについて、両選択肢にそれぞれ「あてはまる」場合は○をつける形式の 2 件法で回答を求め（複数選択可）、クラシック音楽への○を 2 点、それ以外の音楽への○に 1 点とし、0～3 点の範囲を示す一つの変数として扱っていた（Table6.13 参照）。2009 年以降の調査においては、クラシック音楽も含む 12 種類の音楽ジャンル（Table6.14, Table6.15 参照）に対して、とても好き（5 点）から、とても嫌い（5 点）までの 5 件法での回答形式に変更しているため、単純に比較することはできない。各調査時期による好みの傾向を確認するため、参考までにそれぞれの調査項目を取り上げた。

(3) 分析方法

積極的な進学理由の 3 因子、家族のサポート、大学での適応感については、それぞれ尺度の得点として、該当項目の平均値を使用した。この尺度得点について、1999-2000 年、2009-2010 年、2017 年の 3 つの時期で経年比較を行い、差異が生じているかを確認するために、尺度ごとに一元配置分散分析（3 水準）を行った。これらの尺度については、 α 係数も計算して示した（Table6.5, Table6.7, Table6.9 参照）。

家庭の音楽環境については単純加算した得点、レッスンを受けた期間およびグループでの音楽活動期間については計算した年数について、上述の 3 つの時期で差異が生じているかを確認するために、尺度ごとに一元配置分散分析（3 水準）を行った。

音楽の好みについては、回答方法が調査時期により大きく異なるため、それぞれについての基礎統計のみを行った。

6.3 結果と考察

音楽大学への積極的な進学理由について

積極的な進学理由に関する 3 つの尺度に含まれる質問項目の平均値と標準偏差は Table6.4、尺度得点（該当項目の平均値）の平均値、標準偏差および α 係数は Table6.5 の通りである。3 尺度の α 係数については、調査時期ごとに計算したところ 0.58~0.82 となり、すべてに高い値が示されたわけではないが、時期ごとに大きくかけ離れたものでもないため、許容範囲であると考えられる。

Table6.4 進学理由項目別基礎統計（調査年別）

調査年 データ数	1999-2000年 $N=562^a$		2009-2010年 $N=132$		2017年 $N=64$	
	M	SD	M	SD	M	SD
「因子名」および項目内容						
「能力活用」						
自分の音楽的な才能に気づくことができたから	2.76	(1.18)	2.65	(1.13)	2.42	(1.21)
他の教科より音楽が得意だったから	4.20	(1.12)	3.84	(1.19)	4.11	(1.05)
自分の能力を生かすことができると思ったから	3.85	(1.09)	3.52	(1.21)	3.52	(1.20)
「音楽的同一性」						
音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから	3.61	(1.42)	3.63	(1.42)	3.58	(1.40)
音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから	3.98	(1.17)	3.95	(1.27)	4.13	(1.02)
音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから	4.04	(1.07)	3.94	(1.19)	4.14	(1.01)
音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから	3.15	(1.35)	3.38	(1.29)	3.11	(1.34)
「将来展望」						
専門的な知識や技術を身につけたかったから	4.33	(1.06)	4.42	(0.89)	4.27	(1.14)
希望の仕事につくために必要だと思ったから	3.77	(1.31)	3.67	(1.27)	3.88	(1.23)
自分の求めている生き方ができると思ったから	3.73	(1.24)	3.78	(1.18)	3.59	(1.33)

^aただし欠損値処理により、尺度得点を使った分析については、能力活用 ($N=559$)、音楽的同一性 ($N=560$)、将来展望 ($N=561$)

尺度得点を用いた分散分析を行った結果、「能力活用」のみ有意差が見られた ($F(2,752)=6.087, p<.01$)。他の因子について有意差は無かった（「音楽的同一性」 $F(2,753)=0.103, ns$ 、「将来展望」 $F(2,754)=0.054, ns$ ）。「音楽的同一性」および「将来展望」については、3 つの時期で平均値がほとんど変化せず、音楽を専攻する学生の進学理由として安定した傾向を示していることが確認された。また「能力活用」については、多重比較を行った結果、調査年度間の違いは見いだされなかった。さらに、全体の有意差についても分散分析の効果量についての指標である偏イータ 2 乗の値が 0.016 であることから、小さい

Table6.5 進学理由尺度得点および α 係数(調査年別)

	調査年	1999-2000年	2009-2010年	2017年
「能力活用」 尺度得点	<i>M</i>	3.60	3.34	3.35 **
	<i>SD</i>	(0.88)	(1.01)	(0.96)
	α	0.67	0.82	0.77
「音楽的同一性」 尺度得点	<i>M</i>	3.70	3.73	3.74
	<i>SD</i>	(0.91)	(1.02)	(0.81)
	α	0.70	0.79	0.58
「将来展望」 尺度得点	<i>M</i>	3.94	3.96	3.91
	<i>SD</i>	(0.91)	(0.92)	(0.96)
	α	0.62	0.75	0.66

**
 $p < .01$

効果のみしか認められない(平均値差は小さい)と解釈できる。

若干の違いはあるにせよ、全体として音楽専攻の学生が大学に進学する理由については昨今の社会経済状況の変化の影響をそれほど受けない安定したものであることが示されたと言えるだろう。

家族のサポートについて

家族のサポートに含まれる質問項目の平均値と標準偏差は **Table6.6**、尺度得点(該当項目の平均値)の平均値、標準偏差および α 係数は **Table6.7** の通りである。この尺度の α 係数についても、調査時期ごとに計算したところ 0.72~0.79 となり、許容範囲であると考えられる。尺度得点を用いた分散分析を行った結果、有意差は無かった ($F(2,752)=0.339, ns$)。

音楽専攻の学生が感じている家族からのサポートについても、3つの時期で平均値がほとんど変化せず、安定したものであることが示されたと言えるだろう。

Table6.6 家族サポート項目別基礎統計(調査年別)

項目内容	調査年 データ数	1999-2000年 <i>N</i> =561		2009-2010年 <i>N</i> =130		2017年 <i>N</i> =64	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
父親のすすめがあったから		1.61	(1.22)	1.79	(1.24)	1.81	(1.39)
母親のすすめがあったから		2.36	(1.58)	2.48	(1.59)	2.77	(1.72)
父親の協力があったから		3.06	(1.71)	2.98	(1.67)	2.78	(1.76)
母親の協力があったから		3.66	(1.55)	3.75	(1.51)	3.64	(1.61)

Table6.7 家族サポート尺度得点および α 係数(調査年別)

	調査年	1999-2000年	2009-2010年	2017年
「家族サポート」	<i>M</i>	2.67	2.75	2.75
尺度得点	<i>SD</i>	(1.13)	(1.15)	(1.28)
	α	0.72	0.76	0.79

適応感について

大学での適応感に関する尺度に含まれる質問項目の平均値と標準偏差は **Table6.8**, 尺度得点(該当項目の平均値)の平均値と標準偏差は **Table6.9** の通りである。この尺度の α 係数についても, 調査時期ごとに計算したところ 0.70~0.80 となり, 許容範囲であると考えられる。尺度得点を用いた分散分析の結果, 有意差は無かった ($F(2,737)=1.911, ns$)。

大学での適応感についても, 3つの時期で平均値に大きな変化は見られず, 安定した傾向を示していることが確認された。

Table6.8 適応感項目別基礎統計(調査年別)

項目内容	調査年 データ数	1999-2000年 <i>N</i> =555		2009-2010年 <i>N</i> =121		2017年 <i>N</i> =64	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
大学での生活は充実している		3.86	(1.06)	4.00	(1.05)	4.19	(1.03)
大学に入ることによって, 自分の音楽の幅が広がった		4.15	(1.08)	4.47	(0.76)	4.23	(1.13)
大学で必要な知識や技術が身につけられている		3.96	(0.98)	4.22	(0.80)	4.28	(0.99)
R 音楽が嫌いになった		1.61	(0.98)	1.62	(0.88)	1.72	(1.19)
R 音楽に関して自信がなくなった		2.70	(1.24)	2.88	(1.32)	2.91	(1.44)
R 大学では, 自分の好きな音楽ができないと思う		2.26	(1.26)	2.07	(1.08)	1.98	(1.19)
もう一度選びなおせるとしても音楽大学に進学する		3.44	(1.42)				
もう一度選びなおせるとしても今の専門を選ぶ		3.59	(1.40)				
もう一度選びなおせるとしても大学で音楽を専攻する				3.40	(1.34)	3.34	(1.45)

Rは逆転項目を示しており, 尺度得点や α 係数の計算時には得点の変換処理を行ったものを使用している。

Table6.9 適応感尺度得点および α 係数(調査年別)

	調査年	1999-2000年	2009-2010年	2017年
「適応感」	<i>M</i>	3.80	3.93	3.92
尺度得点	<i>SD</i>	(0.77)	(0.63)	(0.79)
	α	0.80	0.70	0.77

家庭の音楽環境について

家庭の音楽環境については、4つの選択肢への回答データを加算した得点の平均値と標準偏差は **Table6. 10** の通りである。この加算した得点を用いた分散分析を行った結果、有意差はなかった ($F(2,755)=1.381, ns$)。

家庭の音楽環境についても、3つの時期で平均値に大きな変化は見られず、安定した傾向を示していることが確認された。

Table6.10 家庭の音楽環境についての基礎統計(調査年別)

調査年 データ数		1999-2000年 <i>N</i> =562	2009-2010年 <i>N</i> =132	2017年 <i>N</i> =64
下記の選択肢への該当個数	<i>M</i>	1.02	1.14	1.17
	<i>SD</i>	(0.92)	(1.01)	(1.02)
父親が音楽に関わる仕事をしている(いた)				
父親が音楽好きである				
母親が音楽に関わる仕事をしている(いた)				
母親が音楽好きである				

音楽経験について

音楽経験については、レッスンを受けた期間(年数)の平均値と標準偏差は **Table6. 11**, グループでの音楽活動期間(年数)の平均値と標準偏差は **Table6. 12** の通りである。

Table6.11 レッスン期間の基礎統計(調査年別)

調査年 データ数		1999-2000年 <i>N</i> =562	2009-2010年 <i>N</i> =128	2017年 <i>N</i> =63
レッスンを受けた期間(年数)	<i>M</i>	13.37	12.43	13.86 *
	<i>SD</i>	(2.98)	(3.94)	(2.67)

* $p < .05$

Table6.12 グループ活動期間の基礎統計(調査年別)

調査年 データ数		1999-2000年 <i>N</i> =560	2009-2010年 <i>N</i> =131	2017年 <i>N</i> =64
グループでの音楽活動期間(年数)	<i>M</i>	4.66	5.34	4.41
	<i>SD</i>	(3.32)	(3.15)	(3.72)

それぞれ計算した年数を用いて分散分析を行った結果、レッスンを受けた期間(年数)に

は有意差が見られ ($F(2,138.89)=4.618, p<.05$)³, グループでの音楽活動期間 (年数) については有意差が見られなかった ($F(2,752)=2.602, ns$)。レッスンを受けた期間 (年数) について多重比較を行った結果, 2009-2010 年よりも, 1999-2000 年および 2017 年の年数が長いことが示された (どちらも $p<.05$)。

レッスンを受けた期間について, このような違いがみられたことについては, それぞれの時期の調査対象者の専攻の違いから解釈が可能と思われる (Table6.1~6.3 参照)。2009-2010 年の調査対象者は, 他の 2 つの時期と比べ管楽器および打楽器専攻者の割合が多く, 序論でも述べた通り一般的にこれらの専攻学生がピアノ専攻の学生等と比べて大学入学までのレッスン経験年数が平均的に少ない傾向にあると言われている。実際, 本研究の 4.2 内 Table4.4 において, 1999-2000 年調査データの中でレッスンを受けた年数の平均値を専攻別に示しているが, ピアノ専攻の 14.41 年に対し, 管楽器・打楽器専攻では 12.05 年であった。ただし, 管楽器・打楽器専攻者の音楽経験が少ないと単純には言えず, グループ活動年数はむしろ多い傾向にある。今回の調査データの分析において有意ではなかったが, 2009-2010 年のグループ活動期間が最も長い ($p<.1$)。

このように, グループ活動年数については, 3 つの時期で平均値に有意な変化は見られず, レッスンを受けた期間については, 3 つの時期における平均値に上述のような差は見られたが, 専攻の違いという別の要素が関与している可能性が高いと思われ, 経年比較による差異は確認できなかったと言えるだろう。

音楽の好みについては, 1999-2000 年調査と 2009 年以降の調査で, 回答形式が大きく異なるため, 参考として時期ごとの平均値, 標準偏差および度数分布のみを示す (Table6.13~15)。

4.2 で共分散構造分析によりモデルを作成した際に, クラシック音楽の好みを回答した場合の得点に重みづけをしたのは, 調査対象の学生が在籍している A 音楽大学が西洋クラシック音楽の指導が中心に行われているという特徴を配慮したためであった。その後の調査データから, 少なくとも西洋クラシック音楽を好む学生の比率が高めであるという特徴に変わりがないことは示された。

³ 等分散性が確認できなかったため, Welch の検定結果を示している。

Table6.13 音楽の好みに関する基礎統計(1999-2000年／N=562)

集計方法	M	SD	度数			
			0	1	2	3
クラシック好み	0.81	(0.39)	105	457		
その他好み	0.71	(0.45)	161	401		
単純合計	1.53	(0.52)	6	254	302	
重みづけ合計	2.34	(0.80)	6	99	155	302

Table6.14 音楽の好みに関する基礎統計(2009-2010年／N=132)

ジャンル名	M	SD	とても嫌い 1	やや 2	度数 どちらでも ない 3	やや 4	とても好き 5	未回答
クラシック	4.58	(0.67)		3	4	38	87	0
J-POP	4.11	(0.95)	1	10	16	50	54	1
ジャズ	3.91	(0.90)	4	4	24	68	32	0
洋楽ポップス	3.79	(0.92)	1	10	36	53	31	1
歌謡曲	3.46	(0.95)	2	19	39	50	15	7
民族音楽	3.37	(1.08)	8	18	42	44	19	1
ロック	3.25	(1.21)	8	30	43	21	29	1
日本民謡	3.10	(0.97)	8	20	67	25	12	0
純邦楽(雅楽, 箏曲など)	2.92	(1.02)	15	22	61	27	7	0
ヒップホップ	2.83	(0.92)	8	36	62	16	7	3
演歌	2.72	(0.96)	15	34	61	17	5	0
レゲエ	2.57	(1.01)	18	41	51	9	7	6

Table6.15 音楽の好みに関する基礎統計(2017年／N=64)

ジャンル名	M	SD	とても嫌い 1	やや 2	度数 どちらでも ない 3	やや 4	とても好き 5	未回答
J-POP	4.40	(0.77)		1	8	19	35	1
クラシック	4.37	(0.92)	2	1	4	21	35	1
洋楽ポップス	3.95	(0.80)	1		15	31	15	2
ジャズ	3.71	(1.07)	3	5	14	26	15	1
歌謡曲	3.38	(0.97)	2	6	26	16	8	6
日本民謡	2.97	(0.89)	4	11	32	13	2	2
ヒップホップ	2.96	(0.90)	4	9	29	11	2	9
ロック	2.95	(1.20)	7	16	22	9	9	1
民族音楽	2.90	(1.02)	4	17	25	9	5	4
純邦楽(雅楽, 箏曲など)	2.87	(1.07)	6	15	27	7	6	3
演歌	2.76	(0.99)	9	10	32	9	2	2
レゲエ	2.55	(0.82)	7	8	27	2		20

6.4 本章のまとめ

全体として音楽大学に進学した学生については、1999-2000 年調査データを用いて作成された共分散構造分析によるモデル（4.2 参照）で取り上げた変数である、大学で音楽を専攻する理由、大学における適応感や、背景要因（音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境）について、昨今の社会経済情勢の変化の影響をそれほど受けない安定したものであることが示された。つまり、このモデルに含まれる構成要因の内容が現在においても大きく変化はしていないことが示されたと言えるだろう。

第 7 章

総合考察

第7章 総合考察¹

第7章では、第3章～第6章で取り上げたデータ分析結果およびそこからの考察の要点をまとめ、本研究で明らかになったこと、十分検討できなかった点を整理し、今後の研究の可能性について議論する。

7.1 本研究の成果

本研究で主な対象となった、A 音楽大学学生についての一連の質問紙調査回答データの分析結果から言えることをまとめると、以下のようになると思われる。

まず、日本の大学で音楽を専攻する学生が、進学理由として考えている内容については、今回の調査データの因子分析結果から5因子（「将来展望」「能力活用」「同一視（後に音楽的同一性）」「消極的動機」「他者のすすめ」）が確認された（3.1）。その内容を見ると、先行研究に示されていた一般的な大学進学動機と基本的な構造に共通点はあるが、一部に音楽専攻に特有の事情が反映していることが示された。特に「音楽的同一性（同一視）」因子は、入学前に長く楽器演奏のレッスン等を行う必要のある、この分野の学生に特徴的と思われる。この因子も含め、積極的な動機で進学を決めたと自認している学生は、大学での適応感も高めであり、特に「将来展望」が高い場合に、大学での専門知識や技能の習得意欲にも影響を与えているためか、良い適応につながっていることも示された（3.2, 4.1, 4.2）。

また、そのような積極的動機を醸成するのは、「家族から十分なサポートが得られている」と学生自身が感じられるかにかかっている部分があることも示された。家庭の音楽環境の豊かさについては、積極的な進学動機への直接の影響力は無く、家族のサポートを介して間接的な影響力が見られるのみであった。音楽経験の影響についても、入学前の音楽経験が長い場合が多い音楽大学の学生については、専攻ごとのばらつきは見られたものの、全体としての影響はほとんど確認できなかった（4.2）。

進学決定時期の分析からは、楽器のレッスン等の音楽経験をより早く始めている場合や、親（特に母親）が音楽関係の仕事の経験者である場合に、決定時期が早まる傾向が示唆された（5.1）。

進学理由等の男女差の検討では、女子学生のレッスン期間の長さや、それに伴う演奏への

¹ 本章の内容は、佐藤（2001）および佐藤（2011）で議論された内容を加筆修正したものである。

自信等が進学理由項目への回答データにも反映しており、音楽への一体感の高さ、周囲からのサポートの得やすさが窺える結果であった。男子学生については、父親の協力についての評価や、感動体験の高さについて女子よりも高い傾向も見られた (5.2.1)。また、葛藤に関する項目の男女差については、自分自身の悩みについて女子の平均値が高く、家族や教師との葛藤が生じやすいのは、男子である可能性が高いという結果が示された。ただし、進学に関する経済問題や卒業後の就職に関する学生自身の葛藤に男女差は見られず、どちらにとっても重要な問題であることが示唆された (5.2.2)。

さらに、将来希望するライフスタイルによって女子学生をタイプ分けした上で、将来の希望進路についての考え方の特徴を調べた。その結果、仕事の優先度が高いライフスタイルを希望する学生は音楽演奏や指導に関わる仕事に就くことを比較的強く望む傾向があり、仕事より家庭を優先するライフスタイルを希望する学生は、音楽の仕事に必ずしも就けなくても良く、趣味でもかまわないという考え方をする傾向が他のタイプよりは強いという傾向が見られた (5.3)。

なお、本研究の核となる、積極的な進学理由と大学での適応感、および 3 つの背景要因（音楽経験、家族のサポート、家庭の音楽環境）との関係を示すモデル (4.2 で作成したもの) の中で使用された諸変数について、調査時期による経年比較を行った結果、基本的には変化が見られないことを確認できた (第 6 章)。

また本研究の中で、B 大学の音楽専攻学生の進学調査データについては、主要な性格の 5 次元を測定する性格検査の下位尺度との相関分析を行うためにのみ取り上げた。分析結果から、N 尺度、E 尺度、O 尺度、A 尺度、C 尺度得点の高い学生が、進学調査で使用了項目に対して回答するパターンについて、内容的にも納得しやすい相関が確認できた。ただし、情緒の不安定性を示す N 尺度と「音楽的同一性」の 1 項目である「音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから」との間に正の相関がみられる等、音楽大学における適応を高める可能性のある音楽との一体感の高さが、一般的な心の健康度の高さとは必ずしも結び付かない可能性を示唆する結果も見られた (5.4)。

以上の結果を踏まえて、大学で音楽を専攻する意味を、学生自身がどのようにとらえているのかを考察していきたい。

まず、経済的側面に関わる学生の考え方について検討する上で、本研究においては実際に進学できた学生を対象に調査を行っており、その意味ではバイアスがかかったデータであることはふまえておく必要があると思われる。その中で、進学についての経済的な葛藤、つ

まり大学入学のコストに関する問題への学生自身の意識について、平均値を見る限り男女で有意差は確認されず、どちらも低いとはいえない値を示した。少なくとも、学生自身に何らかの心理的な負担を与えている場合もあることは否定できないだろう。

また、音楽大学進学へのメリットについては、進学理由として将来の仕事への展望を踏まえた決定をしたと自認する学生について、大学での適応感を高める傾向にあることから、大学進学のメリットを客観的に把握した進学が、大学での知識や技能の習得等にも良い影響を与えている可能性が示唆される。

一方、進学時の葛藤の中で、入学段階でのコストや将来の就職問題に関わる家族の懸念や、音楽大学に進学すること自体に家族や教師が反対することに関する項目への回答については、実際に入学を果たした学生対象の調査であったためか平均値は全体に低かったが、男子学生については女子学生と比較すると高めの値が示された。一般的な大学進学のメリットがより強く意識される男子について、少なくとも周囲の大人たちは女子学生よりもやや敏感に反応している姿がうかがえる。あるいは、音楽領域での仕事について、子どもの性別によって親が抱くイメージの違いが影響している可能性もあるだろう。

このような男女差に加えて、女子学生の将来の仕事に対する意識にばらつきが見られることも興味深い。自分がやりたい音楽の仕事に就くためには、結婚や子育てと何とか両立させて、場合によっては犠牲にしても仕事を続けたいという思いを持つ学生と、無理に音楽に関係する仕事をするよりは他の分野での仕事に就いて、音楽は趣味として続けても良いと考え、むしろ家庭生活を充実させたいという希望を持つ学生、および両者の中間領域に属する学生の存在が示唆されており、女子学生にとって音楽大学進学のメリットについての考えは、タイプにより大きく異なる可能性がある。

次に、大学への進学理由や進学後の適応感を中心とした心理的な問題からうかがえる、大学で音楽を専攻する意味についての学生自身の捉え方について考えてみたい。

先行研究で見出された進学動機にかかわる因子と、ある程度重なりのある因子が一連の調査結果から確認できた。つまり、「将来展望」や「能力活用」などは、音楽以外の分野でも見出される一般的な大学進学動機研究で見いだされた因子と内容的に重なるが、一方で「音楽的同一性」に関しては、音楽領域の進学における特有の因子であると考えられる。この因子が「将来展望」に次いで、かつ「能力活用」以上に適応感にプラスの影響をもたらす結果も示されていることから、この分野の学生の大学への適応について考える上で「音楽的同一性」という進学理由に関する因子は重要なものであると思われる。

以上のように、複雑な様相を示す音楽大学への進学に関する心理・社会的要因について、本研究が行われた意義については、次のように考えることができる。

まず、音楽大学へ進学した上で大学でより高い適応を示すことにつながるのは、積極的な進学理由（「将来展望」「音楽的同一性」「能力活用」）を持つことが関係している可能性があるという、一般的な大学進学動機研究や大学生の適応を扱った研究で示唆されていた内容と合致する結果が確認された。その上で、音楽との心理的結びつきの強さと関係する「音楽的同一性」因子は、音楽領域の進学に特有の因子であると思われ、このような因子が見いだされたことも本研究の意義の一つとして挙げることができるであろう。ただし、このような音楽領域に特有の進学理由因子である「音楽的同一性」が高いことよりも、将来の進路への具体的イメージを伴った知識や技能の習得を意識することがより高い適応と結びついていく可能性についても示唆された。

また、上に挙げたような積極的な進学理由を抱くためには、音楽経験や家庭の音楽環境の豊かさが単純に結びつくものではなく、むしろ家族からのサポートを学生が感じられていることが重要であることや、そのようなサポートの得やすさや家族を中心とした周囲との葛藤についてはジェンダーバイアスが見られること、本人の性格特性との関係も窺がえることを示すことができたことも本研究の意義として挙げることができるだろう。

音楽領域の進学を考える上で、やはり避けて通れないのは卒業後の進路問題であり、演奏の仕事等に限定して考える場合には、現実問題として困難を伴うことは予想できる。しかし、入学段階で学生自身に過度のプレッシャーとなる可能性や、そこに親や教育関係者の意識されていないジェンダーバイアス等の影響もあることをうかがわせる本研究の結果は、この領域の進路指導において、様々な背景要因を十分に理解した上での適切な指導が必要であることが示唆されるものである。長い音楽経験を持つ学生の場合、音楽との一体感が強く、ある意味では自己のアイデンティティの一部に取り込まれていると考えられることから、その点は十分に尊重した上で、現実的な将来の方向性を話し合えるような指導が行われることが望ましく、そのような指導が行われるための一資料として本研究の結果を生かすことは可能であろう。

7.2 本研究の課題と今後の展望

本研究が扱った調査対象は、実技指導中心の特殊な教育環境であるために、このような詳細な質問紙調査データを得ることが難しい面もあり、主に一大学中心のデータを使用することになったが、異なる性質を持つと思われる総合大学データも補完的に取ることはできた。完全な一般化を行うことは難しいにせよ、約 20 年にわたり安定した結果を示したことは本研究の意義と考えることができるが、今後可能であれば音楽領域の進学に関わる調査研究を継続的に行っていくことも望まれる。

また、今回は進学理由に示される本人の進学への動機づけと進学後の適応感との関係を中心にとりあげたが、今後このような研究を発展させる可能性として、例えば、大学における成績との関係についても検討を行うことはできるだろう。音楽領域の研究として、Harrison, Asmus & Serpe (1994) では、大学 1 年生の聴音と視唱の成績を予測するのは、音楽適性検査の成績や、高校における学業成績、および音楽経験であり、音楽に対する動機づけは何ら影響を与えていないとしているが、音楽に対する動機づけとの関係について検討する上で、音楽成績の指標として彼らを取り上げた科目の成績が妥当であったかどうかについても議論の余地はある。より適切な成績の指標を用いた上で、本研究で取り上げた諸変数との関係を調べていくことにも意味はあるだろう。しかし、それ以上に重要と思われるのは、本研究で主に扱った進学への動機づけと進学後の適応感が、大学卒業後の実際の進路や社会的成功とどのように関係するかである。ただし、このようなデータを取ることは意義深い反面、実際には難しい面も予想され、本研究では取り扱うことができなかった。今後の課題としたい。

最後に、本研究は特に音楽という専門領域に焦点をあてているが、いわゆる一般的な受験勉強とは別の準備を進学において必要とする領域は、美術系やスポーツ系など、他にも存在する。本研究は、そのような領域特有のキャリア発達過程をとらえるものの一例として、一定の意義があると考ええる。また、実際に進路指導を行う場面では、一人一人に対するアプローチを考えていくことが重要であろう。その際にも、このような多様な領域すべてについて研究することは困難であるとしても、可能な限り様々な発達過程を取り上げ、実証的なデータの積み重ねを行っていくことは有意義であるだろう。

謝辞

本研究を遂行し学位論文としてまとめるにあたり、多くの方々にお世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

はじめに、指導教員である倉元直樹先生（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授）には、多大なるご指導・ご支援をいただきました。今回の大学院入学以降についてはもちろんのこと、約 20 年前に参加させていただいた研究会において研究案の相談をさせていただいたことが本研究の発端の調査につながったことも含めて大変お世話になりました。再びの大学院生活の中で先生から学ばせていただいたことを、今後の研究生活に活かしていきたいと考えております。ありがとうございました。

副指導教員である宮本友弘先生（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授）には、学位取得に関する手続き的なことから、データ分析の問題点まで、広い範囲でアドバイスをいただきました。東北大学大学院への入学および学位取得について、先生のお勧め無しには現実的に可能であると考えすることはできなかったと思います。大変感謝しております。

審査委員である小嶋秀樹先生（東北大学 大学院教育学研究科・教育学部 教授）には、予備審査会、本審査会において有益なご示唆をいただきました。本論文の完成度が高まり、今後の課題も明確になりました。こちらの不手際でご迷惑をおかけした点もあったかと思いますが、先生の温かく的確なご指摘が本論文作成において励みとなりました。ありがとうございました。

そもそも、音楽行動に関わる心理学的な研究を行うことを考えるに至ったのは、故富田正利先生（当時 早稲田大学 教授）のご指導がきっかけでした。今でも先生の美声は忘れられません。富田先生のご退職以降につきましては、西本武彦先生（早稲田大学 名誉教授）から度々、励ましのお言葉をかけていただきました。もう少し早い時期に学位取得を目指したかったのですが、思うように進まずに先生にはご心配をおかけしていたと思います。また、越川房子先生（早稲田大学 教授）には、子育てをしながらの研究活動継続について様々なアドバイスをいただきました。豊田秀樹先生（早稲田大学 教授）には、本論文の初期の分析で使用した共分散構造分析に関して、基本的な使用法からご指導いただきました。時間はかかってしまいましたが、先生方からご指導いただいたことが、今日このような形で研究をまとめることにつながったと考えております。

また、星野悦子先生（上野学園大学 特任教授）には、音楽心理学に関わる研究を続けて

いく上で、たくさんのご指導・ご支援をいただきました。先生の研究者としての姿勢から多くを学ばせていただきました。今回の学位取得についても励ましていただき、大変感謝しております。

本論文の中で使用されたデータは、多くの学生の皆さんの質問紙調査へのご協力で得られたものです。調査データ収集にご尽力いただいた先生方にも大変お世話になりました。特に、磯部二郎先生（東海大学 教授）、沖野成紀先生（東海大学 教授）には、共同研究としてデータ収集したものを、本論文の一部として使用することを快く承諾していただきました。大変感謝しております。

最後になりましたが、年代や国籍を超えた女子会のように仙台通いを楽しませていただいた倉元研究室の皆さん、陰ながらずっと支えてくれた家族にも感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

引用文献

安達智子 (1999). 理科系大学 1 年生の大学選択動機と入学後の適応について——就業動機志向による比較—— 進路指導研究, 19(2), 22-29.

ビーチング, A. M. 箕口 一美(訳) (2008). BEYOND TALENT 日本語版 音楽家を成功に導く 12 章 水曜社

Davidson, J.W., & Borthwick, S.J. (2002). Family Dynamics and Family Scripts: A Case Study of Musical Development. *Psychology of Music*, 30, 121-136.

Davidson, J.W., Howe, M.J.A., Moore, D.G., & Sloboda, J.A. (1996). The role of parental influences in the development of musical performance. *British Journal of Developmental Psychology*, 14, 399-412.

Davidson, J.W., Howe, M.J.A., & Sloboda, J.A. (1997). Environmental factors in the development of musical performance skill over the life span. In D.J. Hargreaves, & A.C. North(Eds.) *The Social Psychology of Music* (pp. 188-206) . Oxford University Press.

Davidson, J.W., Moore, D.G., Sloboda, J.A., & Howe, M.J.A. (1998). Characteristics of music teachers and the progress of young instrumentalists. *Journal of Research in Music Education*, 46(1), 141-160.

Ericsson, K.A., Krampe, R.T., & Tesch-Romer, C. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100, 363-406.

瀬上克義 (1984). 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.

藤田武志 (2002). 家庭的背景に起因する進学希望の格差に及ぼす学校の教育的活動の効果——中学校の部活動に焦点をあてて—— 教育経営研究, 8, 39-48.

古澤照幸・山下利之 (1993). 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8, 98-106.

権藤与志夫 (1974). 高校生の進路決定に関連する諸要因に関する調査研究 (その一) 九州大学教育学部紀要 教育学部門, 20, 105-121.

濱田哲郎 (1981). 進路選択と適性 遠藤辰雄 (編) アイデンティティの心理学(pp.172-183) ナカニシヤ出版

Harrison, C.S., Asmus, E.P., & Serpe, R.T. (1994). Effects of musical aptitude, academic ability, music experience, and motivation on aural skills. *Journal of Research in Music Education*, 42(2), 131-144.

廣瀬英子 (1998). 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46, 343-355.

本田一成 (2010). 主婦パート——最大の非正規雇用—— 集英社新書

本田由紀 (2002). ジェンダーという観点から見たフリーター 小杉礼子(編) 自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動——(pp.149-174) 労働政策研究・研修機構

磯部二郎・佐藤典子・沖野成紀 (2010). 音楽専門課程への進学理由, 適応感, 卒業後の希望進路, およびこれらと性格との関係について 音楽教育学, 40, 1-13.

柏木繁男 (1997). 性格の評価と表現——特性 5 因子論からのアプローチ—— 有斐閣

小林雅之 (2008). 進学格差——深刻化する教育費負担—— ちくま新書

久保田慶一 (2008). 音楽とキャリア スタイルノート

久保田慶一 (2017). 2018 年問題とこれからの音楽教育 ヤマハミュージックメディア

倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2012). 看護系大学生の進路選択と履修経験に関する予備調査 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 7, 69-76.

栗山直子・上市秀雄・齋藤貴浩・楠見孝 (2001). 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究, 49, 409-416.

MacDonald, R.A.R., Hargreaves, D.J., & Miell, D. (Eds.) (2002). *Musical Identities*. New York: Oxford University Press.

Manturzewska, M. (1990). A biographical study of the life-span development of professional musicians. *Psychology of Music*, 18, 112-139.

松下由美子・木村周 (1997). 看護学生の進路選択と職業的同一性形成との関連 進路指導研究, 17(2), 12-18.

三川俊樹 (1985). 大学への進学決定に関する研究 進路指導研究, 6, 14-19.

ムジカノーヴァ編集部 (2001). 特集 全国 2000 人の音大生アンケートから考える——21 世紀に光る音大きくすぶる音大—— ムジカノーヴァ, 6, 29-54.

中島弘和 (2000). 大学教育の経済的効用と進路選択行動——私的内部収益率の再検討を通して—— 進路指導研究, 20(1), 33-40.

新村昌子 (2011). 音大生のための就職徹底ガイド——こんなにある、音楽の知識と経験が活かせる仕事—— ヤマハミュージックメディア

O'Neill, S. A. (1997). Gender and music. In D.J. Hargreaves, & A.C. North(Eds.) *The Social Psychology of Music*(pp. 46-63). Oxford University Press.

大内孝夫 (2015). 「音大卒」は武器になる ヤマハミュージックメディア

斉藤浩一 (2002). 大学志望動機が入学後のストレスおよび学校嫌いに及ぼす影響 進路指導研究, 21(1), 7-14.

佐藤典子 (2000). 音大生の希望するライフスタイルについて 日本心理学会第 64 回大会発表論文集, 1082.

佐藤典子 (2001). 音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について 教育心理学研究, 49, 175-185.

佐藤典子 (2002). 音楽大学への進学理由と適応感——因果モデルの再検討—— 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 1112.

佐藤典子 (2004a). 音楽大学への進学理由の男女差について——音楽経験および家族のサポートとの関連—— 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 1181.

佐藤典子 (2004b). 音楽大学への進学時の葛藤に関する男女差 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 369.

佐藤典子 (2005). 音楽大学への進学理由と進学後の適応に影響を与える諸要因の検討——音楽経験と家庭の音楽環境および家族のサポートについて—— 教育心理学研究, 53, 49-61.

佐藤典子 (2011a). 大学で音楽を専攻する意味 音楽心理学会論文誌, 4, 30-35.

佐藤典子 (2011b). 音楽大学への進学決定時期に影響を与える諸要因 日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集, 489.

佐藤典子 (2018). 音楽専攻学生の大学進学理由の経年変化について 日本教育心理学会第 60 回総会発表論文集, 257.

清水和秋・坂柳恒夫 (1988). 進路不決断と進路成熟——父親, 母親, 友人, 教師の影響に関する高校生の横断的な研究—— 進路指導研究, 9, 28-36.

下仲順子・中里克治・榎藤恭之・高山緑 (1999). NEO-PI-R NEO-FFI 共通マニュアル (成人・大学生用) 東京心理株式会社

Sloboda, J.A., Davidson, J.W., Howe, M.J.A., & Moore, D.G. (1996). The role of practice in the development of performing musicians. *British Journal of Psychology*, 87, 287-309.

Sloboda, J.A., & Howe, M.J.A. (1991). Biographical precursors of musical excellence: An interview study. *Psychology of Music*, 19, 3-21.

Sloboda, J.A., & Howe, M.J.A. (1999). Musical talent and individual differences in musical achievement: A reply to Gagne(1999). *Psychology of Music*, 27, 52-54.

杉江淑子 (2001). 音楽的趣味・嗜好にみられる男女間の相違とその形成要因——音楽の稽古事経験および家庭の音楽的環境の影響に焦点を合わせて—— 滋賀大学教育学部紀要教育科学, 51, 107-118.

高橋正臣 (1973). 人格形成を規定する要因分析(Ⅱ)——芸術先行者の性格特性について——大分県立芸術短期大学研究紀要, 10, 27-33.

橘木俊詔 (2008). 女女格差 東洋経済新報社

豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析[入門編]——構造方程式モデリング—— 朝倉書店

豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992). 原因をさぐる統計学——共分散構造分析入門——

講談社

上村敏文 (1995). 音楽大学出身者のキャリア形成について——ある女性音楽家のライフコースの実証的事例研究(III-4 部会 社会構造と教育(2)) —— 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 47, 142-143.

梅本堯夫 (1992). 音楽的発達過程の研究 (その 1) ——音楽大学生と一般女子大学生の事例研究—— 発達研究 (発達科学研究教育センター), 8, 163-178.

梅本堯夫 (1999). シリーズ人間の発達 11 子どもと音楽 東京大学出版会

梅本堯夫・三雲真理子 (1993). 音楽的発達過程の研究 (その 2) ——音楽大学生と一般女子大学生の比較研究—— 発達研究 (発達科学研究教育センター), 9, 99-110.

八木晶子・齊藤貴浩・牟田博光 (2000). 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 進路指導研究, 20(1), 1-8.

柳井晴夫 (1975). 進路選択と適性 日本経済新聞社

柳井晴男・前川眞一・鈴木規夫・石塚智一・豊田秀樹 (1993). 大学の各専門分野の進学適性に関する調査研究報告書——大学入学者選抜資料としての適性検査のための基礎資料—— 大学入試センター

横山美栄子 (1998). 音楽専攻生における進路選択要因の分析(1) ——音楽教育歴の観点から—— 九州女子大学紀要, 35(1), 55-72.

調査協力をお願い

この調査は、大学で音楽を専門的に学んでいる学生の皆さんの進学に関する意識について調査することを目的としています。この調査は東北大学大学院教育情報学研究部倫理委員会の許可を得て実施します。調査の趣旨を理解した上で、協力をお願いします。

最初に以下の各項目を読んでください。

記

1. 調査の目的と意義

この調査は、大学で音楽を学んでいる皆さんが、どのような理由で進学を決めたのか、また進学に関係する背景要因や、大学生生活および今後の進路への希望を調べることを目的としています。そのため、大学で音楽を専門に学んでいる学生の皆さん（1,2年生）に回答をお願いするものです。

2. 調査方法

大学で音楽を専攻することを決めた理由についての質問項目を含む、上記1の目的で述べた内容に関するアンケートに回答してもらいます。アンケートは全部で3枚分あります。アンケートの回答には、20～30分程度の時間を要する見込みです。

3. アンケート用紙の保管

調査の実施後、アンケート用紙は回収します。今後の研究に支障をきたす恐れがあるので、調査の内容を他人に知らせたり、公開したりしてはいけません。インターネットでの公開、SNSへの投稿等は厳禁です。

4. 成績との関係

この調査は、学校の成績とは一切関係がありません。

5. プライバシーの保護

データの整理上、専攻や年齢・性別を記入してもらいますが、データは全て数値化し、統計的に処理します。個人が特定されて公表されることはありませんので、安心して回答してください。また、データは調査の目的以外に用いることはありません。なお、調査に協力したくない場合は調査の実施担当者に申し出てください。

6. 記入済みアンケートの保管、結果通知

記入済みのアンケート用紙は返却しませんが、厳重に保管します。データを電子化する場合はセキュリティを掛け、情報が漏えいしないよう管理します。また、調査実施後3カ月程度（今年度中）をめぐり、今回の調査の全体の傾向をまとめ、お知らせします。

7. 調査結果の公表

調査結果は研究としてまとめ、関連学会や学会誌等の学術関係のメディアを通じて発表する予定です。

8. 調査により期待される利益

公表された研究成果を通じて、将来、音楽を大学で専門的に学ぶことを考えている、あるいは既に大学で学んでいる学生の皆さんの精神的健康の維持や増進、適切な進路選択への支援に役立てたいと考えています。

9. 調査協力への同意

終了後、記入済みのアンケート用紙を調査の実施担当者に提出することで、調査協力に同意したとみなします。

10. 調査中・終了後の対応

この調査に関する質問等がある場合には、調査の実施者に直接問い合わせてください。

研究代表者名記載欄

調査ご協力へのお願い

今年度も早や前期試験を終え、皆さんも気分も新たに学生生活を送られていることと思います。

さて、私は「音楽大学への進学理由」というテーマで現在、研究を進めております。そこで、研究に必要なデータを収集するために、アンケート調査を実施しております。

回答していただいたデータは統計的に処理され、個々の調査内容については、秘密を厳守いたしますので、皆さんにご迷惑をおかけすることは決してありません。プライバシーを守ることをお約束いたします。

なお、調査の結果は学会発表や論文の執筆等、主として研究活動に利用いたします。

以上の主旨をご理解いただき、この調査にご協力いただけますよう、よろしくお願い致します。

調査者名記載欄

I. 回答者に関する事項

以下の事項にご回答下さい。なお、() 内には適当な数字や言葉を記入し、その他については選択肢の中から一つ選び、該当する数字に○をつけてお答え下さい。

1) 年齢 () 歳

2) 性別 (1. 男 2. 女)

3) 学年 (1. 1 年生 2. 2 年生 3. 3 年生以上)

4) 学科／専攻

3. または 9. に○をつけられた方は、専攻している楽器を () 内にご記入下さい。
また、11. に○をつけられた方は、具体的な内容を () 内にご記入下さい。

1. 器楽学科 (ピアノ専攻)
2. 器楽学科 (オルガン専攻)
3. 器楽学科 (管・弦・打楽器専攻) 専攻楽器 ()
4. 声楽学科
5. 作曲学科
6. 音楽学学科
7. 音楽教育学科 (ピアノ専攻)
8. 音楽教育学科 (オルガン専攻)
9. 音楽教育学科 (管・弦・打楽器専攻) 専攻楽器 ()
10. 音楽教育学科 (声楽専攻)
11. その他 ()

5) 出身地 (県)

- | | | | | | | |
|--------|---------|--------|---------|--------|--------------|---------|
| 1. 北海道 | 2. 青森 | 3. 岩手 | 4. 宮城 | 5. 秋田 | 6. 山形 | 7. 福島 |
| 8. 茨城 | 9. 栃木 | 10. 群馬 | 11. 埼玉 | 12. 千葉 | 13. 東京 | 14. 神奈川 |
| 15. 新潟 | 16. 富山 | 17. 石川 | 18. 福井 | 19. 山梨 | 20. 長野 | 21. 岐阜 |
| 22. 静岡 | 23. 愛知 | 24. 三重 | 25. 滋賀 | 26. 京都 | 27. 大阪 | 28. 兵庫 |
| 29. 奈良 | 30. 和歌山 | 31. 鳥取 | 32. 島根 | 33. 岡山 | 34. 広島 | 35. 山口 |
| 36. 徳島 | 37. 香川 | 38. 愛媛 | 39. 高知 | 40. 福岡 | 41. 佐賀 | 42. 長崎 |
| 43. 熊本 | 44. 大分 | 45. 宮崎 | 46. 鹿児島 | 47. 沖縄 | 48. その他 (海外) | |

6) 現在の住居 (1. 自宅 2. 寮 3. 下宿)

Ⅱ. 現在、在学している大学に入学する前までの音楽経験についておうかがいします。

1) 学校の音楽の授業以外で、音楽のレッスンを受けたことがありますか。

受けたことがある方は、その①内容、②時期、③形式について、具体的にお答え下さい。なお、ここでいう①内容には、楽器演奏のほか、声楽、ソルフェージュ、楽典など、楽器を使わないものも含めて考えて下さい。

習ったものが複数ある方は、代表的なものから5つまで選んでご記入下さい。

ただし、初めて習ったものについては必ずご記入下さい。

また、一つの①内容について、習う場所の変更や、同時に2箇所以上で習っていた場合には、それぞれについて②および③の空欄にご記入下さい。

例：①（ピアノ） ②（ 5）歳～（ 10）歳 ③（ヤマハ音楽教室）
 ②（ 12）歳～（ 18）歳 ③（個人教室）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）
 ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

2) 1) に記入された①内容のうち、初めて習ったものを、始めたきっかけは以下の選択肢のうちどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。なお、3. に○をつけられた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。

1. 親がやらせたから。
2. 自分がやりたいと言ったから。
3. その他（ ）
4. おぼえていない。

付録 2.2

3) 学校の音楽の授業以外で、グループで行う音楽活動に参加したことがありますか。

参加したことがある方は、その①内容、②時期、③形式について、具体的にお答え下さい。なお、ここでいう①内容には、合唱、吹奏楽、オーケストラ、バンド活動などのほか、ミュージカルで歌を歌ったことなども含めて考えて下さい。

音楽活動が複数ある方は、代表的なものから3つまで選んでご記入下さい。

例：①（吹奏楽でフルートを吹く） ②（ 13）歳～（ 18）歳 ③（学校の部活動 ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

①（ ） ②（ ）歳～（ ）歳 ③（ ）

4) 音楽高校または高校の音楽（専攻）科などへの進学をしたか、あるいは進学を考えたことがありますか。以下の選択肢から、最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。

1. 進学した。
2. 進学を考えたが、他にもやりたいことがあったので進学はしなかった。
3. 進学を考えたが、準備が間に合わなかったので進学はしなかった。
4. 進学を考えたが、周囲に反対されたので進学はしなかった。
5. 進学を考えたが、受験がうまくいかず進学はしなかった。
6. 進学を考えたことはなかった。

5) 好きな音楽のジャンルについて、以下の選択肢のうち、あてはまるものすべてに、数字に○をつけてお答え下さい。なお、2.に○をつけた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。

1. 西洋クラシック音楽
2. 西洋クラシック音楽以外（ ）

Ⅲ. 家庭の音楽的環境について、以下の選択肢のうち、あてはまるものすべてに、数字に○をつけてお答え下さい。

1. 自宅が音楽教室である（あった）。
2. 父親が音楽に関わる仕事をしている（いた）。
3. 父親が音楽好きである。
4. 母親が音楽に関わる仕事をしている（いた）。
5. 母親が音楽好きである。
6. 兄弟姉妹が自分より先に音楽のお稽古をしていた。
7. 兄弟姉妹が音楽好きである。
8. その他の親族に、音楽に関わる仕事をしている人がいる（いた）。
9. その他の親族に、音楽好きな人がいる。

IV. 音楽大学に進学することを自分の中で決めた時期はいつでしょうか。以下の空欄にその時の年齢をご記入下さい。

() 歳ごろ

V. 音楽大学への進学を決めた理由として、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるでしょうか。各文章につき数字を一つ選んで○をつけてお答え下さい。

なお、以下の文章に出てくる「音楽の先生」には、学校の音楽の先生だけでなく、個人レッスンの先生なども含めて考えて下さい。

あ	ど	あ			
て	ち	て			
は	ら	は			
ま	や	な	で	や	な
る	や	い	も	や	い
5	4	3	2	1	

例) 友達が行くと知ったから。

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| 1) 音楽が好きだったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 2) 音楽活動の楽しさを知る特別な体験があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 3) 音楽の素晴らしさを知る感動的な体験があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 4) 特定の曲を演奏し（歌い）たかったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 5) 専門的な知識や技術を身につけたかったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 6) 希望の仕事につくために必要だと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 7) 自分の求めている生き方ができると思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 8) 自分の音楽的な才能に気づくことができたから。 | 5—4—3—2—1 |
| 9) 他の教科より音楽が得意だったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 10) 自分の能力を生かすことができると思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 11) 音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 12) 音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 13) 音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 14) 音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 15) 音楽活動を行うことで自分に自信が持てると思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 16) 父親の音楽活動に影響を受けたから。 | 5—4—3—2—1 |
| 17) 母親の音楽活動に影響を受けたから。 | 5—4—3—2—1 |
| 18) 父親のすすめがあったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 19) 母親のすすめがあったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 20) 父親の協力があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 21) 母親の協力があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 22) あこがれの音楽の先生のようになりたいと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 23) 音楽の先生のすすめがあったから。 | 5—4—3—2—1 |

- | | | | | | | |
|-----------------------------|---|---|---|---|---|---|
| | あ | ど | あ | | | |
| | て | ち | て | | | |
| | は | ら | は | | | |
| | ま | や | な | で | や | な |
| | る | や | い | も | や | い |
| 24) 両親以外の家族の影響があったから。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 25) 音楽を志す友人の影響があったから。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 26) 友人の励ましがあったから。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 27) なんとなく決めてしまった。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 28) 勉強はしたくないが、大学には行きたかったから。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 29) 音楽以外に得意な科目がなかったから。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 30) 音楽以外に好きなものがなかったから。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |

VI. 音楽大学への進学をさまたげる可能性のあった要因として、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるでしょうか。各文章につき数字を一つ選んで○をつけてお答え下さい。

なお、以下の文章に出てくる「音楽の先生」には、学校の音楽の先生だけでなく、個人レッスンの先生なども含めて考えて下さい。

- | | | | | | | |
|-------------------------------|---|---|---|---|---|---|
| | あ | ど | あ | | | |
| | て | ち | て | | | |
| | は | ら | は | | | |
| | ま | や | な | で | や | な |
| | る | や | い | も | や | い |
| 例) 気が変わったことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 1) 音楽以外の分野への進路を真剣に検討したことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 2) 進学に際しての経済的な問題で悩んだことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 3) 大学卒業後の就職を考えて悩んだことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 4) 練習が辛いので、やめたくなることがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 5) 自分の才能に自信が持てなくなったことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 6) 音楽が本当に好きかどうかわからなくなったことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 7) 音楽を専攻することについて、家族から反対された。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 8) 進学に際しての経済的な問題で、家族から反対された。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 9) 大学卒業後の就職を考えて、家族から反対された。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 10) 音楽の先生に、受験に間に合わないと言われた。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 11) 高校の担任や進路指導の先生などに反対された。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 12) 音楽の先生の指導方法が合わずに悩んだことがある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |

付録 2.2

VII. 現在の状況について、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるでしょうか。各文章につき数字を一つ選んで○をつけてお答え下さい。

あ	ど	あ			
て	ち	て			
は	ら	は			
ま	や	な	や	な	
ま	や	い	も	や	い
5	4	3	2	1	

例) 楽しく暮している。

- | | |
|------------------------------|-----------|
| 1) 大学での生活は充実している。 | 5—4—3—2—1 |
| 2) 大学に入ること、自分の音楽の幅が広がった。 | 5—4—3—2—1 |
| 3) 大学で必要な知識や技術が身につけられている。 | 5—4—3—2—1 |
| 4) 大学の先生とはうまくいっている。 | 5—4—3—2—1 |
| 5) 大学の友人とはうまくいっている。 | 5—4—3—2—1 |
| 6) 音楽以上にやってみたいことができた。 | 5—4—3—2—1 |
| 7) 音楽が嫌いになった。 | 5—4—3—2—1 |
| 8) 音楽に関して自信がなくなった。 | 5—4—3—2—1 |
| 9) 大学では、自分の好きな音楽ができないと思う。 | 5—4—3—2—1 |
| 10) 大学では、音楽以外にやるが多すぎると思う。 | 5—4—3—2—1 |
| 11) 音楽に関係するアルバイトなどをしたことがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 12) 将来の仕事について不安を感じる。 | 5—4—3—2—1 |
| 13) もう一度選べるおせるとしても音楽大学に進学する。 | 5—4—3—2—1 |
| 14) もう一度選べるおせるとしても今の専門を選ぶ。 | 5—4—3—2—1 |

VIII. 大学卒業後の進路について、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるでしょうか。各文章につき数字を一つ選んで○をつけてお答え下さい。

あ	ど	あ			
て	ち	て			
は	ら	は			
ま	や	な	や	な	
ま	や	い	も	や	い
5	4	3	2	1	

例) 平穏に暮すことを考えている。

- | | |
|--|-----------|
| 1) 西洋クラシック音楽の演奏家（声楽含む）になることを考えている。 | 5—4—3—2—1 |
| 2) 西洋クラシック音楽以外の演奏家（声楽含む）になることを考えている。 | 5—4—3—2—1 |
| 3) 音楽制作に直接かかわる仕事（作曲、編曲など）につくことを考えている。 | 5—4—3—2—1 |
| 4) 学校の音楽の先生になることを考えている。 | 5—4—3—2—1 |
| 5) 学校以外（音楽教室、個人指導など）の音楽の先生になることを考えている。 | 5—4—3—2—1 |

付録 2.2

- | | | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|---|---|
| | あ | ど | あ | | | | |
| | て | ち | て | | | | |
| | は | ら | は | | | | |
| | ま | や | な | で | や | な | ま |
| | る | や | い | も | や | い | ら |
| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | |
- 6) 音楽療法士など、音楽で人を助ける仕事につくことを
考えている。 5—4—3—2—1
- 7) 音楽関連産業への就職を考えている。 5—4—3—2—1
- 8) 音楽とは関係のない仕事につくことを考えている。 5—4—3—2—1
- 9) 大学卒業後さらに音楽について勉強するつもりである。 5—4—3—2—1
- 10) 大学卒業後の進路についてまだ考えていない。 5—4—3—2—1
- 11) 音楽は趣味で続けられればよいと思う。 5—4—3—2—1
- 12) 好きな仕事が続けられるなら、収入が不安定でもかまわ
ないと思う。 5—4—3—2—1

IX. 女性の方のみに質問します。以下のライフスタイルのうち、あなたが希望するものはどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。
なお、7.に○をつけられた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。また、ここで言う「仕事」はあなたがつきたいと思っている仕事と考えて下さい。

1. 結婚したら、仕事はやめると思う。
2. 結婚したら、家の中でできる仕事をすると思う。
3. 子どもができたら、仕事はやめると思う。
4. 子どもができたら仕事はやめるが、子どもが大きくなったら再び働くと思う。
5. 結婚しても子どもができて関係なく、ずっと働き続けると思う。
6. ずっと働き続けたいので、結婚はしないと思う。
7. その他（ ）

X. 男性の方のみに質問します。以下のライフスタイルのうち、あなたが希望するものはどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。
なお、7.に○をつけられた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。また、ここで言う「好きな仕事」は収入が不安定になりがちであるものという前提で考えてください。

1. 結婚したら、好きな仕事より収入の安定した仕事を選ぶと思う。
2. 結婚しても、共稼ぎにするなど工夫して、好きな仕事を続けようと思う。
3. 子どもができたら、好きな仕事より収入の安定した仕事を選ぶと思う。
4. 結婚しても子どもができて関係なく、好きな仕事を続けようと思う。
5. 好きな仕事で収入が安定するまでは結婚しないと思う。
6. はじめから好きな仕事より収入の安定した仕事を選ぶと思う。
7. その他（ ）

ご協力ありがとうございました。

調査ご協力へのお願い

今年度に入り既に数ヵ月がたち、暑気日ごとに加わる季節となりましたが、皆さんには楽しく学生生活を送られていることと思います。

さて、私たちは学生の皆さんの普段の学校での生活や、これまでの音楽とのかかわりについて研究を行なっております。そこで、研究に必要なデータを収集するために、アンケート調査を実施しております。

回答していただいたデータは統計的に処理され、個々の調査内容については、秘密を厳守致しますので、皆さんにご迷惑をおかけすることは決してありません。プライバシーを守ることをお約束致します。

なお、調査の結果は、学会発表や論文の執筆等の研究活動と当音楽学課程における今後の教育の改善に利用致します。

以上の主旨をご理解いただき、この調査にご協力いただけますよう、よろしくお願い致します。

調査者名記載欄

1. 現在、在籍している大学に入学する前までの音楽経験についておうかがいします。1.1. 学校の音楽の授業以外で、音楽関係の習い事をしたことがありますか。

習ったことがある方は、その内容と開始年齢および経験年数について、具体的にお答え下さい。

習ったものが複数ある方は、経験年数が長いものから順に5つまで選んで記入して下さい。

ただし一番幼い時に習い始めたものは必ず記入して下さい。

例) 内容 (ピアノ) 開始年齢 (5) 歳 経験年数 (13) 年間

1) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

2) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

3) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

4) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

5) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

1.2. 1.1. に記入された内容のうち、一番幼い時に習い始めたものを、始めたきっかけは以下の選択肢のうちどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。なお、3. に○をつけられた方は、具体的な内容を () 内にご記入下さい。

1. 親がやらせたから。

2. 自分がやりたいと言ったから。

3. その他 ()

4. おぼえていない。

1.3. 学校の音楽の授業以外で、グループで行う音楽活動に参加したことがありますか。

参加したことがある方は、その内容と開始年齢および経験年数について、具体的にお答え下さい。

音楽活動が複数ある方は、主要なものから順に3つまで選んで記入して下さい。

例: 内容 (高校の吹奏楽部でフルートを吹く) 開始年齢 (15) 歳 経験年数 (3) 年間

1) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

2) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

3) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

1.4. 音楽高校または高校の音楽 (専攻) 科などへの進学をしたか、あるいは進学を考えたことがありますか。以下の選択肢から、最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。

1. 進学した。

2. 進学を考えたが、他にもやりたいことがあったので進学はしなかった。

3. 進学を考えたが、準備が間に合わなかったので進学はしなかった。

4. 進学を考えたが、周囲に反対されたので進学はしなかった。

5. 進学を考えたが、受験がうまくいかず進学はしなかった。

6. 進学を考えたことはなかった。

1.5. 次に挙げた音楽のジャンルについて、どのくらい好んでいるかを評価して下さい。

評価するには、とても好き（5）～とても嫌い（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。なお、そのジャンルについて、どのような音楽であるのかよくわからない場合、□の中に×印を書き入れ、評価は行わないで下さい。

また、以下に挙げられていないジャンルであっても、代表的と思われるものがあれば、具体的なジャンル名を、その他の（ ）内に記入した上で評価を行って下さい。

	とても好き	やや	どちらでも ない	やや	とても嫌い	
例) 行進曲	5	4	3	2	1	□
ア. J-POP	5	4	3	2	1	□
イ. 歌謡曲	5	4	3	2	1	□
ウ. 洋楽ポップス	5	4	3	2	1	□
エ. クラシック	5	4	3	2	1	□
オ. ロック	5	4	3	2	1	□
カ. ジャズ	5	4	3	2	1	□
キ. ヒップホップ	5	4	3	2	1	□
ク. レゲエ	5	4	3	2	1	□
ケ. 演歌	5	4	3	2	1	□
コ. 日本民謡	5	4	3	2	1	□
サ. 純邦楽（雅楽、箏曲など）	5	4	3	2	1	□
シ. 民族音楽	5	4	3	2	1	□
ス. その他（ ）	5	4	3	2	1	□

2. 家庭の音楽的環境について、以下の選択肢のうち、あてはまるものすべてに、数字に○をつけてお答え下さい。

1. 自宅が音楽教室である（あった）。
2. 父親が音楽に関わる仕事をしている（いた）。
3. 父親が音楽好きである。
4. 母親が音楽に関わる仕事をしている（いた）。
5. 母親が音楽好きである。
6. 兄弟姉妹が自分より先に音楽のお稽古をしていた。
7. 兄弟姉妹が音楽好きである。
8. その他の親族に、音楽に関わる仕事をしている人がいる（いた）。
9. その他の親族に、音楽好きな人がいる。

3. 大学で音楽を専攻することを自分の中で決めた時期はいつでしょうか。以下の空欄にその時の年齢をご記入下さい。

（ ） 歳ごろ

4. 大学で音楽を専攻することを決めた理由として、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。なお、以下の文章に出てくる「音楽の先生」には、学校の音楽の先生だけでなく、個人レッスンの先生なども含めて考えて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 友達が行くと知ったから。

5—4—3—2—1

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| 1) 音楽が好きだったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 2) 音楽活動の楽しさを知る特別な体験があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 3) 音楽の素晴らしさを知る感動的な体験があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 4) 特定の曲を演奏し（歌い）たかったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 5) 専門的な知識や技術を身につけたかったから。 | 5—4—3—2—1 |
| | |
| 6) 希望の仕事につくために必要だと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 7) 自分の求めている生き方ができると思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 8) 自分の音楽的な才能に気づくことができたから。 | 5—4—3—2—1 |
| 9) 他の教科より音楽が得意だったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 10) 自分の能力を生かすことができると思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| | |
| 11) 音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 12) 音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 13) 音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 14) 音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 15) 音楽活動を行うことで自分に自信が持てると思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| | |
| 16) 父親の音楽活動に影響を受けたから。 | 5—4—3—2—1 |
| 17) 母親の音楽活動に影響を受けたから。 | 5—4—3—2—1 |
| 18) 父親のすすめがあったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 19) 母親のすすめがあったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 20) 父親の協力があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| | |
| 21) 母親の協力があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 22) あこがれの音楽の先生のようにになりたいと思ったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 23) 音楽の先生のすすめがあったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 24) 両親以外の家族の影響があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 25) 音楽を志す友人の影響があったから。 | 5—4—3—2—1 |
| | |
| 26) 友人の励ましがあったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 27) なんとなく決めてしまった。 | 5—4—3—2—1 |
| 28) 勉強はしたくないが、大学には行きたかったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 29) 音楽以外に得意な科目がなかったから。 | 5—4—3—2—1 |
| 30) 音楽以外に好きなものがなかったから。 | 5—4—3—2—1 |

5. 音楽系への進学をさまたげる可能性のあった要因として、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。なお、以下の文章に出てくる「音楽の先生」には、学校の音楽の先生だけでなく、個人レッスンの先生なども含めて考えて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 気が変わったことがある。

5——4——③——2——1

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1) 音楽以外の分野への進路を真剣に検討したことがある。 | 5——4——3——2——1 |
| 2) 進学に際しての経済的な問題で悩んだことがある。 | 5——4——3——2——1 |
| 3) 大学卒業後の就職を考えて悩んだことがある。 | 5——4——3——2——1 |
| 4) 練習がつらいので、やめたくなることがある。 | 5——4——3——2——1 |
| 5) 自分の才能に自信が持てなくなったことがある。 | 5——4——3——2——1 |
| | |
| 6) 音楽が本当に好きかどうかわからなくなったことがある。 | 5——4——3——2——1 |
| 7) 音楽を専攻することについて、家族から反対された。 | 5——4——3——2——1 |
| 8) 進学に際しての経済的な問題で、家族から反対された。 | 5——4——3——2——1 |
| 9) 大学卒業後の就職を考えて、家族から反対された。 | 5——4——3——2——1 |
| 10) 音楽の先生に、受験に間に合わないと言われた。 | 5——4——3——2——1 |
| | |
| 11) 高校の担任や進路指導の先生などに反対された。 | 5——4——3——2——1 |
| 12) 音楽の先生の指導方法が合わずに悩んだことがある。 | 5——4——3——2——1 |

6. 現在の状況について、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 楽しく暮している。

5——④——3——2——1

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1) 大学での生活は充実している。 | 5——4——3——2——1 |
| 2) 大学に入ることによって、自分の音楽の幅が広がった。 | 5——4——3——2——1 |
| 3) 大学で必要な知識や技術が身につけられている。 | 5——4——3——2——1 |
| 4) 大学の先生とはうまくいっている。 | 5——4——3——2——1 |
| 5) 大学の友人とはうまくいっている。 | 5——4——3——2——1 |
| | |
| 6) 音楽以上にやってみたいことができた。 | 5——4——3——2——1 |
| 7) 音楽が嫌いになった。 | 5——4——3——2——1 |
| 8) 音楽に関して自信がなくなった。 | 5——4——3——2——1 |
| 9) 大学では、自分の好きな音楽ができないと思う。 | 5——4——3——2——1 |
| 10) 大学では、音楽以外にやるべきことが多すぎると思う。 | 5——4——3——2——1 |

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない
	5	4	3
	2	1	
11) 音楽に関係するアルバイトなどをしたことがある。	5	4	3
12) 将来の仕事について不安を感じる。	5	4	3
13) もう一度選びなおせるとしても大学で音楽を専攻する。	5	4	3

7. 大学卒業後の進路について、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない
	5	4	3
	2	1	
例) 平穩に暮すことを考えている。	5	4	3
	2	1	
1) 西洋クラシック音楽の演奏家（声楽含む）になることを考えている。	5	4	3
2) 西洋クラシック音楽以外の演奏家（声楽含む）になることを考えている。	5	4	3
3) 音楽制作に直接かかわる仕事（作曲、編曲など）につくことを考えている。	5	4	3
4) 学校の音楽の先生になることを考えている。	5	4	3
5) 学校以外（音楽教室、個人指導など）の音楽の先生になることを考えている。	5	4	3
6) 音楽療法士など、音楽で人を助ける仕事につくことを考えている。	5	4	3
7) 音楽関連産業への就職を考えている。	5	4	3
8) 音楽とは関係のない仕事につくことを考えている。	5	4	3
9) 大学卒業後さらに音楽について勉強するつもりである。	5	4	3
10) 大学卒業後の進路についてまだ考えていない。	5	4	3
11) 音楽は趣味で続けられればよいと思う。	5	4	3
12) 好きな仕事が続けられるなら、収入が不安定でもかまわないと思う。	5	4	3
13) 家の中でできる仕事がしたいと思う。	5	4	3

8. 女性の方のみに質問します。以下のライフスタイルのうち、あなたが希望するものはどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。なお、7.に○をつけられた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。また、ここで言う「仕事」はあなたがつきたいと思っている仕事と考えて下さい。

1. 仕事を続けたいので、結婚はしないと思う。
2. 結婚しても子どもは持たずに、仕事を続けると思う。
3. 結婚や出産を経験しても、長期の中断はしないで仕事を続けると思う。
4. 結婚または出産により仕事はやめるが、余裕ができれば再び働くと思う。
5. 結婚または出産により仕事はやめると思う。
6. 一生仕事はしないと思う。
7. その他（ ）

9. 男性の方のみに質問します。以下のライフスタイルのうち、あなたが希望するものはどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。なお、7.に○をつけられた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。また、ここで言う「好きな仕事」は収入が不安定になりがちであるものという前提で考えてください。

1. 好きな仕事を続けたいので、結婚はしないと思う。
2. 結婚しても子どもは持たずに、好きな仕事を続けると思う。
3. 結婚や子どもの誕生に関係なく、好きな仕事を続けると思う。
4. 結婚や子どもの誕生に合わせ、他の仕事もするなど工夫して、好きな仕事を続けると思う。
5. 結婚または子どもの誕生により、収入の安定した仕事に転職すると思う。
6. はじめから好きな仕事より収入の安定した仕事を選ぶと思う。
7. その他（ ）

10. 回答者に関する事項

以下の事項にご回答下さい。なお、() 内には適当な数字や言葉を記入し、その他については選択肢の中から一つ選び、該当する数字に○をつけてお答え下さい。

1) 学生番号 ()

2) 氏名 ()

3) 主に勉強したい領域

1. 音楽療法
2. 教員・指導者
3. 学芸員・音楽マネジメント
4. 演奏家
5. 音楽学
6. 作曲・音響メディア

4) 主に勉強したい実技種目 ()

5) 学内外でクラブ・サークルに入っていますか。入っている場合は、何のクラブ・サークルであるか、具体的にお答え下さい。

1. 入っていない
2. 入っている ()

6) アルバイトをしていますか。している場合は、どのような業種であるか、具体的にお答え下さい。

1. していない
2. している (音楽関係)
3. している (音楽以外の教育関係)
4. している (その他のサービス業)
5. している (コンピュータ関係)
6. している (その他:)

☆☆☆☆☆ご協力ありがとうございました。☆☆☆☆☆

進学意識についてのアンケート調査

「調査協力をお願い」をお読みいただき、この調査の主旨を理解し、協力することに同意をいただきましたら、これ以降の質問への回答をよろしくお願い致します。

研究代表者名記載欄

1. 現在、在籍している大学に入学する前までの音楽経験についておうかがいします。

1.1. 学校の音楽の授業以外で、音楽関係の習い事をしたことがありますか。

習ったことがある方は、その内容と開始年齢および経験年数について、具体的にお答え下さい。

習ったものが複数ある方は、経験年数が長いものから順に5つまで選んで記入して下さい。

ただし一番幼い時に習い始めたものは必ず記入して下さい。

- 例) 内容 (ピアノ) 開始年齢 (5) 歳 経験年数 (13) 年間
 1) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間
 2) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間
 3) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間
 4) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間
 5) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

1.2. 1.1. に記入された内容のうち、一番幼い時に習い始めたものを、始めたきっかけは以下の選択肢のうちどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。 なお、3. に○をつけられた方は、具体的な内容を () 内にご記入下さい。

1. 親がやらせたから。
2. 自分がやりたいと言ったから。
3. その他 ()
4. おぼえていない。

1.3. 学校の音楽の授業以外で、グループで行う音楽活動に参加したことがありますか。

参加したことがある方は、その内容と開始年齢および経験年数について、具体的にお答え下さい。

音楽活動が複数ある方は、主要なものから順に3つまで選んで記入して下さい。

- 例: 内容 (高校の吹奏楽部でフルートを吹く) 開始年齢 (15) 歳 経験年数 (3) 年間
 1) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間
 2) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間
 3) 内容 () 開始年齢 () 歳 経験年数 () 年間

1.4. 音楽高校または高校の音楽 (専攻) 科などへの進学をしたか、あるいは進学を考えたことがありますか。以下の選択肢から、最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。

1. 進学した。
2. 進学を考えたが、他にもやりたいことがあったので進学はしなかった。
3. 進学を考えたが、準備が間に合わなかったので進学はしなかった。
4. 進学を考えたが、周囲に反対されたので進学はしなかった。
5. 進学を考えたが、受験がうまくいかず進学はしなかった。
6. 進学を考えたことはなかった。

1.5. 次に挙げた音楽のジャンルについて、どのくらい好んでいるかを評定して下さい。

評定する際には、とても好き（5）～とても嫌い（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。なお、そのジャンルについて、どのような音楽であるのかよくわからない場合、□の中に×印を書き入れ、評定は行わないで下さい。

また、以下に挙げられていないジャンルであっても、代表的と思われるものがあれば、具体的なジャンル名を、その他の（ ）内に記入した上で評定を行って下さい。

	どちらも					
	とても好き	やや	ない	やや	とても嫌い	
例) 行進曲	5	4	3	2	1	□
ア. J-POP	5	4	3	2	1	□
イ. 歌謡曲	5	4	3	2	1	□
ウ. 洋楽ポップス	5	4	3	2	1	□
エ. クラシック	5	4	3	2	1	□
オ. ロック	5	4	3	2	1	□
カ. ジャズ	5	4	3	2	1	□
キ. ヒップホップ	5	4	3	2	1	□
ク. レゲエ	5	4	3	2	1	□
ケ. 演歌	5	4	3	2	1	□
コ. 日本民謡	5	4	3	2	1	□
サ. 純邦楽（雅楽、箏曲など）	5	4	3	2	1	□
シ. 民族音楽	5	4	3	2	1	□
ス. その他（ ）	5	4	3	2	1	□

2. 家庭の音楽的環境について、以下の選択肢のうち、あてはまるものすべてに、数字に○をつけてお答え下さい。

1. 自宅が音楽教室である（あった）。
2. 父親が音楽に関わる仕事をしている（いた）。
3. 父親が音楽好きである。
4. 母親が音楽に関わる仕事をしている（いた）。
5. 母親が音楽好きである。
6. 兄弟姉妹が自分より先に音楽のお稽古をしていた。
7. 兄弟姉妹が音楽好きである。
8. その他の親族に、音楽に関わる仕事をしている人がいる（いた）。
9. その他の親族に、音楽好きな人がいる。
10. 父親が音楽大学（または、大学など高等教育機関の音楽専攻）の出身である。
11. 母親が音楽大学（または、大学など高等教育機関の音楽専攻）の出身である。

3. 大学で音楽を専攻することを自分の中で決めた時期はいつでしょうか。以下の空欄にその時の年齢をご記入下さい。

（ ） 歳ごろ

4. 大学で音楽を専攻することを決めた理由として、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。なお、以下の文章に出てくる「音楽の先生」には、学校の音楽の先生だけでなく、個人レッスンの先生なども含めて考えて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 友達が行くと知ったから。

5 — 4 — 3 — 2 — 1

- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| 1) 音楽が好きだったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 2) 音楽活動の楽しさを知る特別な体験があったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 3) 音楽の素晴らしさを知る感動的な体験があったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 4) 特定の曲を演奏し（歌い）たかったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 5) 専門的な知識や技術を身につけたかったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 6) 希望の仕事につくために必要だと思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 7) 自分の求めている生き方ができると思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 8) 自分の音楽的な才能に気づくことができたから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 9) 他の教科より音楽が得意だったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 10) 自分の能力を生かすことができると思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 11) 音楽を自分から取り上げたら何も残らないと思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 12) 音楽は自分の一部分であり、やめられないと思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 13) 音楽活動を行うことが自分にとって自然であったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 14) 音楽が、精神的に不安定な時の支えになったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 15) 音楽活動を行うことで自分に自信が持てると思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 16) 父親の音楽活動に影響を受けたから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 17) 母親の音楽活動に影響を受けたから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 18) 父親のすすめがあったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 19) 母親のすすめがあったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 20) 父親の協力があったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 21) 母親の協力があったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 22) あこがれの音楽の先生のようになりたいと思ったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 23) 音楽の先生のすすめがあったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 24) 両親以外の家族の影響があったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 25) 音楽を志す友人の影響があったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 26) 友人の励ましがあったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 27) なんとなく決めてしまった。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 28) 勉強はしたくないが、大学には行きたかったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 29) 音楽以外に得意な科目がなかったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 30) 音楽以外に好きなものがなかったから。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

5. 音楽系への進学をさまたげる可能性のあった要因として、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。なお、以下の文章に出てくる「音楽の先生」には、学校の音楽の先生だけでなく、個人レッスンの先生なども含めて考えて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 気が変わったことがある。

5—4—3—2—1

- | | |
|-------------------------------|-----------|
| 1) 音楽以外の分野への進路を真剣に検討したことがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 2) 進学に際しての経済的な問題で悩んだことがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 3) 大学卒業後の就職を考えて悩んだことがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 4) 練習がつらいので、やめたくなることがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 5) 自分の才能に自信が持てなくなったことがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 6) 音楽が本当に好きかどうかわからなくなったことがある。 | 5—4—3—2—1 |
| 7) 音楽を専攻することについて、家族から反対された。 | 5—4—3—2—1 |
| 8) 進学に際しての経済的な問題で、家族から反対された。 | 5—4—3—2—1 |
| 9) 大学卒業後の就職を考えて、家族から反対された。 | 5—4—3—2—1 |
| 10) 音楽の先生に、受験に間に合わないと言われた。 | 5—4—3—2—1 |
| 11) 高校の担任や進路指導の先生などに反対された。 | 5—4—3—2—1 |
| 12) 音楽の先生の指導方法が合わずに悩んだことがある。 | 5—4—3—2—1 |

6. 現在の状況について、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 楽しく暮している。

5—4—3—2—1

- | | |
|------------------------------|-----------|
| 1) 大学での生活は充実している。 | 5—4—3—2—1 |
| 2) 大学に入ることによって、自分の音楽の幅が広がった。 | 5—4—3—2—1 |
| 3) 大学で必要な知識や技術が身につけられている。 | 5—4—3—2—1 |
| 4) 大学の先生とはうまくいっている。 | 5—4—3—2—1 |
| 5) 大学の友人とはうまくいっている。 | 5—4—3—2—1 |
| 6) 音楽以上にやってみたいことができた。 | 5—4—3—2—1 |
| 7) 音楽が嫌いになった。 | 5—4—3—2—1 |
| 8) 音楽に関して自信がなくなった。 | 5—4—3—2—1 |
| 9) 大学では、自分の好きな音楽ができないと思う。 | 5—4—3—2—1 |
| 10) 大学では、音楽以外にやることが多すぎると思う。 | 5—4—3—2—1 |

付録 2.4

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| 11) 音楽に関係するアルバイトなどをしたことがある。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 12) 将来の仕事について不安を感じる。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 13) もう一度選びなおせるとしても大学で音楽を専攻する。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

7. 大学卒業後の進路について、以下に挙げる内容が、あなたにどのくらいあてはまるかを評定して下さい。評定する際には、あてはまる（5）～あてはまらない（1）の中から一つ数字を選んで○をつけて下さい。

あては どちらでも あてはま
まる やや ない やや らない

例) 平穏に暮すことを考えている。 ⑤ — 4 — 3 — 2 — 1

- | | |
|--|-------------------|
| 1) 西洋クラシック音楽の演奏家（声楽含む）になることを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 2) 西洋クラシック音楽以外の演奏家（声楽含む）になることを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 3) 音楽制作に直接かかわる仕事（作曲、編曲など）につくことを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 4) 学校の音楽の先生になることを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 5) 学校以外（音楽教室、個人指導など）の音楽の先生になることを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 6) 音楽療法士など、音楽で人を助ける仕事につくことを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 7) 音楽関連産業への就職を考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 8) 音楽とは関係のない仕事につくことを考えている。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 9) 大学卒業後さらに音楽について勉強するつもりである。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 10) 大学卒業後の進路についてまだ考えていない。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 11) 音楽は趣味で続けられればよいと思う。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 12) 好きな仕事が続けられるなら、収入が不安定でもかまわないと思う。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 13) 家の中でできる仕事がしたいと思う。 | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

8. 女性の方のみに質問します。以下のライフスタイルのうち、あなたが希望するものはどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。なお、7. に○をつけられた方は、具体的な内容を（ ）内にご記入下さい。また、ここで言う「仕事」はあなたがつきたいと思っている仕事と考えて下さい。

1. 仕事を続けたいので、結婚はしないと思う。
2. 結婚しても子どもは持たずに、仕事を続けると思う。

3. 結婚や出産を経験しても、長期の中断はしないで仕事を続けると思う。
4. 結婚または出産により仕事はやめるが、余裕ができたなら再び働くと思う。
5. 結婚または出産により仕事はやめると思う。
6. 一生仕事はしないと思う。
7. その他()

9. 男性の方のみに質問します。以下のライフスタイルのうち、あなたが希望するものはどれでしょうか。最もよくあてはまるものを一つ選び、数字に○をつけてお答え下さい。なお、7.に○をつけられた方は、具体的な内容を()内にご記入下さい。また、ここで言う「好きな仕事」は収入が不安定になりがちであるものという前提で考えてください。

1. 好きな仕事を続けたいので、結婚はしないと思う。
2. 結婚しても子どもは持たずに、好きな仕事を続けると思う。
3. 結婚や子どもの誕生に関係なく、好きな仕事を続けると思う。
4. 結婚や子どもの誕生に合わせ、他の仕事もするなど工夫して、好きな仕事を続けると思う。
5. 結婚または子どもの誕生により、収入の安定した仕事に転職すると思う。
6. はじめから好きな仕事より収入の安定した仕事を選ぶと思う。
7. その他()

10. 回答者に関する事項

以下の事項にご回答下さい。なお、()内には適当な数字や言葉を記入し、その他については選択肢の中から一つ選び、該当する数字に○をつけてお答え下さい。

- 1) 年齢 () 歳
- 2) 性別 (1. 男 2. 女)
- 3) 学年 (1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生以上)
- 4) 学部 () / 学科 () / 主に学んでいる楽器等 ()

5) 学内外でクラブ・サークルに入っていますか。入っている場合は、何のクラブ・サークルであるか、具体的にお答え下さい。

1. 入っていない
2. 入っている ()

6) アルバイトをしていますか。している場合は、どのような業種であるか、具体的にお答え下さい。

1. していない
2. している (音楽関係)
3. している (音楽以外の教育関係)
4. している (その他のサービス業)
5. している (コンピュータ関係)
6. している (その他:)

☆☆☆☆☆ご協力ありがとうございました。☆☆☆☆☆

Psychological and social factors in admission to music college

Analysis of questionnaire data on reasons for entering music college and, post-admission adaptation

Noriko Sato

Abstract

This research focused on admission to music college, which is considered a special type of education in Japan. We conducted a multifaceted analysis of psychological and social factors related to music school admission. We analyzed data of students' responses to a questionnaire survey on their cognition of the reasons for entering a music college, and their adaptation to music college after admission.

This thesis consists of seven chapters.

An overview of this research is presented in Chapter 1. Firstly, the current situation regarding the admission to institutions of higher education for music in Japan is described. It is necessary to acquire knowledge and skills over time before enrolling in colleges for specialized fields such as music, which is unlike the admission to ordinary universities in Japan. Next, psychological and social problems related to general university admission are discussed. Then, the development of music specialists is reviewed as a representative career in music. In addition, psychological and social problems in attending music college were focused as the main topic of this study. Finally, the purpose of this research as a whole and the main content of the study are described.

Chapter 2, outlines the analytical data used in this study. Questionnaire survey data were collected from students attending a music college in three waves over approximately 20 years (1999-2000, 2009-2010, and 2017). This chapter describes the questionnaire survey and the participants in the survey in detail. Next, the composition of the questionnaire survey items and the replacement of certain items in some survey years are described. The ethical considerations of this study are also mentioned.

The purpose of Chapter 3, Section 1 (3.1) is to analyze the reasons for entering a music college. Therefore, the survey in 1999 targeted 1st and 2nd-year students in a music

college. Oblique factor analysis was conducted on responses to questions inquiring about the reason for entering a music college by female students ($N = 378$). The results indicated that reasons for entering school consisted of five factors: "Perspective on the future", "Use of one's abilities", "Identification", "Recommendation by another person", and "Passive motive". Positive correlations were found among the first three factors, and these factors were related to positive motives. Section 3.2 examined the influence of perceived reasons for entering a music college on adaptation to the college using a covariance structure analysis. As a result, a model of the relationship between reasons for going to music college and the feeling of adaptation was developed. Also, differences in responses among different courses were compared. The results indicated that positive motives lead to adaptation to all the courses in the college.

In Chapter 4, Section 1 (4. 1), 2000 data points were added to the survey, and the factor analysis described in 3.1 and the model developed in 3.2 were re-analyzed to ensure their reliability. In Section 4.2, we identified three factors indicating the possibility of enhancing the sense of adaptation to college among the factors consisting of reasons for entering a music college extracted in 3.1. To examine the variables influencing the formation of these factors, we conducted a covariance structure analysis to develop a model. Factors that influenced positive motives such as Use of one's abilities, Perspective on the future and Musical identity (Identification) were affected by musical experience before admission to college, family support for admission to college, and the family music environment. The support of the family showed the clearest influence on reasons for entering music college. The influence of Music experience on reasons for entering a music college was less significant and depended on the courses taken by the students, suggesting that the music environment has indirect influence through family support.

In Chapter 5, the characteristics of students in music college and the relationship between questionnaire scores and personality scores are described. First, various factors that influence the time of deciding to enter music college are illustrated. Next, gender differences in items describing the reasons for entering college and worries and problems in admission are examined to identify possible effects of gender bias of important others. Also, the study demonstrates the relationship between the lifestyle desired by female

students majoring in music and the desired path after graduation. The relationship between responses to items in the student-admission questionnaire and data of personality scales administered to students studying for a music major in another university was also examined.

Chapter 6, focuses on the structural relationships of the model, which is central to the study that was developed in Section 4. 2. The data of studies conducted in 2009, 2010 and 2017 were combined to examine changes caused by the subsequent social situation. Although a few indicators differed in different fiscal years, the results confirmed that these differences were caused by differences in the courses that the participants were studying. Moreover, there were no significant changes in the structure of underlying psychological and social factors related to entering music college during this period, and the findings of the study remained useful and valid.

Based on the results of the above analysis, a comprehensive discussion is conducted in Chapter 7. Factors such as Perspective on the future and Use of one's abilities were identified as positive motivators in the field of music, similar to those found in research on the motives for admission to universities in general. The study also demonstrated a tendency to have higher adaptation to the music college in students that entered college for positive reasons, and because of Musical identity, which is one positive reason for entering music college that was characteristic of this field. Moreover, the importance of students feeling the full support of their families, rather than being directly influenced by their music experiences or the music environment of their families was indicated in the background of positive reasons for entering music college. Also, a gender bias in obtaining family support was suggested. In addition to music studies, other fields of study than general studies, such as art and physical education studies, also require advance preparation. This research focused on the specialty of music; however, it is suggested that the findings of the study are important for other fields of studies with a career development path that is unique to the field.